

靈界物語 第五卷 眞善美愛 午の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五五卷』愛善世界社

2006(平成18)年04月02日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

總説歌 そうせつか

第一篇 奇縁萬情 きえんばんじやう

第一章 心轉 しんてん 〔一四〇九〕

第二章 道謠 だうえう 〔一四一〇〕

第三章 萬民まんみん 〔一四一〕

第四章 眞異ましがひ 〔一四二〕

第五章 飯めしの灰はひ 〔一四三〕

第六章 洗濯せんたくし使 〔一四四〕

第二篇 縁えんさんちようばう三寵望

第七章 朝餉あさげ 〔一四五〕

第八章 放棄はうき 〔一四六〕

第九章 三婚みこん 〔一四七〕

第一〇章 鬼淚おになみだ 〔一四八〕

第三篇 玉置長蛇たまきちやうだ

第二一章	第二〇章	第一九章	第一八章	第一七章
嬉 <small>うれし</small> 涙 <small>なみだ</small>	萬 <small>まん</small> 面 <small>めん</small>	清 <small>きよ</small> 瀧 <small>たき</small>	音 <small>おん</small> 頭 <small>ど</small>	萬 <small>まん</small> 巖 <small>がん</small>
〔一四二九〕	〔一四二八〕	〔一四二七〕	〔一四二六〕	〔一四二五〕

第四篇 法ほ念ふ舞ねん詩ぶし

第一六章	第一五章	第一四章	第一三章	第一二章	第一章
幽 <small>いう</small> 貝 <small>かひ</small>	公 <small>こう</small> 盜 <small>たう</small>	春 <small>しゅん</small> 陽 <small>よう</small>	蘇 <small>そ</small> 歌 <small>か</small>	靈 <small>れい</small> 婚 <small>こん</small>	經 <small>きやう</small> 愕 <small>がく</small>
〔一四二四〕	〔一四二三〕	〔一四二二〕	〔一四二一〕	〔一四二〇〕	〔一四一九〕

第二章 比丘〔一四三〇〕

序文 じよぶん

(明) けく治まる御代の三十一年春は如月の九日天教山に鎮座したまふ木花姫命の神使斯世を

(治) めむと神々の協議の結果をもたらし坐丹波の國曾我部の村に牛飼ふ牧童の辛末の年生れ

(三) ツの御魂に因縁ある三葉彦命の再生なる神柱に三千世界の修理固成の神業の先驅を命じ

(十) 字架を負はしめたまひしより今年大正の十二年正月十八日まで満二十五年間出口王仁は

(一) 心不亂に神國成就のために舍身的活動を續けて宇宙萬有一切の爲に心身を

焦がし奉り十

(年) 一日の如く三千世界の諸天人民に至上の心を持せしめ神の御國に安住せし

めむと妙法眞

(如) の光明を顯彰し暗黒社會を照破すべく變性男子の精靈と俱に綾の聖場地の

高天原に現れ

(月) 光菩薩の神業に心事し家を捨て欲を棄てて神の僕となり微妙眞心を發こし

一向に我神國

(九) 山八海の諸神を念願し諸の功德を修して高天原に萬人を救はむことを希ふ

大國常立大神

(日) の大神月の大神は神を愛し神を理解し信眞の徳に充たされたる者を天界に

救ふべく最と

(高) き神人を率ゐて靈肉脱離の際に來迎し直ちに寶座の前に導きて七寶の花の

臺に成道し虎

(熊) 狼などの惡獸をも恐れざる不退轉の地位に住して智慧勇猛神通自在ならし

め玉ふ噫天教

(山) に現はれたまふ木花姫の無上の神心に神習ひ大功德を修行して顯幽兩界の神柱となり人

(の) 人たる本分を盡さしめ玉ふ伊都の御魂の大御心の有難さ瑞月は多年の間千難萬苦を排し

(修) 行の效を了え漸く神界より赦されて爰に謹み畏こみ三世一貫の物語を口述するを得たり

(行) して神使となること能はずとも當に無上の神心を發し一向に天地の大祖神を祈願し眞心を

(よ) り可成的善行を修して齋戒を奉持し神の聖社を建立するの一端に仕え神使に飲食を心よ

(り) 供養し神號輻を祀り燈火を獻じ祝詞を奏上し神の御前に拜跪せば天界に生れしめ玉はむ

(今) 生は云ふも更なり來世に到りて智慧證覺を全ふし愛善の徳に住して身に光

明を放射し兆

(年)の久しき第二の天國に安住し得べし又十方世界の諸天人民にして至心ありて天國淨土に

(大)往生を遂げむと欲するものは譬え諸の功德を成す能はずと雖も常にこの物語を信じ無上

(正)覺を得て一向に嚴瑞二神を一意專念せば神徳いつとなく身に具足して現幽兩界共に完全

(十)足の生涯を樂み送ることを得べしこの深遠なる教理を眞解して歡喜し信樂して疑惑せず

(二)心を斷ち一向に神教と神助を信じ至誠一貫以て天國に復活せむ事を願ふ時は臨終に際し

(正)に夢の如くに嚴瑞二神即ち日月の神を見たてまつりて至美至樂の第三天國に復活すべし

(月)神の信眞によりて智慧證覺の光明を受くること第二即ち中間天國の天人の

如くなるべし

(十) 方世界の無量無邊不可思議の聖徳を具有する諸神諸佛如來宣傳天使は大國常立大神の徳

(八) 荒に輝き給ふを稱讚して其の出現聖場たる蓮華臺上に集り給ひ無量無數の菩薩や衆生は

(日) 月の光を仰ぎ奉りてここに往詣して洪大無邊の神徳に浴し克く恭敬禮拜し供物を獻じた

(ま) ひて神慮を慰め且つ五六七神政の胎藏經たる經緯の神諭と聖なる靈界物語を歡喜聽受し

(て) 顯幽二界の消息に通じ天下の蒼生に至上の神理を宣布し東西南北四維上下を光輝し月光

(満) ちて一切の神人各自に天界の妙華と寶香と無價の神衣とを以て無量の證覺を供養し顯幽

(二) 大世界は咸然として天樂を奏し和雅の音を暢發し最勝最妙と大神柱を謳歎

し神徳を覺り

(十) 方無碍の神通力と智慧とを究達して深法界の門に遊入し功德藏を具足して妙智等倫無く

(五) 逆消滅して慧日世間を照らし生死の雲を消除し給ふべし嗚呼惟神の靈光天に輝く月と日に

(星) の如くにして莊嚴清淨の天國を現じたまふ靈主體從の至上心を發揮し神に奉仕する時は

(霜) 雪の寒氣も忽ち變じて春陽の生氣と化し三界一時に容を動かして欣笑の聲を發し無限光

(を) 出して十方世界を照らせ玉ふ靈光を以て身を圍繞せしめ圓相を具し天人と俱に踊躍し

(經) 緯の神人に由つて大歡喜の心境に遊入すべし若し人にして善徳なき時は此の神啓の神書の

(た) るを覺らず且つ理解し得ざるべし清淨無垢にして小兒の如き心境に在る者

にして根本こんぽんよ

(り) 其眞實そのしんじつみ味を聞きくことを獲うべし驕慢きやうまんと惡あしき弊へいと懈怠けたいとは容易たやすく神示しんじに成なり就なりたる是この

(靈) 語神聲ごしんせいを信しんずる事能ことあたはざるべし心身清淨しんしんじやうじやうにして能よく神かみを信しんじ克よく神かみに仕つかえ神かみを愛あいし精靈せいれい

(界) の諸消息しよせうそくを探知たんちしたるものは歡喜雀躍くわんぎじやくやくしてこの神言靈教しんごんれいけうを聽聞ちやうもんし聖心せいしんを極きはめて一切いっさいの事じ

(物) を開導かいだうするに至いたるべし神界しんかいの主神すしんたる大國常立大神おほくにとこたちのおほかみの愛善あいぜんの德とくと信眞しんしんの光くわう明みやうは彌廣いやひろく言げん

(語) の盡つくし得うる所ところにあらず二乘にじやうの測知そくちし得うる限かぎりにあらず只大神自身ただおほかみじしんのみ獨ひとり明瞭めいれうにこの間かん

(の) 經緯眞相けいゐしんさうを知悉ちしつしたまふ而已のみたとへ一切いっさいの人ひとにして智慧證覺ちゑしやうかくを具備ぐびして道みちを悟さとりこれを

(口) に手てに現あらはさむと欲ほつするも又本空またほんくうの眞理しんりを知しり萬億劫まんおくごふの神智しんちを有いうする共とも到たう

底^{てい}これを口^{くち}に

(述^の) ぶること能^{あた}はざる可^べし神^{かみ}の智^ち慧^ゑと證^{しよ}覺^{かく}には邊^{へん}際^{ざい}なく絶^{ぜつ}對^{たい}なりアア愚^ぐ昧^{まい}頑^{がん}固^こなる人^{にん}間^{げん}智^ちを

(開^{ひら}) きて最^{さい}奥^{あう}第^{だい}一^{いち}の天^{てん}界^{かい}は云^いふも更^{さら}なりせめて第^{だい}三^{さん}の^か下^そ層^{そう}天^{てん}界^{かい}の消^{せう}息^{そく}を覺^{さと}らしめ無^む限^{げん}絶^{ぜつ}對^{たい}無^む

(始^し) 無^む終^{しゆ}の神^{しん}德^{とく}に浴^{よく}せしめむとする吾^ご人^{じん}の苦^く衷^{ちゆう}何^い時^つの世^よにかこの目^{もく}的^{てき}を達^{たつ}し得^えむや口^{こう}述^{じゆつ}開^{かい}始^し

(よ) り既^{すで}に十^{じふ}五^ごヶ月^{かげつ}未^{いま}だ神^{しん}諭^ゆに目^め覺^ざめたる人^{じん}士^しの極^{きは}めて少^{せう}數^{すう}にして偶^{たま}々^{たま}信^{しん}ずる者^{もの}あるも元^{もと}よ

(り) 上^{じやう}根^{こん}の人^{ひと}にあらざれば僅^{わづ}かにその門^{かど}口^{ぐち}に達^{たつ}したる迄^{まで}の状^{じやう}態^{たい}にありアア如何^{いか}にせむ神^{しん}將^{じやう}三^{さん}

(十) 三^{じふ}相^{さん}を具^ぐ備^びし玉^{たま}へる觀^{くわん}世^ぜ音^{おん}菩^ぼ薩^{さつ}最^{さい}勝^{しやう}妙^{めう}如^に來^{らい}の道^{だう}化^けの妙^{めう}法^{ほふ}瑞^{みづ}の御^み魂^{たま}の千^{せん}變^{べん}萬^{ばん}化^{くわ}の大^{だい}活^{くわつ}動^{どう}三^{さん}

(五) 教^なの大本^{たいほん}五^み六^{ろく}七^{しち}の仁^{じん}慈^じに浴^{よく}して各^{かく}自^じにその智^ち慧^ゑを充^みたせ深^{ふか}く神^{しん}諭^ゆの深^{しん}奥^{あう}に

分け入りて箇

(箇)の神性を照し神理の妙要を究暢し神通無礙の境地に入りて諸根を明利なら

しめたまへと

(月)光如來の聖前に拜跪して鈍根劣機の男女をして神意を識らしめ五濁惡世に

生じて常に執

(着)の妖雲に包まれ苦しめる蒼生をして清く正しく理解するの神力を與え金剛

法身を清め兩

(手)に日月の光を握らせ玉え鈍根劣機癡愚の生涯を送りつつある神の僕の瑞月

が謹み畏こみ

(日)に夜に眞心を捧げて天下萬民のために大前に祈願し奉る三五教の聖場五六

七の大神殿に

(數)多の聖教徒日夜に參集して道教を宣傳し妙法を演暢したまふ神使の言に歡

喜し心解し得

(は)四方より自然に神風起りて普く松柏の寶樹を吹き鳴らし五大父音の神聲を

出して天下無

(二)の妙華を降らし風に随つて宇内を周遍し天の岩戸開きの神業は易々として

天地主宰神八

(百)萬の神と俱に宇都の神業は大成され神示の許になれる是の神書靈界物語を

著はしたる連

(日)の辛苦も稍々その光明を輝かし得るに至る可し大聖五六七の神靈地上に降

臨して宇宙間

(に)羅列棋布せる一切萬有を濟度し玉ふその仁慈は大海の如く慧光また明淨に

して日月の如

(し)清白の神法具足して圓滿豐備せること天教山の如く諸の神徳を照らし玉ふ

こと等一にし

(て)淨きこと大地の如し淨穢好惡等の異心なきが故に猶ほ清淨なる泉の如く塵

勞もろもろの

(五)逆十惡を洗除し玉ふが故に猶ほ火王の如く一切煩惱の薪を燒滅し玉ふこと

猶大風の如く

(十) 方世界を行くに障礙なきが故に猶ほ虚空の如く一切の有に於て執着無きが故に蓮の如く

(五) 濁の汚染なく眞に月の皎々として蒼天に輝くが如し之れ月の大神の眞相にして靈界物語

(編) 述する時の吾人の心境なりアア何時迄も志勇精進にして心神退弱せず世の燈明となり暗

(を) 照らし常に導師となりて愛善の徳に住し正しきに處して萬民を安んじ三垢の障りを滅し

(終) 身三界のために大活躍せしめ玉ひて口述者を始め筆録者の眞心を永遠に輝かし玉へと祈

(る) も嬉し五十五編の靈界物語茲に慎み畏み神助天祐の厚きを感謝し奉るアア惟神靈幸坐世

大正十二年三月五日 舊正月十八日

總説歌

待ちに待つたる三月三日 三ツの御魂の開口

大く正しき正月の 中の六日の朝日影

東の空を彩りて 書齋の窓を射照らしつ

奇しき尊き神ツ代の 顯幽神の物語

守らせたまふ神の家 言靈車の軋る音

只一言も漏らさじと 息をこらして松村加藤

いよいよ五十と五の坂を スタスタ登り北村の

隆く光れる日の本の 國の眞秀良場疊並はる

青垣山に包まれし 綾の聖地の龍宮館

四ツ尾の靈山桶伏の 山を左右に眺めつつ

寫すも嬉し印度の國 八ルナの都に蟠まる

八岐大蛇の悪霊を
神の稜威に守られて

言向和はす三五の
神の教の宣傳使

治國別の龜彦が
常磐の松の心より

五六七の御代を松彦や
教を四方に龍彦の

珍の司の波斯の國
猪倉山に割據せる

婆羅門教の宣傳使
軍の司を兼ね居たる

鬼春別や久米彦の
醜のゼネラル始とし

スパール、エミシのカーネルを
神の誠の言靈に

助けて玉置の村司
チームス首陀の愛娘

二人を救ひ救援に
向ひて敵に捕はれし

道晴別やシーナまで
救ひ出して立ち歸り

萬公の徒弟にスガール姫
配し姉のスミエルを

シーナの妻と定めつつ
茲に目出度結婚の

儀式をすませ一同に
神の教を克く諭し

松彦龍彦從えて 神のまにまに月の國
 ハルナを差して進み行く 後に残りしバラモンの
 マーシャル鬼春別司 久米彦スパール、エミシ等が
 悔悟の念に堪えかねて 髪を剃して比丘となり
 ビクトル山の谷間に 庵を結び三五の
 珍の教に眞心を 捧げて清く仕えたる
 尊き神代の物語 述べ始めたる今日こそは
 心樂もしき春の空 四方の山邊も雪解けて
 和知の流れも滔々と 水量増るみづ御魂
 心を洗ふ如くなり ああ惟神々々
 御魂幸倍ましませよ。

大正十二年三月三日 舊正月十六日

第一篇 奇縁萬情

第一章 心轉〔一四〇九〕

仰げば高し久方の

高天原に現れませる

天地の造主とます

大國常立大御神

瑞の御靈を分け玉ひ

靈國にては月の神

天國にては日の神と

現はれまして天地の

百の靈を悉く

莊嚴無比の天界に

助けむものと御心を

配らせ玉ひ三五の

教を天地に擴充し

百の神々選り出して

三千世界の宣傳使

代表神となし玉ふ

百の司を統一し
黄金山や四尾山

コーカス山やウブスナの
齋苑の館に神柱

堅磐に常磐に立て玉ひ
世人を導き玉ひつつ

天国浄土を地の上に
築かせ玉ふ尊さよ

三千世界の梅の花
一度に開く常磐木の

松の縁もスクスクと
天に向つて伸びて行く

巖の御霊や瑞御霊
三五の月は大空に

丸き姿を現はして
下界を覗き玉ふ夜半

猪倉山の溪谷を
右へ飛び越え左へ渡り

バラモン教の曲軍
三千餘騎の屯せる

岩窟さして登り行く
ああ惟神々々

神の力を身に受けて
醜の雲霧悉く

治國別の一行が
畫尚暗き松林

心も清き松彦や
聖地を後に龍彦の

司つかさと共にともスタスタとたど辿りてのぼ登るよる夜の道みち

萬公司まんこうつかさは肩かた腕ひぢを張はつて先頭せんとうに立たち乍ながら

尾をの上へを渡わたる風かぜの如ごと谷たにの流ながれの速はやき如ごと

習ならひ覺おぼえし宣傳歌せんでんか四邊あたりの山彦やまびこ威喝あかして

勢いきほひ込んで登のぼり行ゆく鬼おに春別はるわけや久米彦くめひこの

軍いくさの君きみに捉とらはれて岩窟いはやの中なかの陷おとし棄あな

聞きくも悲ひ慘さんな境遇きやうぶつにおかれしよ四人にんの肉體にくたいを

救すくひ出いだすはこの時ときと岩いはの根ね木の根ね踏ふみさくみ

漸やつやく岩窟いはやに辿たどり着つき治國はるくに別わけと諸共もろともに

神かみの力ちからに守まもられて軍いくさの君きみを言こと向むけつ

四人よにんを救すくひスタスタと猪倉山いのくらやまを驅かけ下くだり

玉木たまきの村むらのテームスが館やかたを指さして歸かへり行ゆく

五ご十じふ五ご卷くわんの物語ものがたり天津日あまつひの神かみ中空ちうくうに

輝かがき玉たまへど風寒かぜさむき龍宮館りうぐうやかたに横よこたはり

十一日の四つ時に 四角な火鉢を横におき

焜爐のゴトゴト沸る音 いと面白く聞き乍ら

四角の炬燵に潜りこみ 四角な座布団積み重ね

枕となして述べて行く 吾言靈の發射をば

万年筆を手に握り 四角な机に寄りかかり

只一言も洩らさじと 手具脛ひいて松村氏

心眞澄の空清く いとスクスクと記し行く

五六七の神の物語 いよいよ茲につけとむる

ああ惟神々々 御靈の恩頼を賜へかし

花咲き鳥は君ヶ代の 榮えを唄ふ春過ぎて

青葉もそよぐ初夏の風 川の流れも泡立ちて

ライオン河に上る鮎 小鮎や鰻鯰まで

ピンピンシヤンと澆ね乍ら 一瀉千里に遡る

瑞の御靈の物語 今より三十五萬年

あななひけつ 三五教の神人の 舍身苦行の有様を

の 述べゆく今日こそ 樂しけれ 旭は照る共曇る共

つき 月は盈つ共虧くる共 假令大地は沈む共

あがことたま 吾言靈の壽は 幾萬年の末までも

かきはときは 堅磐常磐に失せざらむ 此世を救ふ生神の

うつつ 貴の言靈滔々と 千代に八千代に流れゆく

そのみなかみ 其水上の一滴 萬年筆の切先に

したた 滴る露の御惠 渴き果てたる靈をば

うるほ 露ひ活かす物語 守らせ玉へ惟神

みいづ 御稜威も高き大八洲彦 神の命の御前に

かしこ 畏み畏み願ぎまつる。

はいぐん 敗軍の大將、退却の名人、色情狂に等しき鬼春別、久米彦兩將軍は、今度こそ
いか 如何なる敵の襲來も恐るる事なき金城鐵壁と、心を許し、猪倉山の岩窟に、玉

木の村の豪農チームスの娘、スミエル、スガールの二女を誘拐し、權威に任せ、獸欲劣情を發揮せむと軍務を打忘れ、兩將軍は互に戀を争ひつつ、心を悩ませ、競争の眞最中、三五教の宣傳使道晴別に踏み込まれ、周章狼狽の結果奇計を以て四人の男女を深き陥穽に投込み、又もや何れかの婦女を誘拐し、戀の欲望を達せむと、心を悩ます折もあれ、治國別一行に、夜中踏み込まれ、二度ビツクリの結果、いよいよ前非を悔い丸腰となつて、治國別に謝罪をなし、卑怯未練にも山寨を捨て、四人の男女を負ひ、玉木村のチームスが館に、恐る恐る謝罪を兼て行く事となつた。

治國別は鬼春別久米彦兩將軍に向ひ、治國「ゼネラルの御威勢、御芳名は豫て承はつて居りましたが、親しくお目にかかるのは今日が初めてでムいます。先づ先づ御兩所共、御壯健にてお目出度うムいます。斯くなる上は四海同胞、元より拙者とゼネラルとの間に於て、何の怨恨もなければ面倒なる経緯もありませぬ。同じ天地の間に生を享けたる神の御子、どうか、今後は宜しく互に御懇親を願ひたうムいます。敵なきに軍隊を動かし、

或は小さき欲望の爲、一人の暴虐者の爲に従僕となつて、豺狼に等しき戦に従ふは、人間として之以上の悲惨事はありません。人生僅か三百年、此短き生命の間、不老不死なる第二の靈界に於ける生涯の爲に、遺憾なき準備をしておかねば、人間として現世に生れ來りし本分を永遠に保持する事は出来ずまい。人は遷善改過の神性を惟神的に、神より賦與されて居りますから、今此時に於て懺悔の生活に入り、神の御子たる本分を發揮されむ事を希望致します」

鬼春「ハイ有難うムいます。今日となつて吾々も始めて天地開明の氣分になりました。尊き有難き神の慈光に照らされて、今迄爲し來りし暴虐無道の行動が、俄に恐ろしくなり、廣い天地に身の置き所なき苦みに悶えて居ります。一日も早く悔い改め、誠の道に立歸りたうムります。何分宜しく御指導を御願致します」

久米「治國別の神司様を始め、御一同様に謹んで、鬼春別將軍同様に、吾身を御指導下さらむ事を懇願致します。實に只今の拙者の心は闇を離れて旭に向つた様な氣分になりました。そして神様の神力に打たれて、身の置き所もなき程恥しく苦しくなつてきました。何卒三五の尊き教を御指導あらむ事を、謹んでお願致します」

ます』

萬公 『もし先生、眉毛に唾をつけてお聞きなさいませや、第二の高姫かも知れま

せぬぞや。……怖さ苦しみの改心は何にもならぬぞよ。心から發根の改心でなけ

れば、すぐに後へ戻るから、何程うまい事を申しても、メツタに乗るではないぞ

よ……とお筆先に出て居りますぞや。萬公が一寸御注意を致します』

龍公 『コリヤ萬公、お前の分る事ぢやない。黙つて控えて居なさい』

萬公 『へん、偉相に仰有いますなア。夢の内に第一天國を探險したと思つて、さ

う威張るものぢやありませんぞや』

治國 『ゼネラル様、然らば之より四人の男女が少し許り負傷して居りますれば、

兔も角玉木村のチームス館迄送らねばなりません、貴方も一緒に参りませう』

鬼春 『ハイ、是非お供をさして頂きます。付いては四人を負傷さしましたのも、

全く吾々でムいますから、此山坂を背に負ひ申して送らして貰ひませう』

治國 『左様な事をなさらないでも、貴方の家來も澤山あるでせう』

鬼春 『イエイエ何程家來があつても、家來の知つた事ではありません。又今日只

今改心を致しました上は、一人の家來も持ちませぬ。何卒罪亡ぼしに、道晴別様の馬となつて背に乗せ、送り届けさして貰ひませう。之がせめてもの拙者の罪亡

ぼし、枉げてお許しを願ひます」

治國「然らばお望みに任しませう」

久米「拙者はシーナさまを背に負ひ、お供を致しませう」

萬公「拙者はスガールさまを背に負うてお送り致しませう」

久米「ヤ、滅相な、スガールさまはエミシに負はせませう」

鬼春「オイ、スパール、お前も責任がないとは言へぬ。何卒スミエルさまを背に

負うてお送り申すやうにしてくれ」

萬公「モシ先生、何程改心したと云つても、こんな半獸的豪傑に女を渡すのは劍

呑です。一人は背に負ひ、一人は拙者が手を曳いて、送りますから、婦人部は此

萬公に御委任を願ひます。油斷のならぬ男許りですからなア」

治國「アハハハ、萬公なら、尚劍呑だ。兔も角鬼春別様の御意見に任す事にする」

萬公「へーエ、さうですかなア、……コレ松彦さま、貴方何う考へますか、どう

もマ一つ此萬公は油斷がならないやうな氣がしますがなア」

松彦「さうだ、萬公位油斷のならぬ男はないだらう、アハハハ」

鬼春別はシヤム、マルタのカーネルを招んで自分が愈前非を後悔し、三五教に歸順し、普通の信者となつて、神の爲世の爲に相當の働きをなし、世に隠る事を告げ、軍隊一般に向つて其由を傳達せしめ、且つ何れも本國に歸つて、正道につき各其家業を勵むべき事を傳達せしめた。三千の軍隊は案に相違の命令に呆れ果て、喜んで歸るものもあり、又ブツブツ小言を云つて自由自在に本國へは歸らず、思ひ思ひの事業を考へ、身の振方を定むるもあり、種々雑多の方向に向つて別れ行く事となつた。されど素より烏合の衆のみなれば殘黨を集めて、今一戦を起し、バラモンの教主大黒主の爲に一肌脱がむとする勇者も出なかつたのは、天下の爲に幸である。

治國別は先づ第一に岩窟を出で、數多の軍人が各解散の命を受けて、一言も呟かず抵抗もせず素直に歸り行くを見て、全く大神の御神力と、大地に靜座し、三五教を守り玉ふ大神を始め、バラモン神及盤古神王の厚き守護を感謝し、愈猪倉

山を一行十二人降り行く。

(大正一二・二・二六 舊一・一一 於龍宮館 松村眞澄録)

第二章 道謡(一四一〇)

鬼春別ほか三人はチエニエクもホーレージ・キャップも取外し、クリーケース
氣分に離れて、性來の本心にシンブリ・フヂケーシヤンし乍ら、生れ赤兒の様な
氣になつて、治國別と共にゴロゴロした岩と岩との間を傳うて、重い男を背に負
ひ、一歩々々、三五教の祝詞は分らぬ爲、バラモンの御經を唱へ乍ら、汗をタラ
タラ流して下り行く。鬼春別は今迄のゼネラル生活に似もやらず、苦力の様な御
用を志願し、せめてもの罪亡ぼしと覺悟をきわめ、聲を限りに、
☐ 東方には降三世明王。南方には軍荼利夜叉明王。西方には大威徳明王。北方に
は金剛夜叉明王。中央には大日大聖不動明王。唵呼嚕々々、旋荼利摩登積、唵阿

毘羅吽見娑婆呵、吽多羅屯干まん、見我身者、發菩提心、
見我身者、發菩提心、
聞我名者、斷惡修善、聽我說者、得我智慧、知我心者、即身成佛、
知我心者、即
身成佛、阿耨多羅三藐三菩提心、歸命頂禮、修法加持、南無波羅門大尊天
と一生懸命に祈つてゐる。久米彦も負ず劣らず、鬼春別の鬘に倣うて、
經文を稱
へむとしたが、餘りの苦しさに言句つまり、一生の肝玉を放り出して、
三五教の
讚美歌を捻り出し歌つて見た。不思議にも三五教の歌なれば、
水の流るる如く、
惟神的にほとばしり、身體の苦痛も何時しか忘れて了つた。

久米 神が表に現れて 善神邪神を立別ける

何猪口才な三五の 神の使が如何にして

神力無限の自在天 大國彦に敵し得む

馬鹿を盡すも程がある 只一息に攻め寄せて

三五教の神柱 一泡吹かしくれむずと

はるばるハルナを立出でて 夜を日についで大野原

險しき山を攀ぢ登り

沼河數多打渡り

浮木の森に屯して

吾れは片彦將軍と

馮河暴虎の勢で

河鹿峠を登り行く

神の守りし此軍

いかでか敵に破れむや

進め進めと下知しつ

河鹿峠の八合目

進む折しも宣傳使

治國別が現れて

生言靈を打出し

其神力に壓倒され

全體くづれ逃出す

其光景の惨めさよ

おぢけついたる吾々

進みもならず退くも

吾神軍の體面に

拘り來る一大事

暫くここで瘦我慢

張つて時節を待つべしと

鬼春別の將軍に

謀りて來るビクトリア

渠が居城を襲撃し

凱擧げたる其時に

天津乙女か天人か

但は神の御化身か

譬方たとへがたなきヒルナ姫ひめ カルナの姫ひめの兩りやうナイス
 駕籠かごに昇かつがれ出いで來きたり 吾等われら二人ふたりをいろいろと
 戀こひの魔まの手てにあやなして 吾全軍わがぜんぐんを紊みだしけり
 神かみならぬ身みの吾々われわれは 女をんなと思おもひ氣きを許ゆるし
 いと殘酷ざんこくな恥はぢをかき 男をとこの面かほに泥どろを塗ぬり
 悔くやしまぎれに猪倉いのくらの 山やまの岩窟いはやに立籠たてこもり
 玉木たまきの村むらのテームスが 館やかたに美人びじんありと聞きき
 部下ぶかの兵士つはもの遣つかはして 苦くもなく奪うばひ歸かへらせつ
 千變萬化せんべんばんくわの祕術ひじゆつをば 盡つくして挑いどみ戰たたかへど
 挺てこでも棒ぼうでも動うごかない 意いさうくわい想くわい外わいなるスガール姫ひめの
 清きよき誠まことの剛情がつじやうに 流石さすがの吾等われらも辟易へきえきし
 持もちあぐみたる時ときもあれ 道晴別みちはるわけの宣傳使せんでんし
 シーナと共ともに現あらはれて 言靈車ことたまくるま押出おしだせば
 味方みかたは一時ひとときに驚おどろいて 一時ひとときのがれの窮策きうさくに

前後見ずにふん縛り 千尋の深き陥穽に

押込みたるぞ淺ましき 又もや第二の候補者を

あさりて軍の無聊をば 慰めやらむと謀る内

再び聞ゆる宣傳歌 雷の如くに響き來る

吾身に巢ぐふ曲神は 驚き慌てふためきて

肉體見すて逃げ出す それより吾等は夢も醒め

曇り切つたる魂に 忽ち日月輝きて

吾身の愚昧を自覺しぬ ああ惟神々々

尊き神は吾々を 未だ棄てさせ玉はぬと

悟つた時の有難さ 旭は照る共曇る共

月は盈つ共虧くる共 假令大地は沈む共

一旦神に従ひし 此久米彦はどこ迄も

前非を悔いて三五の 教の爲に身をつくし

心を碎き只管に 眞の務めに仕ふべし

先づ第一に吾々は
神に歸順の首途と

シーナの司を背に負ひ
此急坂を下りつつ

行かれる道ぢやなければ
鍋をかぶつてチームスの

館に進み今迄の
百の罪をば謝罪して

三五教の信徒と
仕へ奉らむ惟神

許させ玉へ大御神
國治立の大前に

謹み敬ひ願ぎまつる

と述懐を歌ひ乍ら下り行く。
松彦は先頭に立ち、心靜に小聲で歌ひ乍ら降り行く。

松彦 音に名高き猪倉の
山の砦に三五の

教の司四人連 スミエル、スガール兩人を

救はむ爲に出でませし
道晴別の宣傳使

シーナの司を救はむと
玉木の村のチームスが

依頼を受けて登り行く
バラモン教の軍人

三千餘騎が立籠り
天地も震ふ勢に

おめず恐れず惟神
神のまにまに出でゆけば

無人の野邊をゆく如く
足も安々氣も軽く

事なく岩窟に立向ひ
思ひもよらぬゼネラルが

清き心の御光に
吾等の胸も晴れ渡り

敵と味方の隔てをば
科戸の風に吹拂ひ

恨も夏の山路を
神の恵の露に濡れ

下りて来る勇ましさ
ああ惟神々々

猪倉山の谷水は
いや永久に淙々と

飛沫をとばし水晶の
玉を岩間にかざしつつ

自然の音楽相奏で
吾等一行の凱旋を

宛然祝する如くなり
木々の梢は青々と

天津御風に吹かれつつ
清き音楽合唱し

あなたこなた
彼方此方に鳴き渡る

やまほととぎすこゑきよ
山時鳥聲清く

な
名さへも知れぬ諸鳥が

くわんきこゑ
歡喜の聲を張り上げて

あま
天の岩戸の御前に

がくそつじやう
樂を奏上したる如

いさ
勇みの聲は遠近に

みみ
耳をすまして聞え來る

てんこくじやうど
天國淨土の眞相を

いまま
今日のあたりみる心地

たの
げにも樂しき次第なり

かむながらかむながら
ああ惟神々々

かみめくみ
神の恵に包まれて

よにん
四人の難を救ひつつ

たまき
玉木の村を指して行く

けふ
今日の旅路の樂しさよ

かむながらかむながら
ああ惟神々々

かみ
神の御前に成功を

つし
慎み感謝し奉る

まんこう
萬公は一行の最後より、
やまみち
山道を下り乍ら、
うた
歌ひ出したり。

まんこう
萬公
いのくらのやま
猪倉山の岩窟は

よ
世に聞えたる大魔窟

鬼が棲みしと世の人の 怖れてよらぬも無理ならず

鬼雲彦の大棟梁 大黒主に仕へたる

鬼將軍と聞えたる 鬼春別が陣取つて

鬼が大蛇か曲津見か 八岐大蛇のする様な

人の娘を誘拐し 酒の肴に朝夕に

供へむものと企みたる 其計略も曝露して

三五教の宣傳使 治國別の一行が

案内もなしに穴の中 穴面白や面白や

「あんな」を狙うた蛇蛙 今や吞まむとする時に

又ツと現はれ萬公司 捻鉢巻もいかめしく

ドンドンとつめよつて 鬼春別のゼネラルの

肝を冷した健氣さよ ああ勇ましや勇ましや

これから萬公神司 玉木の里に立向ひ

手柄話を打明けて テームス夫婦を驚かせ

其軍功を誇りつつ

金鷄勳章の代用に

スガール姫を頂戴し

夫婦が手に手を取かはし

御伴の役を辭職して

玉木の村の里庄とし

傍神を念じつつ

安く一生を送らむと

期待したりし吾願

漸く成就の曉に

向つて来たか有難や

神の御爲道の爲

お菊の奴を思ひ切り

又もやダイヤを諦めて

三遍蛇の子のスガール姫

如何に無情な師の君も

今度は聞いてくれるだろ

萬公の様な人格者

神の司は荷が重い

靈相應といふことを

考へ遊ばし治國の

吾師の君よ改めて

此縁談の斡旋を

すすめて下さい頼みます

旭は照る共曇る共

月は盈つ共虧くるとも

假令大地は沈むとも

此事聞いて下さらば

靈相應の働きを 致してお目にかけてませう

ああ惟神々々 キツと願望成就して

里庄の家の婿となり 名を末代に輝かし

村人達を三五の 誠の道に救ひやり

三五教の神徳を 堅磐常磐にあらはさむ

許させ玉へ師の君よ 金勝要の大御神

イドムの神の御前に 今から願ひおきまする

と自分勝手な脱線歌を歌ひ乍ら、山路を下り行く。道晴別、シーナ、スミエル、スガールは萬公の歌を聞いて吹き出し、背に負はれ乍ら負傷の苦を忘れて、アハハハ、オホホホと笑ひ出した。併し乍ら萬公の此外のいろいる面白き、間斷なき歌に、一同は面白可笑しく笑ひに紛れ、いつとはなしに玉木の村のチームスが門前に無事に歸ることを得た。

(大正一二・二・二六 舊一・一一 於龍宮館 松村眞澄録)

第三章 萬民（一四一）

鬼將軍と世の人に 恐れられたるバラモンの

鬼春別は漸くに 心に悔悟の花開き

前非を悔いて大神の 尊き恵を覺りつつ

瑞の御靈の神徳は 汲めども盡きぬ久米彦が

スパール、エミシと諸共に 心の空も治國別の

神の命の御教に 歸順しまつり常磐木の

動かぬ心の松彦や 醜の岩窟を龍彦の

司と共に坂道を スタスタ歸る神司

道晴別やシーナをば 背に負ぶつて許々多久の

罪や穢れの贖と 川の流れもスミエルの

谷間を涉り大神に 誠を捧げてスガール姫

萬公司まんこうかきに送おくられて 屠所としよの羊ひつじのトボトボと

悄氣返せうげかへりたる足許あしもとも 漸やうやく茲ここに玉木村たまきむら

テームス館やかたの門前もんぜんに 月照つきてる空そらの夕間暮ゆふまぐれ

首くびを傾かたむけ汗流あせながし 息いきもせきせき歸かへり着つく。

萬公まんこうは表おもてに立たち止とまり 大音聲だいおんじやうを張はり上あげて

玉木たまきの村むらのテームスよ それに仕つかふる僕等しもへたち

一時いちじも早はやく凱旋がいせんの 宣傳將軍せんてんしやうぐん迎むかへ入いれ

歡喜くわんぎの涙なみだに浴よくすべし 所われわれも吾々あななひは三五あななひの

神かみの教をしへの宣傳使せんてんし 治國別はるくにわけの一いちの弟子でし

萬公別まんこうわけの命みことぞや 猪倉山いのくらやまに立籠たてこもる

バラモン軍ぐんのゼネラルと 羽振はぶり利きかした大將たいしやうを

箒木はうきで蝶てふを叩たたく様やうに いと容易やすやすと生捕いけどつて

芽出度めでたく凱旋がいせんなしにけり 【くめ】ども盡つきぬ久米彦くめひこの

惡業あくごふ多おほき身魂みたまをば 尊たふとき神かみの御惠みめぐみに

谷の流たにれながに洗あらはれて
今は誠いまの人まこととなり

スツパリもとの生いく身み魂たま
スパール、エミシのカーネルが

萬公別まんこうわけのお伴ともして
二人ふたりの姫ひめを送おくりつつ

此處ここにお詫わびを致いたさむと
いと殊勝しゅしょうにも來きたりけり

治國別はるくにわけの宣傳使せんでんし
松彦まつひこ、龍彦たつひこ諸共もろともに

尊たふとき司つかさにましませど
萬公別まんこうわけが居をらなけりや

如何どうしても斯かうしても此戰このいくさ
これ程ほどうまく行ゆきはせぬ

喜よび玉たまへテームスよ
ベリシナ姫ひめのお婆ばアさま

早はやく此門このもん開あけなされ
吾師わがしの君きみを何いつ時まで迄も

これ程ほど蚊かの喰くふ門もんの前まへ
立たたせて置おくは失禮しつれいぢや

萬公別まんこうわけもちと困こまる
開ひらけよ開ひらけ表門おもてもん

常夜とこよの暗やみも一時いつときに
明あけ放はなれたる岩戸いはとぐち口

歌舞音かぶおん樂がくを調とへて
吾等われら一行いつかうの英雄えいゆうを

早はやく歡迎くわんげい致いたすべし
ああ惟かむ神な々々がら

神に代りて萬公別

館の主に氣をつける

と歌ひ乍ら門の戸が割れる程毆つて居る。門番の乙丙は萬公の歌を聞いて胸を轟かせ、バラモン教の悪神が、又もや、あんな事を云つて門を開かせ倉につないで置いた兩人を奪還しに來たのではあるまいかと案じ案じ奥の間に駆け込んで、テームスの前に……數多の人々が門外へ押寄せ來たれり……、と報告した。テームスは……物騒な世の中油断はならぬ……と身仕度をなし槍を小脇に抱へ乍ら、兔も角様子を窺はむと密かに門口に立現はれ、門の戸に隔てられて一行の姿は見えねども……何だか娘の歸つた様な氣配がする、治國別様が娘を助けて歸つて下さつたのではあるまいか。但しは敵に捕らはれ玉ひ悲惨な憂目に會はせ玉うたのではなからうか。敵は勢に乗じて吾館を打滅さむと押寄せ來りしには非ずや……と、とつおいつ思案に暮れて暫し佇み考へてゐる。

シーナは傷だらけの頭をふり乍ら、苦しうな聲で、
シーナ「旦那様、シーナでムります。治國別様のお助けによつてお嬢さまと共に

無事に歸りました。何卒此門開けて下さいませ」

と呶鳴つて見たが、どうしても厚い門扉に隔てられて中へは聞えなかつた。萬公

はもどかしがり大聲にて、

萬公「吾こそは、三五教の宣傳使治國別の片腕と仕へまつる、天下無雙の英雄豪傑、萬公別命でムる。館の主チームス殿、一時も早く表門を開かれよ。某の申す言葉に間違はムらぬ」

と呶鳴り立てた。チームスは萬公の聲を聞いてヤツと安心し、急ぎ門扉を開き、半信半疑乍らよくよく見れば月夜の事とて、ハツキリは分らねど、どうやら、シーナを始め二人の娘が背に負はれて歸つて來た様子に思はず知らず門外へ走り出た。シーナは背中から、

シーナ「もし旦那様、お蔭で助けて頂きました。御安心下さいませ」

と云ふ聲に、チームスは驚喜し乍ら、

チームス「やア皆様、御苦勞でムりました。さア何卒奥へお這入り下さいませ。

まあまあ治國別様、よう娘をあの峻い坂を負うて歸つて來て下さいました。嘸お

疲れでムリませう」

と嬉し涙と共に感謝する。治國別は一同の先に立つて門内に入る。十二人はテームスの後に従ひ僕に燈火を以て案内され、奥の廣き一間に進み入る。

テームス、ベリシナの夫婦は餘りの嬉しさに、下女や下男に命じ、座敷を掃いたり座布團を出したり、煙草盆を竝べなどしてキリキリ舞ひをしてゐる。

萬公「テームス殿、必ずお構ひ下さいませ。まア御緩りなさいませ。吾々が勝手にそこらを片づけて休息させて頂きます。もう斯うなれば親子も同然ですから

……」

と早くも養子になつた氣分に馴々しく云ひ出した。

テームス「ハイ、貴方様は命の親でムります。御禮は何う申してよいやら分りませぬ」

萬公「いや舅殿、若いものが控えて居りますれば、貴方は御老體、何卒緩りとなさいませ。併し乍ら道晴別、シーナ、スミエル様を始めスガールが深い陥穽に墮され餘程體を痛めて居りますから何卒寢床を拵へてやり度いものです。夜具や蚊

帳の用意をせねばなりません。何分私はホヤホヤで今来た所ですから家の勝手は分りませぬから一寸教へて下さいませ」

チームス「ハイ、勿體ない。左様な事を貴方にさせて済みますか。何卒御緩りして下さいませ」

萬公「舅殿、そりや何を仰有る。若いものが働かいで誰が働くものですか。治國別、松彦、龍彦の宣傳使には私が名代として十分にお禮を申して置きます。おい春チャン、久米チャン、スーチャン、エーチャン、病人を……いや負傷者を早く卸して下さい。お前さまも御苦勞でした。こんな時や圖體の大きい奴は重寶なものだな」

四人は下女の案内によつて負傷者を一室に連れ行き夜具を敷いて其上にソツと寝かせ、下女に介抱を頼みおき、もとの居間へ歸つて来た。治國別は松彦、龍彦と共に離れの間に下女に案内され、一先づ息を休め、大神に感謝の祝詞を奏上し、終つて茶菓を喫し息を休めてゐた。鬼春別、久米彦、スパール、エミシ、萬公は、奥の一室にグツタリとして足を伸ばせ自分按摩を頻りにやつてゐる。四人は況し

て重い人間を背負つて來たのだから、足も疲れ體も弱り、繩の様になつて腕枕に横たはつて居る。

チームスベリシナの夫婦は娘の歸つた嬉しさに、治國別に禮云ふ事も忘れ、室内をウロウロし乍ら四人の負傷者が寢て居る居間へ駆け込み、ベリシナは二人の娘の介抱にかかり、チームスは道晴別、シーナの枕許に坐つて體を擦り勞つて居る。何れも深い穴へ吊り下ろされ體を何處ともなく痛めて思ふやうに動かないのを、やつと安心したので氣も緩みグツタリとなつて、物をも云はずベッドの上で苦しげな息を吐いて居る。兩親は能ふ限りの親切を盡して介抱に餘念なく、治國別の事を殆ど忘れて居た。萬公は老夫婦が娘二人と道晴別、シーナを何處かへ連れて行つたきり、顔をも出さぬのでチツとばかり癢に觸つたと見え、大きな聲でそこらにウロウロしてゐる下女を捉まへ、茶を汲め、足を揉め、何を愚圖々々してゐるか』と早くも若主人氣取になつて嘸鳴りまはして居る。

萬公 『肝腎の娘番頭を助けられ

テームス老爺禮さへ云はず。

愛し娘の歸りたるより狼狽へて

俺やお客を忘れよつたか。

萬公はスガール姫の主人公

神が許した仲と知らぬか。

僕共早く主人を呼んで来て

吾師の君に愛相せぬかい。

此様な大きな家に住み乍ら

何故俺等を馬鹿にするのか

下女「テームスの主人の君は姉妹の。

姿眺めて狼狽へ玉ひぬ。

今少時し待たせ玉へよ神司

水の出鼻は詮術もなし

萬公「それだとして義理人情は知るだらう。

救ひの神を袖にするのか

下女「私はお民と申す賤女よ。

そんなむつかしい事は知らない。

三四日前に出て来た下女なれば

宅の様子が分りませうか。

その様な駄々を捏ねずに今晚は

おとなしうして寝み遊ばせ。

姫様が千騎一騎の苦しみを

如何どうして親おやが見捨みすてられよか。

テームスの主人あるじの君きみは愛いとし娘ごに

心惱こころなやませ煩わづらひ玉たまふ。

お前まへさま屈強くつきやうな身みをば持もち乍ながら

チツと八キ八キ働はたらきなされ。

俺わしだとして之程これほどひろ廣いへなかい家中いなかを

手ての廻まはりさうな事ことがないぞえ。

緩ゆつくりと今夜こんやは此處ここに落着おちついて

夜よが明あけたなら噪はつしやぎなされ

萬公まんこう 『こりやお民女たみをんなの癖くせに益良夫ますらをを。

嘲弄致てうろついたすか迂愚者奴うつけものめが

お民たみ「此家このいへに来ると匆々さうさう若主人わかしゆじん

氣取りきどてこる人の可笑をかしき。

心こころよきお嬢ぢやうさまだと云いつたとて

お好きす遊あそばす筈はずはないぞや。

何な故ぜなればお前まへの姿すがたは阿呆面あほうづら

顔かほの紐ひもまで解ほどけてる故ゆゑ」

萬公まんこう「賤女はしための癖くせにべらべらたたく奴やつ

腮外あごはつさうか神かみの力ちからで」

萬公まんこうは斯こんな下女げぢよに相手あひてになつて居をつてもつまらない、兔とも角主人かくしゆじんを引張ひっぱり出だし、吾師わがしの君きみに挨拶あいさつをさせなくちや濟すまないとお民たみを案内あんないさせて、四人よにんの寢ねて居ゐる居間ゐまに進すすみ行く。見みれば夫婦ふうふは四人よにんの負傷者ふしやうしやを交かはる代がる親切しんせつに介抱かいほうしてゐる。

萬公「やア御主人、介抱は私が引受けてやります。何卒吾師の君御一行にお禮の御挨拶に御入來下さいませ。彼處に待つて居られますから」

テームス「ハイ、有難うムります。あまり嬉しいのと、娘の介抱に氣をとられ、肝腎の命の親様に一言の御禮を申すのも忘れてみました」

ベリシナ「誠に濟まない事でムりました。そんなら老爺どの、あなた、濟まないけれど治國別様御一行に、取敢ずお禮を云つて來て下さい。私はここで介抱して居りますから」

テームスは肯き乍ら、慌ただしく廊下を渡つて治國別の居間に進み行く。萬公は一生懸命にスガールの横顔を覗き乍ら、道晴別、シーナの介抱を甲斐々々しくやつて居た。

(大正一二・二・二六 舊一・一一 於龍宮館 北村隆光録)

バラモン教のゼネラルと 羽振利かした久米彦や

鬼春別を初めとし スパール、エミシの四人連れ

玉木の村の里庄の家に 四人の手負を送りつけ

心を痛め聲潜め 悔悟の涙に暮果てて

青息吐息吐きながら 三五教の宣傳歌

唱ふる聲も口の中 悄氣かへり居る其席上へ

廊下の板の間轟かし 現はれ来るチームスは

日影も細き部屋の内 鬼春別の敵將が

歸順し来るを知らずして 娘二人を救ひたる

治國別の一行と 老の眼に見誤り

四人の前に手をついて いと慇懃に挨拶を

初めかけしぞ可笑しけれ。

仄暗き行燈の光に主のチームスは、鬼春別一行とは知らず、
叮嚀に兩手を支へ、

チームス「これはこれは皆様よくまあ助けてやつて下さいました。さうして貴方は誰人でムいましたかなア」

と鬼春別の顔をそつと覗いた。鬼春別は言句につまり、頭を掻き乍ら、鬼春「ハイ、私は……春別でムいます。イヤ、もう偉い御心配をかけました」

チームス「どう致しまして、此方の方から甚い心配をかけ何とも申譯がムいませぬ。貴方は治國別さまと承はりましたが、今承はれば春別と仰有いました。アア

これはこれは失禮致しました。何分年がよつて記憶が悪いので人の名迄忘れず。いやもう年は取り度くはありません。時に春別様、随分苦心でムいましたでせう

なア。お骨折お察し申します」

鬼春「いやもう其御挨拶には痛み入ります」

チームス「何と云つてもバラモン教の悪神、鬼春別、久米彦と云ふ鬼のやうな悪黨に捕へられたのですから、嚙娘もえぐい目に遇つたでムいませう。さうして、奥眼とか久米彦とか云ふ狒々のやうな男がついて居るのだから定めし娘は操を汚されたでムいませうなア」

鬼春「いや決して其御心配は要りませぬ。仲々貴方の娘さまだけあつて確りした

ものです。それは私が保證致します」

テームス「假令身を汚されても命さへ持つて歸れば結構だと思つて居りましたが、

少々怪我をして居りますけれど肝腎のものに別状さへなくば、こんな嬉しい事は

△いませぬ。何分養子をせねばならぬ娘ですから、親としても随分心配で△いま

す」

鬼春「成程御心配お察し致します。實は拙者はあの何で△います……。やつぱり

……春別で△いました。兔も角無事に治まつたので△いますから、これも神様の

何彼の思召しとお諦めなさるがよろしう△いませう」

久米「初めてお目にかかります。貴方は此家の主様で△いますか。誠に申譯のな

い事を致しました。治國別様のお蔭により神様の道に救はれ、こんな嬉しい事は

△いませぬ。貴方も嘸お喜び、お目出度う△います」

テームス「イヤ貴方の仰有る通り、第一春別様のお骨折り、次には貴方方のお助

けによりて、あの意地の悪い鬼春別や、久米彦の、泥棒將軍に拐かされた所を助

けて頂き、天にも昇る心持でムいます。もし春別様、娘をお助け下さいまして實にお禮の申しやうがムりませぬが、又あの泥棒將軍が、貴方のお歸りになつた後は澤山の雑兵を引き連れ、娘を取り返しに来るやうな事はムいますまいか、それが第一氣にかかります」

久米「決して御心配なさいますな。治國別さま、松彦さま、龍彦さま、萬公さまが、すつかり岩窟退治を遊ばし、二人の頭に大鐵槌を喰はし、三千の軍隊を解散し、後顧の患のなきやうにして此處にお歸りになりましたから、御安心なさいませ」

チームス「遠は春別様、其外のお弟子様、實に御神徳と云ふものは偉いものでムいますな。神が表に現はれて善と悪とを立て分けると仰有いましたか、やつぱり善は最後までゆけば勝つものでムいます。そして鬼春別や、久米彦の泥棒人足は、首でも吊つて死にましたか、但しは切腹でも致しましたか、それが一つお土産話に聞かして頂き度うムいます」

鬼春別は頭を掻き乍ら、

鬼春「へい將軍としての鬼春別、久米彦は最早消滅致しました。やがて生れ變つて貴方にお目にかかりに来るでせう。其時は悪人と憎まず言葉をかけてやつて下さいませ」

チームス「貴方のお言葉なれば背く譯にはゆきませぬが、彼のやうな悪黨が何程天地が覆つて、謝罪つて來ましても一口言葉をかける所か、門内にも入れませぬ。肉を削り血を啜り、骨をはたいて食つても蟲の納らない悪黨でムいますが、何とかして神様のお力で痕跡もなく亡ぼしたいものでムいます」

斯く話す所へ治國別、松彦、龍彦は下女の案内によつて現はれ來り、治國「イヤ、チームス殿、私は治國別でムいます。悠りと休まして頂きました。何うですか、四人共少しく気分はよいやうですか」

チームス「ヤ、貴方は治國別様、ハテナ、今此處にムるお方を貴方様と思つて御挨拶を申上げた所でムいます。ハテナ、どうも合點が行かぬ事だなア」

治國「此方は有名な鬼春別、久米彦の兩將軍及スパール、エミシのカーネルさまですよ」

チームスは倒けぬ許りに驚いて、顔を眞青にしながら慄ひ聲を出し、
チームス「モシ治國別様、早く何處かへ歸なして下さいませ。何故こんな奴が知
らぬ間に入つて來たのでせう」

治國「此四人の方が、すつかり御改心の結果、貴方方のお嬢さまを背中に負うて
此處迄送つて來られたのですよ。もはや今迄の將軍ではムいませぬ、治國別の弟
子ですから御安心なさいませ」

チームスはやつと胸を撫で、

チームス「ヤアそれで一寸安心致しました。モシ春別様、随分貴方は腹が悪いで
すな。なぜ鬼春別だと仰有つて下さらぬのです」

鬼春「餘りお恥かしうて合す顔がありません。併し最早鬼
は取れましたから矢張春別でムいます。随分私の惡を並べられた時には五臟六腑
を抉られるやうに苦しいました。此處に居るのは久米彦將軍、スパール、エ
ミシの改心黨でムいます。何卒今迄の恨を去つて、通常の人間として御交際を願
ひます」

テームスはるくにわけさま「治國別様のごぎムあひだるごかうさい間は御交際をさして頂いたきませうが、又何また時なんどき引ひくりかへらるるやら分わかりませぬから、成なるべくは歸かへつて頂いたき度たいものでムごぎいます」
治國はるくに「決けつして御心ごしん配ばいなさいますな。此この方かた方の腹はらの底そこ迄まで見透みかして居をりますから、最早もはや大丈夫だいぢやうぶでムごぎいます」

鬼春別おにはるわけ「醜神しこがみに取り憑とかれたる鬼春別おにはるわけも

神かみの恵めぐみに人ひととなりぬる。

テームスの里庄りしやうの君きみよ惟神かむながら

神かみのまにまに赦ゆるしたまはれ」

久米彦くめひこ「大神おほがみの恵めぐみは深ふかし瑞御靈みづみたま

河瀬かはせの水みづを久米彦くめひこの吾われに。

汲くめど汲くめど盡つきせぬ神かみの御恵みめぐみは

流ながれてたま靈たまをあら洗あらひましぬる」

テありムがスた「有あり難がやた醜し雲こ四く方もによ晴もれは渡わりた

今け日ふはうれ嬉うれしつききみ月つきをみ見みるかな。

三あ五なのな月ひのな教ををし守まりもつつ

いとやこ永し久へにか神かにみ仕つへかませ」

鬼お春に別は別る「曲ま鬼がのあ靈にをみ限たなくま追くひま散ちらし

空そ晴ら別はとるなりわしけ今ふ日ふなり。

猪みのく倉らのと砦りにひ潜そむま曲ま神がも

神かのい伊ふ吹きにふ吹ふきち散ちりにけり。

曲ま神がのさ去さりにしあ後とのく久め米ひ彦こは

心眞澄こころますみの空そらの月つきかも
『』

スパール『バラモンの軍いくさの君きみに従したがひて

カーネルとなりし吾われぞうたてき。

大神おほかみの救すくひの喇叭らっぱに醒さまされて

今は誠いままことの道みちに覺さめける
『』

テームス『有ありがた難がたき神かみの惠めぐみは醜しこぐさ草くさも

薙なぎ拂はらはずに救すくひますかも
『』

エミシ『吾われこそはエミシの司つかさあな三五なひの

ひかり
光を浴びてエミシ吾なり。

おとどひ
姉妹の二人の御子をいろいと

なや
悩ませまつりし吾ぞうたてき。

つかさ
ゼネラルや、スパール司の罪ならず

おが
エミシ一人が犯せし醜業

おにはるわけ
鬼春別 友垣の罪をかくして一人負ふ

つかさ
エミシの司は真人なりけり

くめひこ
久米彦 村肝の心の罪に責められて

われ
吾は言ふべき言の葉もなし

治國別はるくにわけ 猪いのの倉くらの山やまの黒雲くろくも空そら晴はれて

立たちも及およばぬ谷たにの川かは霧ぎり」

松彦まつひこ 松まつの世よの魁さきがけとして現あれませる

木花姫このはなひめの惠めぐみかしこし。

木この花はな姫ひめ神かみの命みことの在まさざらば

いかに救すくへむこの姉妹おとどひを」

龍彦たつひこ 大神おほかみの宣のりのまにまにビクの國くに

早はや龍彦たつひこの今日けふの嬉うれしさ。

大空おほぞらに輝かがやきわたる月つき見みれば

吾師わがしの君きみの御靈みたまとぞ思おもふ」

鬼おに春はる別わけ「許こ々こ多たく久くの罪つみや汚けがれを委まつ曲ぶさに

宣のり直なほしたる治はる國くに別わけの司つかさ。

天あめが下した四よ方もの國くにには仇あだもなし

神かみの教をしへに任まかす身みなればら」

テームス「治はる國くに別わけ司つかさを初はじめ百もも人びとよ

今こ宵よひは早はやく寛くわんぎませよ。

吾あが娘むすめ父ちちをたづねて待まつならむ

許ゆるさせたまへ出いで行ゆく吾われをら」

治はる國くに別わけ「親おやと子この情なさけを思おもふ益ます良す雄らは

いかでとがめむ汝なれの言こと葉ばをら」

チームス「有難し百の司よいざさらば

くつろぎたまへ心安けく」

と挨拶しながら、後に心を残しつつ、奥の一閒に馳けて行く。お民は下女下男の

調理せし膳部を運び来り、酒なぞを添へて一同の前に据ゑ、

お民「皆様、お嬢様が、いかにお世話になられました有難う存じます。何分私は

此處へ雇はれて参りました、まだ日日も浅うムいまして家の勝手も分りませず、

不都合だらけですが「どうぞ悠り召し上つて貰へ」との主人の云ひつけでムいま

す。何もムいませぬが何卒腹一杯召し上り下さいませ」

龍彦「お取り込みの中、御叮嚀な御馳走、イヤもう大變なお骨折でムいませう。

然らば遠慮なく頂戴致しますせう。サア先生、春別様、皆様頂戴致しますせうか」

治國「御叮嚀に有難うムいます。此方は勝手に頂戴致しますから、何卒お民さま

とやらお構ひ下さいませな」

お民「ハイ不調法者がお給仕を致すよりも御自由にして下さる方が結構でムいま

す」

と挨拶もそこそこに御馳走を竝べ終り炊事場へさして急ぎ行く。萬公はチームスと交替に、道晴別、シーナの介抱より離れ空腹を抱へて聲をしるべに現はれ来り、萬公「ああ先生、大變な御馳走が出て居りますなア。一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つや一膳足らぬぞ。萬公司のお膳はどこにあるのかなア」

龍彦「オイ萬公、お前は既に御馳走を頂戴しただらう。スガールさまのお顔さへ見て居れば無上の御馳走だ。飯の一日や二日食はなくても辛抱が出来るだらう」

萬公「へん大きに憚り様、木佛金佛でない限り、矢張食欲が一人前はムいますから、何ならお前の分を拙者が頂戴致しませうかい」

龍彦「やお前は別に席が拵へてあるのだらう、主人側だからなア。俺達はお客さまだ何と云つてもチームス家の新養子様だから、些と俺達にお給仕でもしたらよからう」

萬公「ウンさうだった。お前もさう思うて居るか、さうすると俺の考へもちつとも違はぬ、それでは氣樂にお客さま面もして居れまい、下女に云ひつけ澤山御馳

走うをして上あげる。………何なにぶん分とりこ取とり込こんで居ゐるので御ご馳ち走そうをして上あげたいと思おもひまし
たが俄にはかには出で来きませぬ。又また明あ日すになつたら、何なんとか小こ甘うまいものでもして上あげませ
う。まアお客きやく様さま御ご悠ゆうくり召めし上あり下くださいませ」
と慌あわてて柱はしらや襖ふすまにゆき當あたりながら炊す事じ場ばさして進すすみ行ゆく。

(大正一二・二・二六 舊一・一一 於龍宮館 加藤明子録)

第五章 飯めしの灰はひ（一四一三）

テームス夫婦ふうふは下しも僕べのアーシスと共に、四人よにんの介かい抱ほうに全ぜん力りよくを盡つくして居ゐた。治はる國くに
別わけ以下いか八はち人にんのお客きやくに對たいしてはアヅモスを以もつて接せつ待たい係がかりとなし、治はる國くに別わけの急いそぎ此こ處こを
出しゅつ立たつせむとするを聞きいて打うち驚おどろき、せめて道みち晴はる別わけの病びやう氣き全ぜん快くわいする迄まで、吾わが家やにとどま
り玉たまはむ事ことをと、頻しきりに懇こん願ぐわんした。治はる國くに別わけは止やむを得えず、四し方はう庭には先さきをめぐらした、
可かなり廣ひろき別べつ宅たくに入いりて、バラモン組ぐみの連れん中ちゆうに三あ五なの教けう理りを日に夜ちや説とき諭さとしてゐた。

萬公まんこうは此家このいへに到着たうちやくし一度いちど顔かほを合あはしたきり、臺所かつての方ほうに廻まはつて、下女げぢよのお民たみを主人しゅじん氣取きどりで使役しえきし、家事かじ萬端ばんたんに注意ちういを與あたへてゐた。

萬公まんこう「オイお民たみ、汝きさまも俺おれの家うちへ來きてからまだ間まもないのだから、勝手かつても分わかるまい、

そして田舎出いなかでのホヤホヤで、どこ共ともなしに土臭つちくさい。これから家事かじ萬端ばんたんの事ことを、若わか

主人しゅじんの萬公別まんこうわけが教をしへてやるから、其心算そのつもりで、何事なにこともハイハイと服從ふくじゆう致いたすのだぞ」

お民たみ「萬公別まんこうわけさまとやら、根ねツから御結婚ごけつこんの話はなしも聞きませぬし、一體いったい何方どなたのお婿むこさ

まになられたのですか。何なんだか主人しゅじんの様な氣きがせなくてなりませぬワ。又また大家たいけの

主人しゅじんたる者ものが炊事場すゐじばへやつて來きて、下女げぢよをつかまへて指圖さしづをするといふやうな卑け

劣ちな事ことでは、下男げなんや下女げぢよはケチ臭くさい主人しゅじんだと云いつて、排斥はいせきしますよ」

萬公まんこう「馬鹿ばかを言いふな。隅すみから隅すみ迄まで氣きがつかなくては、一家いっけんの主人あるじたる資格しかくがない。

今迄いままでのやうな主人面しゅじんづらをして居をつては、之これだけ税金ぜいきんのかかる時節じせつ、どうしても會計くわいけいが

持もてぬぢやないか、それだから上下一致しやうかいちして、先まづ第一だいいちに家内かないの整理せいりを按排あんばいし、

而しかして後外部のちくわいぶの仕事しごとにかかるのだ」

お民たみ「お嬢ぢやうさまを始めはじめお客きやくさまの病氣びやうきで、御主人ごしゅじんは御手あてが引ひけず、アツモス、アー

シスのお二人は病人やお客さまに係つてゐるなり、さう八釜しう言つて貰つても、何程千手観音さまだつて、女一人で、こんな廣い内がどう甘く行きますものか。チツと考へて御覽なさい。アオスから晩まで、獨樂の様な目にあはされてキリキリ舞をしてゐるのですよ、喧ましう云つて下さるな。お前さまは贖主人でせう。そんなこと云つてもあきませぬよ」

萬公「馬鹿云ふな、汝一人で忙しいから俺が主人の身をも省みず、汝の苦衷を察して手傳に來てやつたのだ。チツとそこの掃除をせぬかい、此散らけ様は何だ」

お民「掃除どもする間がありますか、庫の中に居るバラモンのお客さまには握り飯を放り込んでやらねばならず、水を持つて行かねばならず、夫れに俄の澤山の

お客さま、チツとお前さまも手傳ひなされ」

萬公「ナニ、バラモンのお客さまが庫に居るとは此奴ア妙だ、何と云ふ奴だ」

お民「何でもフェルとかベツトとかいふ男ですよ」

萬公「ウン其奴ア面白い、臨時其奴を下男として使つてやらう。さうすればベツト、フェルも喜ぶだらう、オイお民、庫の鍵を貸せ」

お民「本當に萬公さま、貴方は若主人ですか。主人に間違ひなければ鍵を渡し
す。サア之を持つてお行きやす。東から三つ目の庫ですよ」

と庫の鍵を抽出から取出して萬公に渡した。萬公はイソイソとして鍵を携へ、庫
の戸をあけ、怖相に中を一寸覗いてみると、フェル、ベツトも又ブルブルもので
庫の隅に抱き合つて縮かみゐる。

萬公「オイ、バラモンの大將、俺は當家の若主人だ。今日は許してやるから下男
の代りに家内の掃除をするのだ。随分お客が俄に殖えたのだから……ヨモヤ厭
とは申すまいな」

フェル「ハイ、若主人様の御仁慈有難う存じます。どんな事でも致しますから、
何卒お使いひ下さいませ」

二人は萬公を本當の若主人だと信じて了つた。

萬公「サ、先づ座敷の掃除からやるのだ。オイ、フェル、ベツトの兩人、随分廣
い間だから一寸骨が折れるぞ。骨折ると云つても障子の骨折つちや、忽ち幾分か
の損害だから、充分注意をして貰はねばならぬ、先づ掃除の仕方から教へてやら

う、……一番に戸障子を開け放つて了ひ、どうしても動かす事の出来ぬ大切な品物は被物をかけておくのだ。それから拂塵のかけ方は天井のスミズミから戸障子腰張りといふ順序に、上からダンダンと拂塵の先で品よくハタくやうにするのだ。一寸今俺が標本を見せてやる……コレ此通りだ。腕をニユツと伸ばし、手首を下向けるやうにしてやりさへすれば、棧に柄が當らず、埃は甘く散つて了ふ。ハタキが濟むと今度は箒を使ふのだ」

フエル「ハイ有難う、箒使ふ位はよく知つてゐます。オイ、ベツト、汝も此箒を以て掃くのだ」

と云ひ乍ら兩人は一生懸命に疊を掃き出した。

萬公「コラコラそんな掃き様があるか。箒の使方は疊の目に添うて掃かないと、塵がスツカリ疊の中へ入つて了ふぢやないか、汝のやうに箒の先を上げよつて使ひよると、埃がそこらへ飛びさがして、箒は損むなり、又元の障子の棧へ止まつて了ふぢやないか。そんな中央の方斗り掃いたつて何になる、隅々をよく掃きさへすれば、中央は獨り美しうなるのだ。そして掃掃除が濟んだら、箒を吊つてお

くのだ、立てておくと、すぐに雑刀の穂先のやうに曲つて了ふぞ。掃除がスツカリすんだ後は、先に付いてをる塵を除つておくのだ」

フェル「モシ、御主人様、随分貴方は能う氣がつかますな、丸で女みた様ですワ」

萬公「きまつた事だ、變性女子の瑞靈だ、サ、之から水の御用だ。箒がすんだら、雑巾がけをやるのだ。雑巾は能く水につけ揉み出して、可なり固く絞り、力を入れて拭かないと、却て縁板が汚くなるぞ。バケツの水も度々取替へぬと駄目だ。雑巾のかけ方は板の目に添うて、雑巾をよく折返して拭くのだよ。椽の隅は雑巾を三角形に折つて拭くと、スミ迄綺麗になる。ニス、漆の上等の材木などは、濕つた雑巾をかけては却て悪くなるものだ。乾いた雑巾を根に任して使ふのだ。朝晩の拭掃除も門掃も硝子研きも、雑巾掛も皆人格の修養だ、そして社會奉仕の一つだ。ああ主人になつても、竝や大抵の事ぢやないわい。コリヤコリヤ、バケツの水が汚れてゐるぢやないか、なぜ新しいのと汲み替へぬのだ。そんな泥のやうな水で雑巾を絞るものだから、これみい、板の間に白い筋がついてるぞ」

フェル「オイ、ベツト、難しい主人だな、やり切れぬぢやないか」

萬公「一寸主人に跟いて来い、之から飯焚を仰付けてやる」

フエル「へーへー、仕方ありません。永らく庫へ放り込まれ、折角外へ出して貰うたと思へば、煙草一服せぬ前に、下男や下女の役目を仰付けられ、實に光榮

です」

萬公「ゴテゴテ申さず、俺の後へ跟いて来るのだ」

と大手をふり乍らお民の飯焚場へやつて来た。

萬公「オイお民、鍵をしまつておいてくれ、サア之れだ。新参者の男衆が二人出

来たから汝も心易うしてやつてくれ。但心易うせいと云つても程度問題だ。併し

汝の頬ベタは赤いから、いかな物好でも、つまみ喰ひする奴はあるまいから、マ

ア安心だ」

お民「へん、放つといて下さいませ、怪ツ體な旦那様だなア」

萬公「オイお民、四つも五つも一度に竈に火をつけてるが、一體何を焚いてるの

だ」

と云ひ乍ら、鍋の蓋を一夕取つてみて、

萬公「ヤア此奴ア飯だ、……此奴ア副食物だ、……コリヤコリヤお民、飯が煮え立つた後は、火をズツと弱めるのだぞ。そして白い泡を外へこぼさない様にすなのだ、米の甘味がスツカリ歸んで了ふからな。火を焚く時には仕事の手順を考へて、ズツと続けて用ふる方が、火力の經濟となるから、汝のやうに一遍に冷たい竈をぬくめようとすると、大變な損だぞ。餘つた火を次へ廻しまわしすれば、何程經濟上利益かも知れぬ。火を焚く時はよく調節して、炎の先が鍋の底に當る程度のものにしておけば、それ以上外へ火がねぶる様な事では焚物が無駄になる。オイ、フエル、ベツト、汝も俺の云ふ事をよう聞いておけ。第一チームス家の損になる事だからな。奉公人根性と云つて、主人の居らぬ時にや、不經濟な事許りしよるから、今まではチツと違つぞ。今度の主人は經濟學者だからなア」

お民「ホホホ主人が鍋の蓋をあけて調べる様になつたら、最早其家は駄目ですよ。餘程家の財政が苦しいとみえますなア」

萬公「馬鹿云ふな、冥加と云ふ事を知らんか。オイ、ベツト、フエル、お前はこれからお客が多いのだから、お民の仕事を手傳つてやつてくれ。第一經濟を重ん

じて、薪や炭を粗末にせない様に頼むぞ。よく乾いた薪を用ゐ、無暗に澤山釜の下へ捻ぢ込むと、却て燃えが悪く、熏つて了ふ。割木なら、太い奴を四本位くべるのだ。そして薪と薪とが重ならぬやうに組合さないと、燃えにくいぞ。そして物が煮え上つたら、使ひさしの薪はすぐに消すのだ。火消壺へつつ込むか水をかけるかしてなア……」

フエル「ハイハイ畏まりました。オイ、お民さま、俺も少しは陣中で飯焚もやつた事がある。チツと俺が標本をみせてやらう」

お民「アタ暑いのに困つてをつた所ですよ。マア、チツと此處で腰でも下してお前のお手際を拜見しませう」

萬公「オイ、お民、焦げ臭いぢやないか、早く焚物を引かぬかい」

お民「餘り俄旦那さまが喧しう仰有るものだから、外へ氣を取られてお飯が焦げついたのですよ、黒くなつたら、フエル、ベットに食はしたら宜しいワ、ホホホ

ホ」

萬公「オイ兩人、何とかせぬかい、鍋がペチペチ云ふとるぢやないか」

フエルは手桶の水を慌てて竈の下へぶちやけた拍子に、ブーと灰が一面に立上り、炊事場は眞黒になつて了つた。そして體中灰まぶれになり、鼻をつまんで、四人とも表へ驅け出し、空気を吸うてゐる。

アヅモスは朝飯が遅いので腹をへらし、炊事場の様子を考へに来ると、そこら一面灰煙が立つてゐる。アヅモスは大聲で、……「お民お民」と呼んだ。お民は外から……

お民「ハイ、二の番頭さまですか、何ぞ御用ですかい」

アヅモス「何をキヨロキヨロしてゐるのだ、早く御飯を持つて来んかい、皆お客さまがお腹がすいてるぢやないか」

お民「エ、お前は男の癖に、喧しう言ふものぢやありませんか。今若旦那さまと一生懸命に、御飯をたいてゐた所ですよ」

アヅモス「當家に若旦那のある筈がない、何を呆けてゐるのだ。此處邊スツカリ灰まぶれぢやないか、チツと掃除をせぬかい」

萬公は裏口から灰だらけの炊事場へ歸り來り、

萬公「ア、お前はアヅモスか、俺は若主人の萬公別だ。今お民に炊事の教授をしてみた所だ。たつた今調理して新参者のフエル、ベットに膳部を運ばすから、病人の介抱を神妙にして来い。そして舅姑殿にもチツと遅うなつてすみませぬが、たつた今、持つて参りますと……さう云つといてくれ」

アヅモス「へーエ、妙ですな。貴方何時の間に御養子になられたのですか」

萬公「そんなこた尋ねる丈野暮だ。スガールに聞いてみよ、それで分らな、今度出て来た俺等の家來の龍彦に聞いて見りや分るのだ。エエ男が炊事場へ出て来るものぢやない、若主人の言ひ付だ、早く彼方へ行け」

アヅモスは怪訝な顔をしてスゴスゴと此場を立去り、病室に引返した。

萬公、お民、外二人は箒や雑巾やハタキで再び大掃除をなし、鍋蓋の隙から、這入った飯の上の灰を杓子で削り取り、水桶の中へ落して洗ひ、

萬公「此家は俄に客がフエールの

飯焚男泡を吹くなり。

泡あわふいた飯めしも知らしずに焦こげつかし
心こころを焦こがす四人よにん連れづかな
□

フエル □ 若主人わかしゆじん掃除さうぢ萬端ばんたん指圖さしづして。

飛とび廻まりたる灰神樂はひかぐらかな。

灰神樂はひかぐらかぶつて體からだは泥どろまぶれ

飯めしの灰はひをば拂はらふ可笑をかしさ。

拂はらうても又また拂はらうても飛とんで來くる

灰はひは四隅よすみに立たち上ありつつ。

お民たみさま胸むねを焦こがして居ゐるとみえ

飯めしの焦こげたも知しらぬ熱情ねっじやう。

若夫婦わかふうふ、夫婦ふうふ々々ふうふと泡あわを吹ふく

聲聞こゑききつ付けて飯めしを焦こがしつ。

胸焦がし飯を焦がして灰まぶれ

此御馳走を配膳と云ふ

斯く馬鹿口を叩き乍ら、灰まぶれの膳部を拵へ、慌ただしく朝飯を客間と病室に持運んで行く。

(大正一二・三・三 舊一・一六 於龍宮館 松村眞澄録)

第六章 洗濯使(一四一四)

治國別の居間へはフェル、アヅモスの兩人が膳部を運び、叮嚀に辭儀をし乍ら、フェルの方は慄うてゐる。フェルは三五教の宣傳使とアヅモスに聞いたので、俄に恐ろしくなつたのである。併し乍ら治國別、松彦、龍彦は一面識もないので、此家の下男とのみ考へてゐた。フェルは鬼春別以下三人の姿を見て、様子は分ら

ず、不思議相に俯いたまま横目で四人の顔を見比べてみた。エミシは早くもフェルの姿を見て、

エミシ「オオお前はフェルぢやないか。何うして此處へ来たのだ」

フェル「貴方はカーネル様でムいましたか、能うマア……何うしてお出でになりました。私は貴方の命令に仍つて、シメジ峠に三五教の宣傳使の閉塞隊を勤めて居る矢先、道晴別宣傳使に靈縛をかけられ、當家の庫に放り込まれ、ヤツと今朝この若主人に解放され、炊事や掃除の役を仰せ付けられて居ります」

エミシ「お前一人か」

フェル「イエ、ベットと二人でムいます。ベットも私と同様に早朝から大活動をやつて居ります」

エミシは鬼舂別を指ざし、

「オイ、此お方を知つてゐるか」

フェル「ハイ、ゼネラル様ぢやムいませぬか、どうしてマア三五教の宣傳使と、かやうな所へお出になりました。又靈縛にかかつてぢやムいませぬか」

鬼春「アハハハ、治國別様の靈縛にかけられ、たうとうゼネラルを棒にふつて、今日は三五教の一兵士となつたのだよ」

フエル「思ひきやゼネラル様が此家に

お越しあるとは夢にも知らず。

夢の世に夢を見てふ人の世は

はかなきものと今や悟りぬ」

鬼春別「三五の神の光に照されて

暗は晴れけり心の闇も」

治國別「チームスの珍の館に落合ひて

神かみの恵めぐみを味あぢはふ今日けふかなふ」

アヅモス「客まらうと人ひとよいと平たひらけく聞きこ召しめせ

萬まん公こう別わけが獻こん立だての味みを」

龍たつ彦ひこ「萬まん公こうの姿すがた見みえぬと思おもひしに

早はや飯めしたき焚たきとなりなりにけるかな」

松まつ彦ひこは飯めしの少すこしく色いろの變かはつたのを見みて、

松まつ彦ひこ「此この飯めしは何なんとはなしに色いろづきぬ

灰はひカラ女をんなのたきしものものにや」

アツモスいろづ色付きし萬公まんこう別の獻立こんだてと

思おもへば何なんの不思議ふしぎかはある。

さり乍ながら直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし

今日けふ一朝ひとあさは忍しのばせ玉たまへ〆

松彦まつひこ何なんとなくゲチゲチはと齒ははきしり

砂すなを嚙かむよな飯めしの味あぢかな〆

龍彦たつひこ萬公まんこうが主人しゅじん氣取きどりとなりよつて

灰はひカラ飯めしを炊たきしなるらむ〆

治國はるくに別わけは、

「皆さま、頂戴致しませう。お先へ御免」
と云ひ乍ら、一口口に含んで目を白黒し、吐き出す譯にも行かず、涙を流し乍らグツと呑み込んで了つた。白い飯の上に所々灰が黒く塊つてゐた。

治國別 「黒胡麻のふりかけ飯と思ひきや

目も白黒と麥粟をふく」

松彦 「麥飯の色にもまがふ灰飯に

黍惡相に粟を吹くかな」

龍彦 「オイ番頭さま、偶々のお客さまに、こんな飯を食はすといふ事があるか、餘りヒドイぢやないか」

アヅモス 「ハイ、萬公別の若旦那が御指圖で、お炊になつたのでムいますから、

何卒今朝丈は御辛抱下さいませ。それはそれは炊事場は偉い灰埃でムいました。飯の奴、鍋山が噴火して灰を降らし、そこから一面灰の山となりましたので、知らず知らずの間に厚い鍋蓋を潜つて、灰が浸入したのでムいませう。何なら鬼春別さま、久米彦さまにあがつて頂きまして、お腹がすきませうが、暫く待つてゐて下さいませ。更めておいしい御飯を炊いて参りますから……」

治國「イヤ、誰だつて同じ事だ。併し乍ら折角の志、無にするのも濟まないから一度之をスツカリ清水に洗つて日に乾かし、お茶漬にしてよばれませう。サ、お膳を引いて下さい。誰だつて此御飯許りは勿體ない事乍ら喉へは通りませぬから……」

アヅモス「左様ならば一先づ膳をひきませう

待たせ玉へよ暫くの間。

フエルさまお前も共に炊事場へ

急ぎ御飯を炊いてくるのよ」

フエル「炊き様に依つてお米はフエルさまだ。

サア是からが一生懸命。

生命の綱と聞えし此飯を

灰にまぶせし吾れはハイカラ。

萬公別主人の君と諸共に

腕に燃かけむし返しむむ

と云ひ乍ら、アツモス、フエルの兩人は急いで膳部を片付け、幾度も謝罪し乍ら、炊事場に引返して來た。見れば萬公はお民をつかまへて、一生懸命に指圖をしてゐる。

萬公「オイお民、火消壺の蓋は何時もキッチンと出來てるか、底の方に火がまわりはせぬかと能く氣をつけるのだぞ。コンロの下の灰を一遍々捨てる事を忘れるな。井戸の水はどんなところへ使へば危険でないか。煮物、炊物、沸かして呑む水等の外、決して生水は呑んでは可かぬぞ。此頃は梅雨だから、水に鹽氣があつて、

妙な黴菌が生いてゐるから充分に沸らして、水が呑みたけりや冷して呑め、生水を使ふのは手洗水か雑巾水より外にはならぬぞ」

お民「流しを洗うたり、食器類や俎板を洗ふのは何うしたら可いのですか。ヤツパリ之も湯を沸かすのですか」

萬公「エー、そんな事迄指圖せなくちや分らぬのかな、其奴ア水で辛抱するのだ。そして水壺に何時も水を用意して、非常の時の用意に備へておくのだ。そして毎日新しい水と取かへるのだぞ。柄杓などを水の中へつけておくと、水の味もかわるし、杓もホトびて損むから、一遍々外へ出して乾かしておくのだよ。そして井戸は使つたあとは蓋をしておくのだ。釣瓶繩の新しいのを使う時は、ようスゴいて使はないと、ク口を脱線するから氣をつけよ」

お民「鷹旦那さま、指圖計りして居らずと、貴方も一つ手傳うて下さいな。ここは井戸ぢやありませんよ。水道の水を使つて居るのですよ」

萬公「水道でも井戸でも同じ事だ。痲病やみが小便をたれるやうに、いつもジョウジヨウと洩しておいては公德上すまないから、水道の栓は、使つたら固く締め

ておくのだ。そして朝水道の水はバケツに一杯丈は使水とし、餘りは滌ぎ水にして外へ利用するのだ。お水を粗末にすると、月の大神さまの神罰が當るぞ」

お民「ハイハイ。能うゴテゴテと構ふ人ですな。そんな事位知らいで、大家の下女が勤まりますか」

萬公「コリヤ主人に口答するといふ事があるか。何だ灰だらけの飯を炊やがつて、おまけに火のいつた黒い黒い飯を澤山拵へたぢやないか」

お民「あんたが出て来て喧ましよう差出なさるものだから、つい氣を取られてお前さまの顔計り見て居つたら、焦げついたのですよ」

萬公「へへへへ、氣を取られて俺の顔計りみとつたといふのか、其奴ア駄目だ。諦めたがよからう、下女を女房にする譯にも行かず、又汝の赤い頬ぺたでは、如何に物食ひのよい萬公別でも、一寸は三舎を避けるからのう」

お民「ホツホホホ、誰が主人だつて、貴方の様なお顔に惚ますか。餘り奇妙な顔

だと思つて、氣を取られてゐたのですよ。モウ可いかげん彼方へ行つて下さいな」

萬公「今日はどうやら日和もよささうだから、お客さまの着物が大分汗じゆんで

ゐる。着替を出して着て貰つて、其お装束を洗濯するのだな」

お民「ハイハイ飯を焚かねばならず、洗濯もせにやならず、本當に忙しい事だ。

私はここへ飯焚き女に雇はれて來たのだから、洗濯は約束以外ですワ、洗濯さす

のなら二人前の給料をくれますか。お前さまは俄主人だから私の約束を知らぬの

だらう。庭掃きとも座敷の掃除番とも云つて、雇はれて來たのぢやムりませぬよ」

萬公「下女と云ふ者は家の内一切を構ふものだ。飯焚きといへば一切の事が含ん

でをるのだ。融通の利かぬ奴だなア」

お民「そんなこた分つてをりますよ。併し餘り融通を利かすと、忙しい計りで身

體が疲れて損ですワ。目のない主人に使はれて居つては、何程骨を折つても椽の

下の舞だから、マアやめておきませうかい。お前さま若主人だなんて、勝手にき

めてるのだらう、そんなこたチヤンとお民の目に映つてをりますよ。宣傳使の禪

持ぢやありませんか、オホホホホ、チツと何うかしてますねえ」

萬公「エー、お上の事が下に分るものかい。サア是から洗濯だ。洗濯の仕方は分

つとるかなア」

お民「洗濯と云つたら、河へ持つて行つて、浅瀬に石を一夕乗せて、漬けておけば可いのでせう。そして十日程して行けば自然に垢が除れてますワ。萬公さま、ここに古い禪や湯巻の古手が澤山つつ込んであるから、お前さま抱えて猪倉川迄持つて来て下さらぬか」

萬公「馬鹿云ふな、主人候補者の俺に向つて、チツと失禮ぢやないか。この背戸口で盥に水や湯を汲んでバサバサとやれば可いのだ。「きめ」の粗い水だとみた時は、始めに曹達を能く溶かして使へばキット美しくおちる、さうすると石鹼と時間とが經濟になる。そして滌ぎ水は奇麗に濁らなくなる迄何遍も變へないといふと、生地が早くいたむぞ。そして水で洗うて可いものと、湯で洗うて可いものとのとある。それを第一心得ておかないと洗濯婆にはなれぬぞ。俺は世界の人民の靈を洗濯する三五教の洗濯使だ。併し乍ら今日は讓歩して、汝に衣類の洗濯方法を教てやるのだから、能く忘れぬやうに覚えておけ。洗方に注意せないと、折角の結構な衣類が臺無しになつて了ふものだ。絹物や毛織物や色物は熱い湯につけて洗うと駄目だ。又毛織物は冷たい水に漬けても悪い。そして絹物、毛織物、麻

織物は強く揉んでは駄目だぞ。曹達（灰汁）や悪い石鹼で、絹物はキツと洗つてはならない、色物は猶更だ。そして色物は皆陰干にせなくては、日向に出したら皆色が褪せて了ふ。干す時は竿か繩を通して、木から木へ掛けておくのだ。白い物を色物の竿にかけると、色がついて臺なしになつて了ふぞ。ああ宣傳使も何から何迄知つてをらねば勤まらぬ、本當に難しい職掌だなア」

お民「ハハア、さうするとお前さまは若い時から洗濯屋の番頭をして居つたのだなア。男の癖にそんな事を知つて居るものは、首陀の内だつてありませぬワ。モウ餘り喋りなさるな、お里が見えたと、折角の縁談もフイになりますよ。ホツホ

ホホホ」

萬公「馬鹿云ふな、女子大學家政科の卒業生だ。それだから何もかも知つてるのだ」

お民「ホホホホ、女子大學へ男が行くのですか。さうするとお前さまは男の腐つた女の屑だな。道理でクツクツ云うと思つてみた」

萬公「女は口を慎むが第一だ。男子に抗辨するといふ事が何處にあるか、らしう

せよといふ言を知つてゐるか

お民「其位のこた、とうの昔に御存じのお民ですよ。主人は主人らしく、奴は奴らしく、下女は下女らしく、宣傳使は宣傳使らしく、居候は居候らしくせよと云ふ事でせうがな。お前さまも若主人なら、なぜ若主人らしくせぬのだい。私が一寸考へてみると、お前さまは、馬鹿らしく、ケレ又らしく、自惚男らしく、腰拔らしく、デレ助らしく、雲雀らしく、九官鳥らしく、まだも違うたら鸚鵡らしくみえますよ、ホツホホホ」

かかる所へアツモス、フェルの兩人はツマらぬ顔をして、入り来り、アツモス「オイ、お民、何といふ飯を炊きやがるのだ。偶々のお客さまに灰飯を食はしやがつて、マ一遍炊き直さぬかい。サ、早う、何をグズグズしてゐるのだ。ハハア此お客さまにうつつをぬかしやがつて、飯の焦たのも知らず、灰の這入つたのも氣がつかかなかつたのだなア」

お民「モシ二の番頭さま、此人、どつかへ伴れて行つて下さい、蕪から大根菜種のはしに至る迄ゴテゴテ云つて構ふのですもの、骨折つて炊事も出来やしませぬ

ワ

アヅモス「ヤア貴方は夜前のお客様、何卒奥へお入り下さいませ。先生が御待ち兼ねてムいます」

萬公「ウン、お前が番頭のアヅモスだなア。スガールやシーナが病氣で伏せつて居るので、お前も忙しい事だらう。併し乍らここ二三日辛抱してくれ、其代りに褒美は又此若主人がドツサリ使はずから」

アヅモス「ヘーエ、妙ですな。貴方何時の間にこの主人になられましたか」

萬公「遠き神代の昔から、靈の因縁でこの主人ときまつて居るのだ。俺は今の主人の父親のチームスの生れ變りだぞ」

アヅモス「ヘーエ、貴方のお年は、一寸見た所で四十近いぢやありませんか、御主人のお父さまは亡くなつてから、まだ五六年よりなりません」

萬公「其モ一つ親だ、親と云つたら先祖をすべて親といふのだ。それで遠津御祖代々の親等と祝詞にもいうてあるぢやないか。祖父さまだの、曾祖父さまだのと、人間は云ふか知らぬが、神の方では一口に親と云へば、それで可いのだ。ゴテゴ

テ言はずに、お民に飯の炊方から洗濯の方法まで教へてあるから、能く聞いて早く膳部を拵へ、珍客さまを待遇すやうに致さぬか」

アツモス「モシ、若旦那の候補生様、之から吾々が骨を折つて御飯を拵へますから、何卒治國別さまのお居間へいつて、暫くお客さまの待遇をして居つて下さいませぬか」

萬公「主人が番頭の言ひ付を聞く法はないけれ共、暫く折角のお客様だから、主人が出ないのも却て失禮になる、そんなら能く氣をつけて萬事抜目のないやうにやつてくれ。……お民、汝も、今度は性念入れて飯を焚くのだぞ」

と言ひ捨て、廣い家を迷ひさがし乍ら、漸くにして治國別一行の陣取つてゐる庭園内の建物を見つけて走り行く。

(大正一二・三・三 舊一・一六 於龍宮館 松村眞澄録)

第二篇 縁三寵望

第七章 朝餉〔一四一五〕

萬公は炊事場をあとに治國別の居間に驅け入り、頭に灰を被り乍ら顔に黒い汗を滲らせ、

萬公「これはこれは三五教の宣傳使治國別様を初め奉り松彦、龍彦、鬼春別、久米彦、スパール、エミシのお歴々様、女房がいかいお世話になりましたして家内一統の喜びは筆紙に盡す事は出来ませぬ。何とお禮を申してよいやら、あまり突然の事とて狼狽を致して居ります。二三日しましたら稍落ち着きますから、とつくりと調理法も調へお口にあふものを差上げ度いと存じます。何分下女が来たてでムりますなり、下男も漸く藏から引張出して初めての修行をさしたので、何事も意の如くなりませぬので、萬事不始末計りでムります、何卒神直日大直日に

見直し聞直しまして暫らくの御容赦をお願い申します」

鬼春「アハハハハ、萬公別さま、貴方何時の間に、此處の主人になりましたか。

まだ御披露もあつた様にも思ひませぬが」

萬公「決して決して左様な御心配は要りませぬ。披露や婚姻の儀式等は何日でも

宜しうムります。兔に角靈と靈とが密着不離の關係を持つてさへ居れば、最早動

かない大盤石の様なものですからな」

治國「萬公さま、どうやら今度はものになりさうだな。吾々に幹旋の勞を執らさ

うと思へばチツと「優待」せぬと駄目だよ」

萬公「滅相もない、こんな良縁を「勇退」して堪まりますか。假令「幽體」にな

つても勇退しませぬわ。エツへへへ」

治國「優待と云ふ事は大切に「もてなす」と云ふ事だ。待遇が悪いと不成功に終

るかも知れないぞ」

萬公「先生、縁起の悪い事云つて下さいますな。「もてなし」所か大「もてあり」

です」

松彦 「アハハハハ、先生、こいつは一寸逆上してる様ですな」

治國 「うん、頭から冷水でもぶつかけてやらなくちや大變な逆上せ方だ。おい、

萬公さま、お前の頭は何だ、大變心配したと見えて髪の毛が眞白になつたぢやな

いか」

龍彦 「自分の【はい】ぐう（配偶）について心を悩ましてゐるものだから、頭の

毛迄灰を被つた様にしてるのですよ。之では萬公さまもゼロ【ハイ】（零敗）だ」

萬公 「もし、龍彦のお客さま、ゼロ【ハイ】（零敗）でも何でもありませんよ。

萬公山が噴火して降灰をやつた所です」

龍彦 「ハハハハまるつきり灰猫同様だ。一體何をして居たのかな」

萬公 「炊事場へ行つて下女下男に對して、さい【はい】（采配）をふつて居たも

のだから、此通り灰殻頭になつたのですよ」

龍彦 「萬公別さま、お前は大變腹が悪いちやないか。俺等に灰まぶれの飯を食べ

させやうとしたぢやないか」

萬公 「何分家庭の様子がテンと分らぬものですから、思はぬ失【ぱい】（敗）を

致いたしました。併しかし御心ごしん【はい】（配）下くださいますな。屹度きつと今いまに御飯ごはんを焚たき直なほし僕しもべ共どもが【はい】ぜん（配膳）をもつて参まゐります
久米くめ「萬公別まんこうわけさま、随分ずいぶん敏すばしこうやりますね。何時いつの間にスガールさまと情約じやうやく締い結けつをなしましたか。随分ずいぶん凄すこい腕うでですな」
萬公まんこう「何なんと云いつても三五教あななひけうの萬公別まんこうわけですよ。

音おとに名な高たかきフサの國くに 猪倉山いのくらやまの山砦さんさいに

此世このよを亂みだす曲津神まがつかみ 八岐大蛇やまたをろちの懸かりたる

大黒主おほくろぬしの醜柱しこしら これに仕つかふる數多あまたの魔神まがみ

中なかにも別わけて 鬼將軍おにしやうぐんと仇名あだなをとつた

惡逆無道あくぎやくぶだうの鬼春別おにはるわけ 久米彦兩將軍くめひこりやうしやうぐんが

金城鐵壁きんじやつてつべきと恃たのみ 數萬すうまんの軍勢ぐんぜいを引率ひきつれて

いとも堅固けんこに守まもりたる 醜しこの陣屋ぢんやを打亡うちほろぼし

天下てんかの害がいを除のぞかむと 萬公別まんこうわけが部下ぶかの勇將ゆうしやう

はるくにわけ 治國別、松彦、龍彦を引率れ 旗鼓堂々と

てき 敵の陣屋へ攻めかくる 三五教の神將と

よ 世に聞えたる某が 生言靈に辟易し

さす 流石の鬼春別將軍も 兜を脱ぎ劍を投げ出し

まる 丸腰となつて紅涙滴々 五臓六腑を轉覆させ乍ら

すす 啜り泣きつつ 脆くも降参したりけり

に 逃ぐるを追はず 謝罪る様な腰拔者を

あた 頭の一つも毆つた所で 何の利益かあるべきと

ここは寛仁大度の 本性を發揮し

しこ 醜の魔神を神直日大直日に 見直し聞直し

もも 百千萬の過失を宣り直し 救ひ助くるは天の道と

また 瞬く間に至清至潔の身魂に感じ 無事にその儘事濟みとなり

てき 敵の大將を靈縛し乍ら 凱歌を奏して谷を飛び越え

いは 岩間を潛り杉の木立を掻き分けて 青葉茂る大野原を

聲は聞けども姿は見えぬ

山時鳥に送られて

玉木の村の里庄が館

チームス方へと凱旋したりけり

かかる智勇の神將なれば

鬼春別や久米彦を

蝮蛇の如くに嫌ひたる

天下無雙のスガール美人

忽ち吾に懸想して

電光石火

目にもとまらぬ急速力で

吾兩眼に視線を投げ

以心傳心

忽ち情意投合し

神界晴れての誠の夫婦

チームス館の若主人

萬公別となりけり

ああ惟神々々

常平生に三五の

神に仕へし甲斐ありて

嬉しき今日の吾身の上

夢ではないかと折々に

吾と吾手に頬を抓り

鼻を捻つて伺へば

やつぱり苦痛を感じ入る

治國別の師の君よ

何卒々々教子の

萬公別に暇を賜はり

二人が仲の媒酌を 完全に委曲に結ばせ給へ

偏に願ひ奉る。 小北の山で十七の

娘お菊に弾かれて 男を下げた萬公も

吾師の君のお蔭にて 漸く男を作り上げ

ビクトリア城に立向ひ 再び神力現はして

ダイヤの姫を救ひ出し 左守の司に遮られ

いささか閉口の爲態 然るに何ぞ圖らむや

金勝要の大御神 イドムの神の御恵

漸くここに相思の男女が 程遠からぬ其間に

合衾式を擧げむとす 今は萬公別にとり

最も大切の正念場 治國別の師の君よ

私の結婚濟むまでは 何卒々々辛抱して

萬公別の弟子なりと 人目を繕るひ一生に

一度の願を快く 何卒聞いて下さんせ

松彦、龍彦始めとし
鬼春別や久米彦の

ゼネラルさんよカーネルの
スパール、エミシ兩人よ

ここはお前も辛抱して
萬公別に花持たせ

そこはそれそれ都合よく
バツを合して下さんせ

偏にお願ひ申します
人に手柄をさそと思や

自分は何と云はれても
辛抱するのが男ぞえ

男に中の男とは
吾師の君を初めとし

皆さま等の事だらう
ああ惟神々々

御靈幸ひまませよ

一同「アハハハハハ」

鬼春「治國別様、大變に萬公別さまは春情立つてるぢやありませんか。氣の毒な

ものですな」

龍彦「三五教の大宣傳使英雄豪傑の萬公別様、スガール様の御容態は如何でムリ

ますか。一度お尋ね致したいとも思ひ、脈も見てお上げし度いと存じて居ります
が、何と云つても男が女に手を觸れると云ふのは劍呑ですからな。もしや拙者の
顔を見て「やつぱり萬公別様よりも貴方の方がどこともなしに男らしうムいます
わ。ネー貴方」などとやられちや當家の若主人に對して失禮ですから、まア控へ
て居りませうかい」

萬公「や、有難う。何卒、さう願ひます。何れ主人の私が親しく見舞つてやれば
勢がついて、直ぐに全快するでせうが、何だか女に「でれ」てゐる様に舅姑に思
はれても面白くないと思ひ、控へて居るのですよ」

龍彦「それだと云つて吾々は御祈願もし、鎮魂もしてやらなくちやなるまい、な
ア松彦さま。一つ先生に願ひして直接鎮魂をやつて來うぢやないか」

治國「さア、夫婦も御心配だらうし、道晴別も苦しんでるだらうから、お前等二
人に鎮魂を願ひ度いものだな」

龍彦「ハイ、承知致しました。さア松彦さま、師の君のお許しが出た。之から第
一着手としてスガールさまの身體検査をしようぢやないか。エツへへへへ」

と故意とデレ聲を出して笑うて見せた。

萬公「いや、その御心配には及びませぬ。お前さま等に拙者の女房を鎮魂して貰ひましては劍呑です。乳吸鎮魂、接吻鎮魂、裸鎮魂などをやられちゃ困りますか
らな」

龍彦「私は誠の宣傳使だ、決して心配して下さるな。偽宣傳使のガラクタ役員の様な脱線的鎮魂はやらないからな」

萬公「それでも廿世紀の教の宣傳使がチヨコチヨコやつて家を追ひ出されたり、本山から電報で呼び戻されたりした例もあるのだから大切の女房を任す事は出来ませぬわい、イツヒヒヒ」

治國「萬公別さまが、あまり心配をするから松彦、龍彦は少時く御遠慮して鬼春別、久米彦様に御苦勞になりませうかな」

萬公「いえいえ滅相もない。スガールは何卒放つといて下さい。此萬公別が不断的に遠隔鎮魂をやつてゐますから、やがて全快するでせう」

龍彦「大變氣が揉めると見えますな。とらぬ狸の皮算用ぢやありませんか。どう

も前途暗澹不有望の氣配が漂うてゐる様ですな。先生

かかる處へアヅモスはフェルと共に膳部を運び來り兩手をついて、

アヅモス「皆様、先程は誠に不都合な事を致しました。何分俄主人が采配をなさ

つたものですから、到頭何も彼も灰まぶれになりましたして申譯がムりませぬ。今度

は改めて支度を致しましたから、何卒お食り下さいませ

治國「どうもお手数をかけて済みませぬ。さア皆さま頂戴致しませう。随分お腹

が空いたでせう

萬公「いや、アヅモス、フェル、御苦労だつた。之から拙者が皆様にお給仕を致

すから、お前は彼方へ行つて其處邊を片付けるのだ。グツグツしてゐると、しや

うもない屑が出るかと困るからな

アヅモス「ハイ、承知致しました。ここにお酒が澤山にムりますから、何卒馬鹿

旦那様……ア、イヤイヤ若旦那様、お客様に充分お召り下さる様、お勧め下さい

ませ。左様ならば皆様、緩りと召あがり下さいませ

とフェルと共に恐る恐る此場を立去り再び炊事場に歸り行く。後は萬公の酌で一

座も賑ひ一同舌鼓をうつて朝飯を濟ましたりける。

(大正一二・三・三 舊一・一六 於龍宮館 北村隆光録)

第八章 放棄(一四一六)

アヅモスはフエルと共に炊事場に歸り、下女のお民を捉まへてそろそろ小言を云ひ初めた。

アヅモス「オイ、お民、貴様が確りしないものだから大變な恥を掻いたぢやないか。何の爲に炊事の御用をして居るのだ。女と云ふものは飯焚きが肝腎だ。折角の珍客さまに灰まぶれの飯を食はさうとしたぢやないか、ちと心得ないと當家には置く事は出来ぬぞ」

お民「アヅモスの番頭さま、さう注文通に御飯が焚けるものぢやありませんよ、今日の日天様でも照つたり曇つたり遊ばすぢやありませんか、………

朝夕あさゆふの飯めしさへこわし柔やわかし

兔角とかく【まま】にはならぬ世よの中なか……

と云いふ歌うたさへあるぢやありませぬか。さう小言こごとを仰おつ有しやると此方こちらの方ほうから尻しりをから
げて「左様さやうなら」と出でかけませうか。此頃このころは彼方あちらや此方こちらに澤山たくさんの工場こうぢやうが出來できて女をんな
は拂底ふつていですよ。こんな月給げつきふの安やすい下女げぢよになるものは滅多めつたにありませぬよ。私わたしが此
家この下女げぢよに來きて上あげたのは、恩惠おんけいてき的に社しゃ會くわい奉仕ほうしの一端いつたんだと思おもうて來きて居をるので
よ。萬公まんこう別わけと云いひ、お前まへさまと云いひ全然まるきり女の腐くさつた様やうな男をとこだな。女をんなの事ことを構かまふ腰こし
拔ぬけは目めなつと噛かんで死しんだがよろしいわいなア、これでも家政かせい學がく校かうを卒業そつげふした
【シヤン】ですからねえ、ヘン餘あまり構かまうて貰もらひますまいかい」
アヅモス「偉えらさうに云いうて居あるが、今朝けさの料理れうりの仕方しかたは一體いつたい何なんだ。あんな加減かげんの
悪わるいものが食くへると思おもふか、偉えらさうに云いふない」
お民たみ「食くへなけりや食くはいでもよいぢやないか。お前まへ達たちは料理れうり法はふを知しらないもの
だからゴテゴテ云いふのだらう、下司げすぐち口ちだからなア。松魚かつを節をの煮汁だしか、昆布こぶの煮汁だし

か、雑魚の煮汁か、味の素を使つたか辨別のつかないやうな下司口が、料理の小言を云ふ資格がありますか」

アヅモス「偉さうに云ふない、何だその風は、のめのめと賣女の出来損い見たやうな風をしやがつて、そんな事で立派な料理が出来ると思ふか。抑料理に取りかかるには襷をかけるか、エプロンを着けるかして身仕度をきちんとして髪の毛バラバラせぬやうに、そして苔の生えたやうな手を、曹達でも洗つて清潔にしなければ、折角の御馳走に黴菌が傳染るぢやないか。そして米を磨ぐにも砂を注ぎ意して取るのだ、クレクレと揺つて居ると砂は底にイサルから容易なものだ。今朝のやうに灰や砂の混つた飯は誰だつて食はれぬぢやないか。さうして洗ふにもお米を碎かないやうにして、水が澄みきり白水がないとこ迄洗ふのだぞ」

お民「エエ八釜しい番頭ぢやな。お前さまは何處でボーイでもやつて居たのかな、好うこせこせと釜の下までゴテづく吝嗇坊だなア」

アヅモス「別に構ひたい事は無いけれど、餘り貴様が分らぬから、一應料理法を教へて置くのだ。總て小鳥や魚を串にさして焼く時は火を遠くし、そして強火に

した方が、美味しう焼けるものだ。魚は身の方から、小鳥は皮の方から焼くのだよ。昔から魚身鳥皮といふからなア、充分焼いてから裏がへさないと不味なる。さうして網や串の焼けた後で肉を載せるのだ。それから煮る時には醤油や水を十分煮立として置いて、其後に入れないと甘い汁が出て仕舞ふのだ。野菜は眞青に茹るには湯に鹽を少し入れて蓋をせずに茹ると其儘の色を保つて居る。さうして茹つたら直冷たい水に入れるのだ。牛蒡や、落や、筍や、百合根等の灰汁の強いものは一たん湯掻いてから煮くのだ。さうして使うた道具はいつも定つた場所へキッチンと置いて置くのだ、清潔に磨いて元の所へちやんと戻して置かぬとまさかの時に間に合はぬぞ。棚の上に塵が溜つて居るか居らぬかそれも考へて網や串や、薄鍋を置いて置くのだ。そして餘つた食物は蠅不入に入れるか、布巾をかけて置くのだぞ」

お民「エ工矢釜しい、お前さまは土方の飯焚きでも仕て居たのだらう。餘り喋るとお里が見えますぞや」

アヅモス「これやお民、土方の飯焚きとは何だ。女と思つて容赦をすれば何を吐

すか分わかつたものぢやない、不調法ぶてうはふしておきやがつて何を口答くちこたへをするのぢや、これでも一家いつかの總理大臣そうりだいじんだぞ〇

お民たみ「ホホホホ。總理大臣そうりだいじんなんて尻けつが呆あきれますわい。當家たうけの總理大臣そうりだいじんはシーナさまぢやありませんか、お前まへさまは二にの番頭ばんとうだ。そこらの隅すみくたを掃除さうぢだいじん大臣だいじんだ。ごたごた云いはずと箒はつきなともつて次の間まを掃はいて來きなさい。萬公山まんこうやまが破裂はれつして大變たいへんな灰はひが降ふつて居ゐますぞよ。箒はつきを使つかつたらチヤンと釘くぎにかけて置おくのですよ。其處邊そこらに立たてて置おくと箒はつきの先さきがサツパリ薙刀なぎなたのやうになつて仕舞しまひますぞや。そして八はちタキは手首てくびを下さげて、天井裏てんじやうつらから障子しやうじの棧さんと上うへから下したへパタパタとはたくのですよ。どうしても動うごかせない道具だうぐは被物おほひをしておいて隅すみから掃はいて來くるのです。そして疊たたみの目めに逆さからうと、塵埃ほこりが皆疊みんなたたみの目めに滲にじんで仕舞しまひますよ。箒はつきの先さきを跳はねんやうにしてソツソツと掃はくのですよ、それが濟すんだら椽側えんがはの掃除さうぢをしなさい。雑巾ざふきんを緩ゆるう堅かたう絞しぼつて、板いたの目めなりに力ちからを入れて拭ふくのだよ。角すみの所ところは雑巾ざふきんを三角さんかくにして拭ふけば綺麗きれいになりますわ。夫それからニス、漆うるしや、檜ひのきの柱はしらは乾布巾からぶきんで念入ねんいれに拭ふくのですよ。きつと濡ぬれた雑巾ざふきんで拭ふいてはなりませんぞえ〇

アヅモス「これお民、何だ下女の癖に番頭に指揮すると云ふ事があるか」

お民「ヘン私が下女なら、お前は下男ぢや、餘り偉さうに云うて貰ひますまいか。

これこれフェルさま お前が灰撒の發頭人だ。何をグツグツして居るのだ、早く

アヅモスの下男と一緒に掃除をなさならぬかいなア」

フェル「さう矢釜しゆ云ふない。俺だつて今朝迄庫の中へ罪人同様突込まれて居

たのだから、些とは休養しなければやりきれぬぢやないか」

お民は、

「エエこの女郎男の腰拔奴」

と云ふより早く柄杓に水を汲んで二人にぶツかけた。アヅモス、フェルは眞赤に

なつて、

「これやお民、馬鹿にしゃがるな、これを喰へ」

と雙方から鐵拳を振つて一人の女を叩き付けて居る。お民は荒男二人に叩きつけ

られ、悲鳴を上げて「人殺し人殺し」と叫び出した。此聲に驚いてアーシスは走

り來り、いきなりアヅモスの首に手拭ひを後からパツと引っかけグツと引き倒し

た。フェルはこの権幕に驚いて裏口から細くなつて逃げ出しけり。

お民「アイシスさま好う来て下さいました。此奴偉さうに云やがつて仕方がないので水をかけてやりましたら、男らしうもない、女一人に二人の荒男が鐵拳を振つて喧嘩を買ひに来よつたのですよ」

アイシス「本當に無茶の事をする男ですね。オイ、アヅモス何だ、下女を捉まへて餘り大人氣ないぢやないか」

アヅモス「エーチヨツ、横合から飛んで來やがつて【ちよつかい】を出しやがるものだから、折角の折檻がワヤになつて仕舞つた。コリヤ、アイシス、俺の喉を締めてどうするのだ、これ見よ、痕がついて居るぢやないか」

アイシス「喧嘩の結末がついたらそれでよいぢやないか。アイ偉い疊中が灰だらけだ。ちと箒なと持つて其處邊中を掃除して來い。これだけお客さまで忙しいのに、女を相手にして居る所かい」

アヅモス「此奴もお民が感染したと見えて箒持て箒持てと吐しやがるな。箒に憚りさまだ」

アーシス「貴様は何時も「ほうき」の守だといつて威張つて居たぢやないか。箒持つのは貴様の性に合うて居るわ。サア早く掃いたり掃いたり」

アヅモスは庭箒を取るより早く、アーシスの頭を目蒐けて、

アヅモス「コリヤ、伯耆の守さまが、貴様の頭を播磨の守さまだ」

と云ひ乍らピシヤピシヤと撲りつけ尻に帆をかけて此場を逃げ去つた。アーシスは怒つてアヅモスの後を追つ駆けようとするのを、お民はグツと抱き止め聲を慄はして、

お民「もしもし貴方、一寸待つて下さいませ、これだけ澤山のお客さままでお取り込みでもあり、病人さまもあるのに、番頭同士が喧嘩なさつては家の親方に濟みませぬ。又スガールさまやスミエルさまの病氣に障るといけませんからなア」

アーシス「さうだと云つて此儘にする譯には行かぬぢやないか、後の爲にならぬからなア」

お民「まあまあ今日は辛抱して下さいませ、親方や娘さまが心配なさいますからな」

アーシス「ウンそれもさうだ。そんならお前の意見に従つて今日は忘れる事にせう。併しお前も此家へ來たらチツと言葉を改めて呉れぬと困るよ。御主人様を親方と云つたり、お嬢様の名を呼んだりすると云ふ事があるか」

お民「そんなら何と云つたらよいのですか」

アーシス「お上の方をお呼びするには御主人様を旦那様と云ふのだ。奥様はお部屋様とか奥様とか云つてよい。さうして御老人は御隠居様とか、大旦那様とか申

上げるのだよ。男のお子様なれば坊様、女のお子はお嬢様、或は坊ちやま、お嬢さ

まなど云つたらよい。二人以上の時は大きな坊ちやま、小さいお嬢様と云ふのだ。

そして自分の事は私と云ひ、「ウチ」だとか、「アテ」だとか、「ワタシ」など

は見つともないから云はぬがいい。さうして受け答へは「へエ」なんと云つては

いけない、「ハイ」と云ふのだよ。朝起きたらお上へ御挨拶をするのに「お早う

ムいます」と云ひ、晩は「お寝み遊ばせ」、外出の時には「行つて参ります」、

自分の用事で外出する時は「一寸やつて頂きます」と云ふのだ。帰宅の時は「唯

今歸りました」、御飯の時は「頂きます」とか、「頂戴致します」とか云ふのだ。

そして旦那様の外出の時は「行つていらつしやいませ」、お歸りになつた時には「お歸り遊ばしませ」と、かう叮嚀に云ふのだよ。總て言葉使はハツキリと叮嚀にさうして柔しみのあるやうに注意するのだ。使に往つて來たら、必ず直様復命しなくてはならない。後から序に申上ますと云ふやうな懶惰事をやつて居ると何時の間にか肝腎の用を忘れて仕舞ふからなア」

お民「何とまあ此處の内の男衆は俄旦那様を初め、誰人も彼れも女みたやうな事を云ふ人が集つたものだ、オホホホ、これで私も大分に勉強を致しました」

アーシス「お民さま、お前はどこともなしに下女に似合はぬ垢抜がして居るが、實際は何處から來たのだ。一寸聞かして貰ひ度いものだ」

お民「私はビクの城下に生れた者でムいます、一寸様子があつて親の名を名乗る事が出来ないのですよ」

アーシス「ウンさうすると父なし子だな」

お民「まあそんなものでせう。併し父親なしに出来る子は廣い世界に一人もありません、まあ何處かにあるでせう」

アーシス「お前の父親と云ふのは一體誰だ」

お民「私は血沼の村の卓助と云ふ人に育てられた者ですが、私のお父さまは立派な方だと云ふ事です。私の母が奉公に行つて居つて腹が膨れ、奥様が八釜しいので父が金をつけて卓助の家にやつたのださうですが、養家の両親も既に亡くなつて仕舞ひ、只の一人ぼちで仕方がないので其處邊中を奉公し歩き、二三日前に此處に雇はれたのです」

アーシス「實の事は俺もビクトリア城下の生れだが、そいつは妙だなア」

お民「へエ貴方もビクトリア城下ですか、さうしてお父さまは何と云ふ方です」
アーシス「これは秘密だから云はれないのだが、人に云はなければ知らしてやらう。俺も實はこの村へ、そつと里子にやられたのだ。俺の父といふのは左守の司のキュービットと云ふお方だ。何でも下女との中に俺が生れたので、藁の上から此村の首陀の家へやつて仕舞つたと云ふ事だ。どうかして一遍遇ひたいのだけだ。ど、名乗る譯にもゆかず困つたものだよ。さうして一體お前は誰の子だい」

お民「私のお母さまは臯月と云ひました。ビクトリア城内へ御奉公に上つて居る

時、刹帝利様のお手が掛かつて腹が膨れ、それが爲にそつと卓助の家へ下されたのださうです。こんな事云つて貰うと私の命が無くなりますから、どうぞ祕密に頼みますよ」

アイシス「成程道理でどこもなしに氣品の高い所がある。ヤア恐れ入りました」
お民「斯う雙方から何事も打ち合けた以上は、一層の事貴方と夫婦になつたらどうでせう、さうすれば互に祕密が守れますからなア」

アイシス「そりや有難いが何だか勿體無いやうな氣がしてならないわ、世が世ならお前は立派な王女様だ。私は臣の身分だからなア」

お民「そんな斟酌が要りますか、サア手つ取り早く相談を定めやうぢやありませんか」

斯く二人が話して居る次の間に何人とも知れず足音がスウスウと次第に細く消えてゆく。これはアツモスが二人の話を立ち聞きして居たのである。

(大正一二・三・三 舊一・一六 於龍宮館 加藤明子録)

第九章 三婚（一四一七）

治國別、松彦、龍彦の祈願に依つて四人の負傷者は三日の後全快する事を得た。チームス夫婦は治國別一行の神徳を感謝し娘の本服祝をなさむと、治國別を始め番頭下女の端に至るまで祝宴に列せしめた。治國別は正座に坐り、左側の上座には松彦、龍彦、萬公が座を占め、右側にはバラモン組の六人がズラリと列んだ。道晴別、シーナ及びスミエル、スガールの病氣全快組は、治國別と向ひ合つて下座に坐り、チームス夫婦及びアツモス、アーシスと順序を作り、祝ひの宴を開く事となつた。

是より前治國別外一同は神前に感謝の祝詞を奏上し、鄭重なる祭典を行つた事は辭つて置く。チームスは治國別に向ひ、さも嬉しげに両手をついて、

「チームス『治國別の宣傳使様、何から御禮を申上げて宜しきやら、餘り有難くて言葉も出ませぬ』」

治國『神様のお蔭によりまして、道晴別も救けて頂き、貴方方のお嬢さま、番頭

さままで今日此處で御無事な顔を見せて頂く事になりましたのは、全く三五の教を守らせ給ふ大國常立大神を始め奉り、數多の神々様のお蔭でムります。決して吾々の力ではムりませぬ。御禮を言はれましては、吾々は神様の神徳を自己のものとする事になつて困ります。何卒禮なんか云はない様に願ひます」

チームス「ハイ、神様有難うムいました。よくまア治國別様一行の體を通して、吾々一家に御神徳をお與へ下さいまして有難う御禮申上げます」

ベリシナ「三五教の先生方御一同、今主人が申上げた通り、實に感謝に堪へませぬ。二人の娘もコレにてヤツと安心致しました。道晴別様も御全快遊ばしまして、

コンな嬉しい事はムりませぬ」
と嬉し涙をハラハラと流す。

スミエル「三五教の先生様、惡神のために捕らへられ、九死一生の處を御助け下さいまして、御禮の申上様はムいませぬ。是も全く治國別様御一同の御親切のい

たす所でムいます」

スガール「暗い岩窟内に押しこめられ、再び此世の明りを見る事は出来ないものと、

決死の覺悟をいたして居りました所を、神様の御蔭で助けて頂きました。何卒御
緩り御逗留遊ばしまして、結構な御話を御傳へ下さいませ。様偏に御願ひ申します。
夫に就ても鬼春別様外御一同の方々に御苦勞をかけました事を有難く御禮申しま
す。何卒御一同様御緩りと、何もムいませぬが御酒を召し上り下さいませ。』
萬公『何か御馳走を差上げたいと存じ、種々と致しましたが、御存じの通り山間
僻地の事でムいますから、御口に合ふ様な物はムいませぬ。何卒緩り御召上りを
願ひます。舅姑を始め、姉のスミエル、竝にスガールに代つて、萬公別謹んで御
禮申上げます。惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世』
治國『これはこれは若主人様でムいましたか。イヤモウ大層な御馳走を頂きまし
て有難うムいます』

チームスは不思議相な顔をして、ベリシナを見返り、小聲になつて、
チームス『コレ、ベリシナ、私の知らぬ間にお前此宣傳使を婿に貰ふ約束をした
のかい。何故一口俺に云つて呉れぬのか。藁でつくねた様な男でも、矢張り一軒の
主人だから、何程結構な宣傳使でも主人の私に無斷で決めるとは、些と越權ぢや

ないか」

ベリシナ「イエ私は何にも存じませぬ。大方貴方が御決めなさつただらうかと、今の今迄思つて居りました」

テームス「ハテナ、モシ治國別の先生様、コリヤ何うした譯でムりませうかなア」
治國「イヤ私もテント存じませぬ。萬公別の大宣傳使が何時の間に弟子の吾々にも無斷で御養子になられましたかと怪しんで居つたのです」

萬公「千早振る神の結びし縁なれば

人の知るべき事柄で無し。

靈幸はふ神の教に従ひて

スガール姫の夫となりぬる」

テームス「いぶかしや神の言葉と云ひ乍ら

親おやの吾等われらが知らぬ間あひだに〆

ベリシナ〆何事なにごともイドムの神かみの計はからひに

結びむす玉たまひし縁えにしなるらむ。

さり乍ながら治國はるくにわけ別の神司かむつかさ

此縁このえにしをば如何いかに思おほしめすか〆

萬公まんこう何事なにごとも神かみの心こころに任まかすこそ

人ひとの人ひとたる道みちとこそ知しれ。

吾われとても心こころに染そまぬ縁えにしなれど

神かみの言葉ことばは背そむかれもせず〆

松彦まつひこ 面白おもしろき例ためしもきかぬ此このえにし

媒な介かも無なき今け日ふの驚おどろき

龍彦たつひこ 今いまの世よは男をとこ女をの別わかちなく

自じ由いう自じ在ざいにえにしを結むすぶ。

斯かくの如ごと亂みだれ果はてたる世よの様さまを

イドムの神かみは如何いかに思おぼすか

萬公まんこう 美うるはしき吾わが師しの君きみは惟かむながら

神かみにしませば許ゆるし玉たまはむ

テームス 治國別神の司よ此えにし
如何になさむか教へたまはれ

治國別 千早振る 遠き神代の昔より

男女の嫁ぎの道を 開き玉ひし神柱

神伊邪那岐の大神は 筑紫の日向の立花の

小戸の青木ヶ原にまし 身の穢れを清めつつ

自轉倒島に天降りまし 夫婦の道を開きてゆ

海河山野百の神 數多生みまし葦原の

千五百の秋の瑞穂國を 完全に委曲に開き治めて

百人千人萬人を 此の地の上に生み殖し

珍の神事終へ給ふ 其喜びの目の當り

憂ひに沈みし此館に 現はれ來る目出度さよ

男女をのこをみなの嫁とつぎの道みちは 天あめにます神かみ八百萬やほよろづ
地くににます神かみ八百萬やほよろづの 神かみのよさしの其その儘ままに
定さだまるものと知るしからは 必かならず心こころを煩わづらはし玉たまふ勿なかれ
シーナの君きみは家いへの子こと 永ながく此この家やに仕つかへまし
いとまめまめしくも朝夕あさゆふに 心こころを配くばり身みを碎くだき
仕つかへ玉たまひし信まめ徒ひとよ 抑そもそも此この家やの榮さかえをば
祈いのり玉たまはば第一だいいちに 姉あねの御おん子ことあれませる
スミエル姫ひめを娶めあ合はして 水みづも洩もらさぬ妹いもと背せの
縁えにしを結むすばせ玉たまふべし 次つぎに生うまれしスガール姫ひめは
萬まん公こう別わけの宣せん傳でん使し 生いのち命のちの親おやにましますば
これと妹いも背せの契ちぎりをば 結むすばせ玉たまへば天地あめつちの
神かみの心こころに叶かなふらむ 又またアーシスの家いへの子こは
容み貌め美うるはしきお民たみの方かたと 妹いも背せの契ちぎり永とこ久しへに
結むすばせ給たまひて三五あななひの 珍うづの教をしへを朝夕あさゆふに

清く守りて大神の御前に仕へ玉ひなば

玉置の村のチームスが家門高く富み榮へ

生みの子の八十連き五十檀八桑枝の如

茂木榮に榮えまさむチームス、ベリシナ二柱

萬公別やシーナさまアイシス司を始めとし

スミエル姫や、スガール姫お民の御方も千早振る

神の教に従ひて此處に目出度妹と背の

縁を結ばせ玉ふべしああ惟神々々

尊き神の御前に齋苑の館に仕へたる

治國別の神司赤心籠めて勧め奉る

朝日は照るとも曇るとも月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも印度の海はあするとも

これの縁の詳細に結び了へたる上からは

千代に八千代に變りなく玉の緒の生命も永く

何時迄も 堅磐常磐に榮えかし

ああ惟神々々 神の御前に赤心を

照らして誓ひ奉る

スミエルは嬉しさうな輝いた顔をしながら、

スミエル 三千世界の梅の花 一度に開く常磐木の

松の神代が廻り来て 常世の春となりにけり

玉置の村のチームスが 家に生れしスミエルは

祖先の家を守るため 家の子とますシーナさま

わが背の君と定めつつ 父の館を守りなば

家はますます富み榮え 子孫はますます繁榮して

チームス司の家の内は 忽ち天國浄土をば

開かむものと思ひつめ 朝な夕なに神様に

祈りし甲斐や現はれて
三五教の神司

治國別の御媒介
實に有難き今宵かな

頑固一途の父母も
妾二人が生命をば

助け玉ひし恩人の
言葉に如何で背くべき

治國別の御言葉は
金勝要の大御神

イドムの神の勅
心を鎮め慎みて

清き尊き御言葉に
従ひ玉へ足乳根の

いとも戀しき父母よ
神の御前にスミエルが

頸根突抜き赤心を
あかして願ひ奉る

ああ惟神々々
御靈幸はひまませよ

テーマス
三五の神の司の言の葉を

いかで背かむ吾等夫婦は

ベリシナありがた有難しいのち生命もたま魂もすく救ひます

をしへつかさ教司のうづ珍のみことば御言葉〇

スガールは又また歌うたふ、

スガール〇治はるくにわけ國別のせんでんし宣傳使とき常磐のまつ松のまつひこ松彦や

清きよき教をしへをたつひこ龍彦のかみ神のつかさ司のおとりもち御おと媒り介ち

諾うへなひ玉たまひし足たらちね乳根のちち父とはは母とのみひか御光りは

吾われら等をて照ますらすかがみ眞寸鏡げ實ありがたに有難かぎき限なりりなり

萬まんこうわけ公別かむづかさのた神司わ足われららはあはれぬ吾等あはれを憐あはれみて

千ちよ代やちよに八千代とこしへに永とこしへ久へにいもせ妹背みちの道むすを結むすびまし

父ちちのここのやかたましかたますまも此館たま堅かたく守まもらせたま給たまへかかし

妾わらははをんな女のみ身みなれどもこころ心こころはくすかたくすき楠くすのみき幹みき

朝あさなゆふ夕ゆふなおほかみに大神いをいの祈いのりてたふと尊ちちははき父母ちちははに

赤心まごころ以もつてよく仕つかへ
兄あにの君きみをば敬うやまひて
日々ひびの勤つとめをいそしみつ
僕しもへの端はしに至いたるまで
心こころを盡つくしてよく勤つとめ
神かみの許ゆるせし縁えにしをば
喜よろこび仕つかへ守まもるべし
ああ惟かむながらかむながら神かみ々々
イドムの神かみの御前おんまへに
謹つつしみ感謝かんしゃし奉たてまつる
』

萬公まんこう『スガールの姫ひめの命みことの赤心まごころを
嬉うれしみ奉まつる萬公別司まんこうわけつかき。
今いまよりは父ちちと母ははとを敬うやまひつ

汝なれが命みことを慈いつくしむべし。
治國別神はるくにわけかみの命みことの師しの君きみに
報むくふ術すべなき今け日ふの嬉うれしさ
』

第一〇章 鬼涙おになみだ (一四一八)

アイシスは治國別の歌に對し、自分とお民との結婚を承諾したりとの意を歌を以て答へたりける。其歌、

科戸しなどの風かぜもフサの國くに

猪倉山いのくらやまの山麓さんろくに

群むらがり立たてる玉置郷たまききやう

テームス館やかたに使つかはれて

朝あさな夕ゆふなに家政かせいをば

統轄とうかつしたるアイシスは

賤いやしき首陀しゆだの胤たねならず

由緒ゆいしよも深ふかきビクの國くに

左守さもりの司かみのキュービットが 其落胤そのらくいんと聞きこえたる

此世このよを忍しのぶ獨身者ひとりもの 治國別はるくにわけの宣傳使せんでんし

神の御言を蒙りて
 神の宮居を建て玉ひ
 スミエル嬢やスガール嬢
 救はせ玉ひし有難さ
 月は盈つ共虧くる共
 テームス一家を救はれし
 忘るる事のあるべきぞ
 お民の方の系統も
 左守司の家系より
 生れ出でたる珍の御子
 里子となりて世を送る
 吹き荒び来て兩親は
 よるべ渚の捨小舟
 ビクの國をば知召す
 父の危難を救ひまし
 又もや此處に現はれて
 道晴別やシーナ迄
 旭は照る共曇る共
 星は空より墜つるとも
 此高恩は何時の世か
 賤しき下女と住み込みし
 矢張りビクの國生れ
 秀れて高き人の子と
 チ又の里なる卓助が
 果敢なき身にも荒風の
 最早あの世の人となり
 彼方此方と彷徨ひて

艱みの果ては今茲に
テームス館の下女と迄

なり下りたる痛ましき
お民の素性を知るものは

アーシス一人を除いては
今迄誰もあらざりし

かくも尊き人の子と
生れましたたるお民さま

如何なる神の取持か
吾れと妹背の契をば

結ばせ玉ふ事となり
首陀の館で合衾の

いよいよ式を擧げむとは
思ひもよらぬ二人仲

ああ惟神々々
イドムの神が現はれて

治國別に懸りまし
吾等が素性を委曲に

明かさせ玉ひし尊さよ
さはさり乍ら吾々は

世に捨てられし日蔭者
二人の父は坐しませど

名乗らむ術もなくばかり
歎ち暮した苦しきも

今は漸く薄らぎて
曉告ぐる鳥の聲

旭間近き心地せり
ああ惟神々々

皇大神や治國の
畏み畏み眞心を

別の司の御前に
捧げて感謝し奉る

お民は歌ふ。

お民の神の恵も足乳根の

父と母とはあり乍ら

浮き世の雲に隔てられ

名乗もならぬ身の因果

雲井に高き刹帝利

ビクトリア王の珍の子と

生れ出でたる吾身なれ共

後の宮の御憤り

いと烈しくましましければ

母の臯月と諸共に

フサの御國の山野里

チ又の村なる卓助が

館に母子預けられ

悲しき浮世を送りしも

月に村雲花には嵐

吹き荒ぶなる世の中の

ためしに漏れず養ひの

父は此世を早く去り

母と妾は味氣なき月日を 山の畔に送る折しも

バラモン教の軍人 夜陰に乗じて入り來り

雨戸を蹴立てて踊り入り 妾と母を取り違へ

凱あげて連れ歸りしが 老いさらばひし母上と

知るよりも 情を知らぬ惡神は

悔しや戀しき母上を 野中の井戸へ蹴落として

玉の緒の命を奪ひし恨めしさ 妾は後に残されて

彼方の家に三日四日 永きは五日と彷徨ひつ

どこの家でも追ひ出され 漸々ここにチームスの

主人の君に助けられ 水仕奉公を勵む折

天の八重雲かき分けて 降りましたる神の教の司たち

主人の家の愛娘 スミエル姫やスガール姫を

救ひやらむと雄健びし 魔神のたけぶ猪倉山を駆け登り

出で行きませし其後に 妾は兩手を合しつ

凱あげて歸ります 生日の吉き日を待つ折もあれ

軍の君を引率れて 四人の人を助けつつ

歸らせ玉ひし嬉しさよ 神の司の其中で

戀に心を焦したる 萬公別の神司

神の仕組か知らね共 忽ち主人となりすまし

上から下まで氣を付けて 竈の下や鍋の蓋

彼方此方の拭掃除 火を焚くわざ迄懇に

教へ玉ひし有難さ うるさい事はなけれ共

何だか知らぬがゴテゴテと 言はるる度に氣が立ちて

遂には思はぬ灰神樂 どころも彼處も泥の海

足踏む場所もなき迄に 汚れたるこそ是非なけれ

折角心を盡し身を盡し 漸く煮えた飯さへも

喉を通らぬ灰まぶれ 八ツと顔をば赤らめて

胸を痛むる折もあれ アツモス司現はれて

又またいろいろいと御教訓ごけうくん

蟲むしの居所あところ悪わるかりしか

フエル奴やつこと謀はからひて

榮螺さざえの如ごとき拳こぶしを固かため

所ところかまはず打ち据すゑ

噴さいなみ居あたる折をりもあれ

ア―シス司つかさは忽たちまちに

此場このばに現あらはれ來きたりまし

荒あれ狂くるひみたる兩りやうにん人を

手てもなくグツと押おさへつけ

救すくひ玉たまひし有ありがた難なさ

情なさけは人ひとの爲ためならずと

世よの諺ことわざも目まのあたり

夫それより妾わらははア―シスの

司つかさを尊たふとみ敬うやまひて

世よが世よであらば吾夫わがつまと

仕つかへむものと村肝むらぎもの

胸むねをば焦こがす折をりもあれ

今けふ日は嬉うれしき三五あななひの

神かみの司つかさの治國はるくにわけ別わかが

尊たふとき聖きよき勅みことり

妹背いもせの道みちを契ちぎれよと

教をしへ玉たまひし言ことの葉はを

慎つつしみ畏かしこみ諾うべなひて

いとしき司つかさのア―シスと

茲ここに目め出でたく婚こんいん姻いんの

儀みのり式しきを結むすぶ事ことの由よし

確たしかに諾うべなひ奉たてまつる

ああ惟神々々かむながらかむながら 上は大國治立の大神を始めとしかみ おほくにはるたち おほかみ はじ

縁を結びの神柱えにし むす かむばしら 金勝要の大御神きんかつかね おほみかみ

イドムの神と現れませるかみ あ 神素盞鳴の大神のかむすさのを おほかみ

貴の恵を愼みてうづ めぐみ つつし 感謝の詞奉るかんしゃ ことばてまつ

ああ惟神々々かむながらかむながら 御靈の恩賴を賜へかしみたま ふゆ たま 』

鬼春別は一杯機嫌になつて、今迄遠慮してみた心が稍太くなつたと見え、
銅羅おにはるわけ いっぱい きげん 今まで ゑんりよ ころろ ややふと 見え、 どうろ
聲を張上げて歌ひ始めたり。こゑ はりあ うた はじ

吾れは大國彦の神わ おほくにひこ かみ 大國別に仕へたるおほくにわけ つか

バラモン教の大棟梁あななひけう けう だいとつりやう 大黒主の部下となりおほくろぬし ぶか

三五教の本陣とあななひけう ほんぢん 世に聞えたる齋苑館よ きこ いそやかた

只一戦に屠らむとただいっせん ほふ 數多の軍兵引率しあまた ぐんびよう いんそつ

山野を渡り谷川をさんや わた たにがは 越えて漸く枯尾花こ やつや かれをばな

茂り合ひたる浮木の里に 廣き陣屋を造りつつ

久米彦片彦將軍を 先鋒に立てて戦況を

窺ひみたる折もあれ 治國別の神司

嚴の御水火に打出す 其言靈に肝打たれ

脆くも破れ逃げ歸る 其淺ましき態を見て

とても叶はぬ此戦 進みもならず退きも

ならぬ苦しき破目となり 三千餘騎を従へて

浮木の陣屋を立ち別れ ライオン河を横切りて

古き尊きビクの國 ビクトル山の麓にて

又も陣屋を構へつつ 軍を進むる折もあれ

魔性の女に欺かれ 遠く逃げ行く大原野

シメジ峠を乗越えて 猪倉山の岩窟に

城を構へて遠近の 國を従へ靡かせつ

バラモン國を建設し 一旗擧げむと思ふ折

心の曲に誘はれて
チームス館の二人の娘を

家來の者に言ひつけて
攫ひ歸らせいろいと

脅しつすかしつ掛合へど
氣丈の女どこ迄も

操汚さぬけなげさに
舌を巻きつつ久米彦は

執念深くも吾物と
なさむとあせり一室に

しまひおきたる時もあれ
道晴別の神司

シーナを従へ出で來り
言靈車押出せば

流石の勇士も驚いて
右往左往に散亂し

周章狼狽其果ては
一先づ四人を岩窟の

千尋の底に投げ墮し
言ふにいはいはれぬ無禮をば

加へし事の恥かしさ
治國別の一行に

またも攻められ吾々は
執着心の夢も醒め

三千餘騎の兵士を
瞬く内に解散し

四人の眞人を送りつつ
漸く此處に來て見れば

豈計らむやフェル、ベットの兩人が 御庫の中に押込まれ

苦みぬたるぞ不思議なれ 悪虐無道の將軍も

神の光に照されて 今は誠の人となり

此家に仇せし身乍らも 治國別の御影にて

目出たき今日の宴席に 恥を忍びて列るも

縁の絲のどこ迄も 結ばれぬたる爲ならむ

ああ惟神々々 直日に見直し聞直し

宣り直されてチームスよ ベリシナ姫よ二人の姫御子

汝に加へし嘖みの 罪を赦させ玉へかし

旭はてる共曇るとも 月は盈つとも虧くる共

一旦神に目醒めたる 鬼春別はどこ迄も

誠の爲に身を盡し 世人を救ふ眞心に 朝な夕なに祈るべし

復りてチームス夫婦が身の幸を 神に誓ひて詫びまつる

赦させ玉へ惟神 神に誓ひて詫びまつる

と歌うたひ了をはり、一同いちどうに向むかつて恭うやうやしく感かん謝しゃした。されど疑うたがひ深ひがきテームス夫ふう婦ふは、鬼おに春はる別わけが心こころの底そこよりの悔くわい悟ごも謝しゃ罪ざいも信しんずる事ことが出で来きなかつた。それ故ゆゑ夫ふう婦ふは此この歌うたに對たいしても、一いち言ごんの答こたへさへせなかつた。此この外ほか久く米めい彦ひこ、スパーール、エミシなどの歌うたも澤たく山さんあれ共ども、餘あまり長ながければ是これにて言こと靈たま車ぐるまを停てい止しする。ああ惟かむな神ながら靈たま幸ちは倍はへ坐ま世せ。

(大正一二・三・三 舊一・一六 於龍宮館 松村眞澄録)

第三篇 玉置長蛇たまきちやうだ

第一章 經愕きやうがく〔一四一九〕

テームスは、悔くわい悟ごして其その精せい魂こん全まく純じゆん化くわし、眞しんの眞しん人じんたるの心しん境きやうに迄まで到たつ達たつせる、

鬼春別將軍を始め久米彦、スパール、エミシの四人を心底より信ずる事が出来なかつたので表面治國別の前には相當の取り扱ひをしてゐた。けれどもその心中は蚰蜒の如く嫌ひ、且つ恐れて居た。何處とも無く排斥氣分が現はれて來る。鬼春別は忍耐に忍耐を加え所在侮辱をも克く我慢し得る事が出來た。鬼春別は別室に入つて婆羅門の經典を讀誦した。自分の一は改心のため、一はチームスの惡心自愛心の猛火を消滅せむが爲であつた。チームスの家は祖先代々里庄を勤め隨分「地頭に法なし」と人民より憎まれて來たものである。巨萬の富を抱いてゐるも皆多數人民の膏血を搾つたものと一般に評判され、地位は村人の上位を占めてゐるが人望は殆ど地に墮ち、旃陀羅の様に卑しめられてゐた。鬼春別は此の頑固爺のチームスを悔い改めしめむと、態とに大聲にて讀經を始めた。その經文に曰ふ。

歸命頂禮謹上再拜

重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

「**譬**へば**長者**、**一**の**大宅**有らむ。其の**宅**久しく**故**りて、而も**復**た**頓弊**、

堂舎**高**く**危**く、**柱**根**摧**け**朽**ち、**梁**棟**傾**む**斜**が**み**、**基**陛**潰**れ**毀**れ、

墻壁**圯**れ**拆**け、**泥**塗**褌**け**落**ち、**覆**苦**亂**れ**墜**ち、**椽**栢**差**ひ**脱**け、

周障**屈**曲して、**雜**穢**充**徧**せ**り、**五**百**人**有つて、**其**の**中**に**止**住す。

鴟、**梟**、**鴞**、**鷲**、**烏**、**鵲**、**鳩**、**鴿**、**蜥**蛇、**蝮**、**蠍**、**蜈**蚣、**蚰**蜒、**守**宮、**百**足、**鼯**、

狸、**鼯**、**鼠**、**諸**々の**惡**蟲の**輩**、**交**横**馳**走す、

屎尿の**臭**き**處**、**不**淨**流**れ**溢**ち、**蛆**、**蠅**、**諸**蟲、**而**も**其**の**上**に**集**まれり。

狐、**狼**、**野**干、**咀**嚼**踐**踏なし、**死**屍を**齧**齧ひて、**骨**肉**狼**藉し、**是**れに**由**つて**群**狗、

競ひ**來**つて**搏**撮し、**飢**羸**悼**惶て、**處**々に**食**を**求**め、

鬪諍、**擄**掣き、**喙**は**が**み**嗥**吠ゆ。其の**舍**の**恐**怖、**變**状**是**の**如**し。

處々に**皆**、**魑**魅**魍**魎有り。夜**叉**惡鬼、**人**の**肉**を**食**噉す。(魑魍は**山**中**木**石の**精**怪。

魍魎は**水**中**に**住む**精**怪)

毒蟲の**屬**、**諸**々の**惡**禽獸、**孚**乳**産**生して、**各**自**ら**藏し**護**る。

夜**叉**競ひ**來**つて、**爭**ひ**取**つて**之**れを**食**す。**之**を**食**すること**既**に**飽**きぬれば、**惡**心

轉た熾んにして、

鬪諍の聲、甚だ怖畏す可し。鳩槃、茶鬼、土埵に蹲踞せり。

或時は地を離るること、一尺二尺、往返遊行し、縱逸に嬉戲す。

狗の兩足を捉つて、撲つて聲を失はしめ、脚を以て頸に加へて、狗を怖どして自

ら樂しむ。

復諸々の鬼有り、其の身長大に、裸形黒瘦にして、常に其の中に住せり。

大惡聲を發して、叫び呼んで食を求む。復諸々の鬼有り、其の咽鍼の如し。

復諸々の鬼有り、首牛頭の如し。或は人の肉を食し、或は復狗を噉ふ。

頭髮蓬亂して、殘害兇險なり、饑渴に逼められて、叫喚馳走す。

夜叉餓鬼、諸々の惡鳥獸、饑急にして四に向かひ、窓牖を窺ひ看る。

是の如き諸難、恐懼無量なり。是の朽ち故りたる宅は、一人に屬せり。

其の人近く出て、未だ久しからざるの間に、後に宅舎に、忽然火起り、

四面一時に、其の焰俱に熾んなり。棟梁椽柱、爆めく聲震ひ裂け、

摧け折れ墮ち落ちて、墻壁崩れ倒る。諸々の鬼神等、聲を揚げて大に叫び、

鴟鷲諸鳥、鳩槃荼等、周樟惶怖して、自ら出づること能はず。

惡獸毒蟲、孔穴に藏れ竄れ、毘舍闍鬼、亦其の中に住せり。

福德薄きが故に、火に逼められ、共に相ひ殘害して、血を飲み肉を噉ふ。

野干の屬、竝に已に前に死す。諸々の大惡獸、競ひ來つて食噉す。

臭煙蓬ぼつして、四面に充塞す。蜈蚣蚰蜒、毒蛇の類、

火に焼かれて、爭ひ走つて穴を出づ。鳩槃荼鬼、隨ひ取つて而も食ふ。

又諸々の餓鬼、頭上に火燃へ、飢渴熱惱して周樟悶走す。

其の宅是の如く、甚だ怖畏す可し。毒害火災、衆難一に非ず。

是の時に宅主、門外に在つて立つて、有る人の言を聞く、

「汝が諸子等、先きに遊戲せるに因つて、此の宅に來入し、

稚小無知にして、歡娛樂著せり」と。長者聞き已つて、驚いて火宅に入る、

方さに宜く救濟して、燒害無から令むべし。諸子に告諭して、衆の患難を説く、

「惡鬼毒蟲、災火蔓莖せり、衆苦次第に、相續して絶えず。

毒蛇蚘蝮、及び諸々の夜叉、鳩槃荼鬼、野干狐狗、鴟鷲鴟梟、百足の屬、飢渴の

悩み急きふにして、甚はなはだ怖おそ畏おそす可べし。

此この苦くすら處しょし難がたし、況いはんや復また大たい火くわをや」と。

諸しよ子し無む知ちにして、父ちちの誨をしへを聞きくと雖いへも、猶なほ故ほ樂ぎ著ちやくして、嬉き戲ぎすること已やまず。

是この時ときに長ちやうじや者や、而しかも是この念ねんを作なさく、「諸しよ子し此かくの如ごとく、我わが愁しうなう惱なうを益ます。

今いま此この舍しやたく宅たくは、一いつとして樂たのしむ可べき無なし。而しかるに諸しよ子し等ら、嬉き戲ぎに耽たん湎めんして、

我わが教をしへを受うけず、將まさに火ひに害がいせられむとす」と。即すなはち思し惟ゆして、諸もろの方ほう便べんを設まう

けて、諸しよ子し等らに告つぐ「我われに種しゆじゆ々の、珍ちん玩くわんの具ぐの、妙めう寶ほうの好かう車しや有あり、

羊やう車しや鹿ろく車しや、大たい牛ごの車くるまなり。今いま門もん外げに在あり、汝なんぢら等ら出いで來きたれ、

吾われ汝なんぢら等らが爲ために、此この車くるまを造ぞう作させり。意いの所しよ樂ぎやうに隨したがつて、以もつて遊いう戲ぎす可べし。」

諸しよ子し、此かくの如ごとく諸もろ々の車くるまを説とくを聞きいて、即そくじ時に奔ほん競きやうし、馳ち走そうして出いで、空くう地ちに

到いたつて、諸もろ々の苦く難なんを離はなる。

長ちやうじ者し子この、火くわ宅たくを出いづることを得えて、四し衢くに住ぢうするを見みて、師し子しの座ざに坐ませり。

而しかも自みづから慶きやうびて言いはく、「我われ今いま快け樂らくなり。此この諸しよ子し等ら、生しやう育いくすること甚はなはだ難かたし。

愚ぐ小せう無む知ちにして、而しかも險けん宅たくに入いれり。諸もろ々の毒どく蟲ちゆう多おほく、魑ち魅み畏おそる可べし。

大火猛焰、四面に俱に起れり。而るに此の諸子、嬉戯に貪著せり。

我已に之れを救ひて、難を脱るることを得せしめたり。是の故に諸人、我今快樂なり」と。

爾の時に諸子、父の安坐せるを知つて、皆父の所に詣つて、而も父に白して言さく、

「願はくは我等に、三種の寶車を賜へ。前きに許したまふ所の如き、諸子出で來れ、當に三車を以て、汝が所欲に隨ふべしと。今正さに是れ時なり、唯だ給與を垂れたまへ」

長者大に富みて、庫藏衆多なり。金銀瑠璃、碑磔瑪瑙、衆の寶物を以て、諸の大車を造れり。莊校嚴飾し、周匝して欄楯あり。

四面に鈴を懸け、金繩絞絡せり。眞珠の羅網、其の上に張り施し、金華の諸纓、處々に垂れ下だせり、衆彩雜飾し、周匝圍繞せり。

柔軟の繪纒、以て茵褥と爲し、上妙の細氎、價直千億にして、鮮白淨潔なる、以て其の上に覆へり。大白牛有り、肥壯多力にして、

形體姝好なり、これを以て寶車を駕せり。諸々の寶從多くして、而も之れを侍衛せり。

是の妙車を以て、等しく諸子に賜ふ。諸子は是の時、歡喜踊躍して、是の寶車に乗つて、四方に遊び嬉戲快樂して、自在無礙ならむが如し。

舍利弗に告ぐ、我も亦是の如し、衆聖の中の尊、世間の父なり。

一切衆生は、皆是れ吾子なり。深く世樂に著して、慧心有ること無し。

三界は安きこと無し、猶ほ火宅の如し。衆苦充滿して、甚だ怖畏す可し。

常に生老、病死の憂患有り。是の如き等の火、熾然として息まず。

如來は已に、三界の火宅を離れて、寂然として閑居し、林野に安處せり。

今ま此の三界は、皆な是れ我が有なり。其の中の衆生は、悉く是れ我が子なり。

而も今ま此の處は、諸々の患難多し。唯我一人のみ、能く救護を爲す。

復た教詔すと雖も、而も信受せず、諸々の欲染に於て、貪著深きが故に。

是を以て方便して、爲に三乘を説き、諸々の衆生をして、三界の苦を知らしめ、出世間の道を、開示し演説す。是の諸子等、若し心決定しぬれば、

三明、及び六神通を具足し、縁覺、不退の菩薩を得ること有り。

汝舍利弗、我衆生の爲に、此の譬喩を以て、一佛乘を説く。

汝等若し能く、是の語を信受せば、一切皆當に、佛道を成ずることを得べし。

是の乘は微妙にして、清淨第一なり。諸の世間に於て、爲めに上有ること無し。

佛の悦可したまふ所、一切衆生の、應さに稱讚し、供養し、禮拜すべき所なり。

無量億千の、諸力解脱、禪定智慧、及び佛の餘の法あり。

是の如きの乘を得せしめて、諸子等をして、日夜劫數に、常に遊戯することを得、

諸々の菩薩、及び聲聞衆と、此の寶乘に乗じて、直ちに道場に至らしむ。

是の因縁を以て、十方に諦に求むるに、更に餘乘無し、佛の方便を除く。

舍利弗に告ぐ、汝諸人等は、皆な是れ吾が子なり、我は則ち是れ父なり。

汝等累劫に、衆苦に焼かる。我皆な濟拔して、三界を出でしむ。

我先に、汝等滅度すと説くと雖も、但生死を盡くして、而も實には滅せず。今の

應に作すべき所は、唯佛の智慧なり。

若し菩薩有らば、是の衆の中に於て、能く一心に、諸佛の實法を聽け。

諸神世尊は、方便を以てしたまふと雖も、所化の衆生は、皆な是れ菩薩なり。
若し人小智にして、深く愛欲に著せる、此れ等の爲の故に、苦諦を説きたまふ。
衆生心喜びて、未曾有なることを得。聖者の説きたまふ苦諦は、眞實にして異無し。

若し衆生有つて、苦の本を知らず。深く苦の因に著して、暫くも捨つること能はず、

是れ等の爲の故に、方便して道を説きたまふ。諸苦の所因は、貪欲爲れ本なり。
若し貪欲を滅すれば、依止する所無し、諸苦を滅盡するを、第三の諦と名づく。

滅諦の爲の故に、道を修行す。諸の苦縛を離るるを、解脱を得と名づく。

是の人何に於てか、而も解脱を得る、但虚妄を離るるを、名づけて解脱と爲す。

其れ實には未だ、一切の解脱を得ず。聖者是の人は、未だ實に滅度せずと説きた

まふ。

斬の人未だ、無上道を得ざるが故に、我が意にも、滅度に至らしめたりと欲はず。
我は爲れ法王、法に於て自在なり、衆生を安穩ならしめんが故に、世に現ず。

汝舍利弗、我が此の法印は、世間を利益せむと、欲するが爲の故に説く。
所遊の方に在つて、妄りに宣傳すること勿れ。若し聞くこと有らむ者、隨喜し頂
受せば、

當に知るべし是の人は、阿惟越致なり（不退轉）。若し此の經法を、信受するこ
と有らむ者は、

是の人は已に曾て、過去の佛を見たてまつつて、恭敬供養し、亦是の法を聞ける
なり。

若し人能く、汝が所説を信ずること有らむは、則ち爲れ我を見、亦汝、及び比丘
僧並びに諸の菩薩を見るなり。

斬の法經は、深智の爲めに説く。淺識は之を聞いて、迷惑して解らず。
一切の聲聞、及び辟支佛は、此の經の中に於て、力及ばざる所なり。

汝舍利弗、尚ほ此の經に於ては、信を以て入ることを得たり、況や餘の聲聞をや。
其の餘の聲聞も、聖語を信ずるが故に、此の經に隨順す、己が智分に非ず。

又舍利弗、嬌慢懈怠、我見を計する者には、此の經を説くこと莫れ。

凡夫の淺識にして、深く五欲に著せるは、聞くとも解ること能はじ、亦爲に説くこと勿れ。

若し人信ぜずして、此の經を毀謗せば、則ち一切、世間の聖種を斷ぜむ。

或は復鬻蹙して、而も疑惑を懷かむ、汝當に、此の人の罪報を説くを聽くべし。

「若しは佛の在世にもあれ、若しは滅度の後にもあれ、其れ斯の如き、經典を誹謗すること有らむ。

經を讀誦し、書持すること有らむ者を見て、輕賤憎嫉して、而も結恨を懷かむ。

此人の罪報を、汝今復聽くべし。其人命終して、阿鼻獄に入らむ。

一劫を具足して、劫盡きなば更に生れむ。是の如く展轉して、無數劫に至らむ。

地獄より出でば、當に畜生に墮つべし。若し狗野干としては、其の形こつ瘦し、

鬣黹疥癩にして、人に觸燒せられ、又復人に、惡賤せられむ。常に饑渴に困みて、

骨肉枯竭せむ。

生きては楚毒を受け、死しては瓦石を被らむ。聖種を斷ずるが故に、斬の罪報を

受けむ。

若しは駱駝と作り、或は驢の中に生まれて、身に常に重きを負ひ、諸の杖捶を加へられむ。

但水草を念うて、餘は知る所無けむ。斬の經を謗するが故に、罪を獲ることは是の如し。

有ひは野干と作つて、聚落に來入せば、身體疥癩にして、又一目無からむ。

諸の童子に、打擲せられ、諸の苦痛を受けて、或時は死を致さむ。

此に死し已つて、更に蟒身を受けむ。其の形長大にして、五百由旬ならむ。

聾聵無足にして、蜿蜒腹行し、諸の小蟲に、啖食せられて、

晝夜苦を受くるに、休息有ること無けむ。斬の經を謗するが故に、罪を獲ること

是の如し。

若し人と爲る事を得ては、諸根闇鈍にして、矬陋攀壁、盲聾背偃ならむ。

言説する所有らむに、人信受せず、口の氣常に臭く、鬼魅に著せられむ。

貧窮下賤にして、人に使はれ、多病瘠瘦にして、依古する所無く。

人に親附すと雖も、人意に在かず。若し所得有れば、尋いで復忘失せむ。

若し醫道を修して、方に順じて病を治せば、更に他の疾を増し、或は復死を致さむ。

若し自ら病有らば、人の救療するもの無く、

設ひ良薬を服すとも、而も復増劇せむ。

若しは他の反逆し、抄劫し竊盜せむ、是の如き等の罪、横さまに其の殃に罹らむ。

斯の如き罪人、永く佛、衆聖の王の、説法教化したまふを見たてまつらず。

斯の如き罪人は、常に難處に生まれ。狂聾心亂にして、永く法を聞かず。

無數劫の、恆河沙の如きに於て、生まれては輒ち聾啞にして、諸根不具ならむ。

常に地獄に處ること、園觀に遊ぶが如く。餘の惡道に在ること、己が舍宅の如く。

駝驢猪狗、是れ其の行處ならむ。斯の經を謗するが故に、罪を獲ること是の如し。

若し人と爲ることを得ては、聾盲音啞にして、貧窮諸衰、これを以て自ら莊嚴し、

水腫乾癆、疥癩癰疽、是の如き等の病、これを以て衣服となさむ。

身常に臭き處にして、垢穢不淨に、深き我見に著して、瞋恙を増益し。

婬欲熾盛にして、禽獸を擇ばず。斯の經を謗するが故に、罪を獲ること是の如

し。

舍利弗に告ぐ、斯の經を謗ぜむ者、若し其の罪を説かむに、劫を窮むとも盡きじ。
是の因縁を以て、我故に汝に語る、「無智の人の中に、此の經を説くこと莫かれ。
若し利根にして、智慧明了に、多聞強識にして、聖道を求むる者有らむ。
是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。若し人曾て、億百千の覺者を見たてまつりて、諸の善本を植ゑ、深心堅固ならむ。是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。
若し人精進して、常に慈心を修し、身命を惜まざらむに、乃ち爲に説くべし。
若し人恭敬して、異心有ること無く、諸の凡愚を離れて、獨り山澤に處せむ。
是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。又舍利弗、若し人有つて、
惡智識を捨て、善友に親近するを見む。是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。
若し聖子の、持戒清潔にして、淨明珠の如くにして、大乘經を求むるを見む。
是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。若し人瞋り無く、質直柔軟にして、
常に一切を愍れみ、諸聖を恭敬せむ、是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。
復聖子の、大衆の中に於て、清淨の心を以て、種々の因縁、

譬諭言辭をもつて、説法すること無礙なる有らむ。是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。

若し比丘の、一切智の爲に、四方に法を求めて、合掌し頂受し、

但樂つて、大乘經典を受持して、乃至、餘經の一偈をも受けざる有らむ。

是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。人の至心に、聖舍利を求むるが如く、

是の如く經を求め、得已つて頂受せむ、其の人復、餘經を志求せず、

亦未だ曾て、外道の典籍を念ぜず。是の如きの人に、乃ち爲に説くべし」

舍利弗に告ぐ、我是の相にして、聖道を求むる者を説かむに、劫を窮むとも盡く

さじ。

是の如き等の人は、則ち能く信解せむ。

歸命頂禮靈法加持一切苦厄解除退散

惟神

靈幸倍坐世

惟神

靈幸倍坐世

と一生懸命に念じてゐる。チームスはこの聖經の始終を聞いてハツと自ら胸を抱き其の場にガタリと打ち倒れ人事不省に陥つて了つた。治國別を始め一同は直ち

に神かみの大前おほまへに祈願きぐわんを凝こらした。

（大正一二・三・三 舊一・一六 於龍宮館 出口伊佐男録）

第一二章 靈婚れいこん（一四二〇）

四邊暗澹しへんあんたんとして日月星辰じつげつせいしんの光ひかりもなく肌はだを劈つんざく如ごとき寒風かんふうは上下左右じやうげさいうより吹雪ふぶきとなつて吹ふき來きたる。魑魅魍魎ちみまうりやうの叫さけぶ聲こゑ、山やまの尾をの上へや川かはの底そこより嫌いやらしく聞きこえ來くる。身體しんたい兀立こつりつし、瘦やせ衰おとろへた一人ひとりの男をとこ、杖つゑを力ちからにトボトボと崎嶇きくたる隧道ずいだうを當途あてどもなしに下くだり行ゆく。ややホソノリと明あかるくなつたと見みれば野中のなかに立たてる大だいなる家屋かをくの前まへ、何處いづくの果はてかは知しらねども、かかると淋さびしき一人旅ひとりたび、何なには兔ともあれ、立寄たちよつて一夜いちやの宿やどを乞こはむものと門もんを潛くぐつて入いり見みれば、柱はしらは蟲喰むしくひ、處々ところどころに壁破かべやぶれ、高たかき堂舎だうしゃも柱根ちうこん碎くだけ朽くち、梁棟りやうとう傾かたむき歪ゆがみ、垂木たるきこま栞し、脱ぬけ落おち、得えも云いはれぬ臭氣しうき四邊しへんに充みち満みちたり。熊くま、鷹たか、鷲わし、虺蛇からすへび、蟒うはま、蝮まむし、蜈蚣むかで、蚰蜒げじげじ、百蟲おさむし、貉むじなを始はじめ名なも

知れぬ悪蟲の輩、屋内を前後左右に往來し、屎尿の臭鼻をつき、蛆蟲、糞蟲、足許に集まり來る其嫌らしさ。チームスは途方に暮れて此家を立去らむと思ふ折しも山犬の群、幾百ともなく現はれ來りて、左右よりチームスを取圍み、飢疲れたる様にてチームスを噛み喰らはむと吠猛る。チームスは命限りに此家を立出で救ひを呼べど如何はしけむ、聲調亂れて吾乍ら其何を云へるやを辨じ難き迄になつて來た。されど恐怖心に驅られて萱草の生えたる薄暗き野路を、杖を力に轉けつ輾びつ逃げ出せば前方より夜叉、悪鬼、二人の女を追ひ驅け來る。女はチームスが前に躓き倒れた。よくよく見れば吾子のスミエル、スガールの二人である。夜叉、悪鬼は忽ち追つき、苦しむ二人の娘を忽ち四肢を引きちぎりチームスが面前にて噛み喰らう、その嫌らしさ。目の前吾子の危難を見る、身も世もあらぬ心の苦み、神を念じ、せめては吾身なりと救はれむと合掌せむと焦れども如何はしけむ身體強直し、自由の利かぬ淺閒しさ。こりやかうしては居られぬと八九分迄も喰ひ盡された娘の首を眺め、これ今生の見おさめと轉けつ輾びつ、北へ北へと走れども、何者か足にまつばる心地して、焦れば焦る程進み得ざるぞ悲しけれ。

後うしろの方かたより幾いくひやくまん百萬まんとも數かずへ難がたき程ほどの夜やしや叉や、惡あくき鬼きの叫さけび聲こゑ、
惡あくき鬼き「ヤアヤアそれへ逃にげ行ゆくテームスの爺おやじ、一時いちじも早はやく引ひつとら捉とらへ吾われら等の食しょくに供きようせ
む」

と呼よばはる聲こゑに驚おどろいて空そら打うち仰あふげば空くうちう中に六ろく面めん八はつ臂びの妖えうくわい怪かい、妻つまのベリシナの頭とう髪はつを
掴つかみ空くうちう中にブラ下さげてゐる。ベリシナは悲ひめい鳴めいをあげて、

ベリシナ「テームス殿どの、助たすけておくれ」

と呼よぶ聲こゑ、五ご臟ざう六ろく腑ふに沁しみ渡わたり、煩はん悶もん苦く惱なうやるせなく進しん退たいここに谷きはまつて、因いん果くわ

を定さだめ佇たたずむ折をりしも、以い前ぜんの妖えうくわい怪かいは數すう千せん人にんの曲まが鬼おにを率ひきゐて、テームスが前まへに現あらはれ

來きたり、雷らいの如ごとき聲こゑを放はなつて言こと葉は鋭ずんく、

妖えうくわい怪かい「吾われは兇きよう黨たう界かいの大だい魔ま王わう、妖えう幻げん坊ぼうを使し役えきせる羅ら刹せつなり。汝なんぢが家いへは祖そ先せん代だい々だいより

民たみの膏かう血けつを絞しぼり、巨きよ萬まんの財さいを積つみ乍ながら、饑き餓が凍とう餒たいの民たみを救すくふ事ことを知らず、貪どん婪らん惡あく

徳とく日ひに月つきに重かさなり罪ざい障しやう滅めつする時ときなく、こここゝに汝なんぢが祖そ先せんは冥めい罰ばつを蒙かうむり、かかくの如ごとき

夜やしや叉や惡あくき鬼きとなり、尿しねう尿うを飲おん食じきし、惡あく獸じう惡あく蟲ちうを餌え食じきとなし、極ごく熱ねつ極ごく寒かんの苦くるみに日ひに

幾いくくわい回わいとなく惱なやめられ悲ひ慘さんの生しやう涯がいを送おくりつつあり。然しかるに汝なんぢ、此この度たび彌みろく勒くしん神せい政せいの太ふ柱ちゆう

神、大國常立大神の守らせ玉ふ三五教の宣傳使治國別の助けにより最愛の娘が危
難を救はれ、一時は命の親と喜び崇め、三五教の信者とならむとまで誓ひたりし
に、汝の精靈頑愚鈍慳にして心中已に三五教を忌避し居るに非ずや。又バラモン
教の宣傳將軍鬼春別以下の司に救はれ赦されたる眞人に對し、その言葉に、行ひ
に無限の悔蔑を表はし人々の精靈を惱ます罪、萬死も尚及ぶべからず。汝今の間
に心を改めざれば、これより極寒地獄に突墮し、無限の永苦を與ふべし。早く來
れ」
と手を執つて北へ北へ無理無體に引摺り行く。

チームスが祖先と聞えたる夜叉、惡鬼の數々は後より嫌らしき聲を一齊に放ち
て追かけ來る淺間しさ。骨肉相食む地獄道の此慘狀にチームスは人心地もせず、
魔王がなす儘に泣き叫び乍ら、際限もなき枯野ヶ原の石道を眞裸足のまま、足を
破り血を路上に染つつ無我夢中になつて曳かれ行く。

何時とはなしにチームスは薄暗い險峻な山の麓に着いてみた。以前の惡鬼羅刹
の影は煙の如く消え、四方の山の上へ悲しげな叫び聲が、間歇的に風のまにまに

聞えてゐる。火の様な風が吹いて體を焦すかと思へば、凍てつく様な寒風が忽ち吹き返し、氷柱の雨火の雨交る代る頭上に集中し下り来る。漸くにして目を開き四邊を眺むれば虎、狼、熊、獅子等が食物に飢たる如き様子にて幾百とも限りなく一人のチームスの肉を食まむと狙めつけて居る恐ろしさ。忽ち「キヤツ」と女の叫び聲、よくよく見れば妻のベリシナが獅子、虎の群に兩方より足を啣へられ吾目の前にて青竹割れにされ、群獸は忽ち寄り集つてバリバリと音を立て、残らずいがみ合ひ乍ら食つて了つた。

チームスは進退谷まつて運を天に任せ、觀念の眼を閉ぢて居る。暑さと寒さに殆ど人心地もなかつた。忽ち雷鳴轟き電光閃き渡り、チームスの身體は空中に捲き上げられ、フワリフワリと幾百里とも知れぬ山河を下に眺め、火焰の濛々と立上る山の頂に落下した。黒煙は異様の臭氣を放つて瞬く内に彼の身體を包んで了つた。何處ともなく、
「目を開け！」

と大聲に呼はるものがある。怖々乍ら眼を開けば先に空中より下り來りし妖怪羅

刹は彼が前に二人の女の両足をグツと左右の手に握り、頭を逆様にして崎嶇たる岩の上にコツリコツリと杖をつく様に臼搗いて居る。二人の娘はキヤーキヤーと悲鳴をあげ苦しげに泣き叫ぶ。チームスは一言を發せむとすれども、息塞がり舌つりあがり、ウの聲も出なかつた。羅刹は巨眼を開き、聲を荒らげて云ふ、
羅刹「汝、宿世の罪業によつて、現在の愛兒の血をすすり、肉を喰ひ骨を粉にして食すべし。然らざれば汝も亦かくの如くなすべし」
と云ふより早く、二人の女の頭部を力限りに岩に打ちつけメヂヤメヂヤに碎いて了つた。

チームスは止むを得ず肯づいた。羅刹は姫の頭肉の斷片を竹籠の先に掬うてはチームスの口に捻ぢ込む。チームスは止むを得ず、之を食はざるを得なかつた。口は痺れ醜く苦く毒藥を呑む如き苦しさを感じた。羅刹は大口開けて高笑ひ、
羅刹「アハハハハ、その方は今娘の肉を一口食つて味を知つたであらう。汝が祖先は玉置村の里庄として人民を苦しめ數多の貧者の膏血を絞り、汝が代になつては益々甚だしく、其富巨萬を重ね玉木の村に巍然たる邸宅を構へ、天地を畏れず、

驕慢の限りを盡す不届者、吾は人民の怨靈團結してここに羅刹として現はれしものぞ。いざ之よりは汝が精靈肉體ともに石を以て叩きつけ、幾百の肉團となし、汝が爲に生前苦しめられたる精靈に分與すべし。さア早く此岩上に横はれ」と罵り乍ら、その場に突き倒した。

かかる處へ天の一方より靈光輝き來り、チームスが前に落下した。羅刹は此火團に驚いて何處ともなく姿を隠した。火團は忽ち一柱の神人と化した。よくよく見れば鬼春別將軍が圓満具足なる靈衣を身に着し、莞爾として立つてゐる。チームスは打驚き初めて口を開き、

「チームス『ああ貴方は鬼春別様でムいましたか。誠に失禮な事ばかり心の裡で思ひました。それ故祖先の罪と自分とで斯様な處へ落されたのでムいませう。何卒私の罪をお赦し下さいませ』

と手を合し涙を流して頼み入る。

鬼春『拙者は御存じの通りバラモン教のゼネラル、鬼春別でムる。三五教の宣傳使治國別の一行の靈光に包まれ自我自愛の夢も醒め翻然として神の道を悟り、生

き乍ら地獄道に陥落せし身を救はれ、吾精靈は神界の命によつてエンゼルとなり、今ここに治國別宣傳使の命によつて汝を救ふべく下り來れり。汝も今より吾に倣つて前非を悔い、神の御前に犯し來りし罪惡を陳謝せよ。然らば汝が娘も妻も神の恵みに救はるべし。夢々疑ふ勿れ」

と云ひ放ち紫の雲に乗つて嚙曉たる音樂の響と共に中天高く歸り行く。後見送つて टीमス は名も知れぬ高山の上に跪き其勇姿のかくる迄涕泣し乍ら合掌し悔悟の念に驅られつつあつた。

俄に聞ゆる阿鼻叫喚の聲、 टीमスは何心なく谷底を見れば焰々たる猛火に包まれ、嫌らしき妖怪や黒蛇の數限りなく猛火に焼かれ、悶え苦しみ泣き叫ぶ聲であつた。此山の麓は空地もなく火に包まれ、妖怪毒蛇が焼き亡ぼされつつあつた。翼なき身は空中を翔り此場を逃るる譯にも行かず、頻りに天津祝詞を奏上し神の救ひを祈りゐる。

かかる處へ雲に乗つて勢よく降り來る一人の神人がある。よくよく見れば吾家に逗留したる萬公である。萬公は莞爾として、その前に立現はれ軽く目禮し乍ら、

萬公「舅殿、此谷底を御覽なさいませ。澤山な妖怪や毒蛇が焼き亡ぼされてゐるでせう。これは皆チームス家の祖先が作った罪業の化生した悪魔でゐますよ。又此萬公は貴方の祖先代々に苦しめられた憐れな人民の靈が凝結して萬公となり、此世に生れ来たものです。私はそれ故どうしてもチームス家の後を繼いで此チームス家の財産を人民に平等に分配し罪を亡ぼさねば、舅殿を始め祖先の罪は赦されません。お氣がつかしましたかな。萬民の精靈が集まつて萬公と名を負ひ現界に生れたのですよ」

チームス「いや、どうも有難うあります。因果應報の道理によつて先祖代々地獄の苦みを受けるのも已むを得ませぬが、三五教を奉じ玉ふ貴方が吾家の養子となり、祖先の罪を赦して下さるのなら、此位有難い事は無いませぬ。併し乍ら、スミエル、スガールの兩人は悪鬼羅刹の爲に肉體を粉碎され、もはや現界には居りませぬ。どうして家を繼ぐ事が出来ませうか。娘がなくても養子になつて下さるでせうか」

萬公「御心配なさいませぬ。治國別の宣傳使がお守りあればスミエル、スガール

兩人は極めて安全に肉體を保つてゐられます。さアこんな處に何時迄居つても堪りませぬ。私と一緒に歸りませう」

テームス「伴れて歸つて下さるか。あ、それは有難い。然し罪多い吾々、どうして此火焰の山を下る事が出来ませう」

萬公「いや宜しい。貴方も大變に足も疲れて居ります。私が背に負うて歸りませう。僅か三千里ばかり走れば玉置村の宅へ歸れますから」

テームス「何、三千里、大變に遠い所迄何時の間に來たのだらうな」

萬公「精靈の世界では三千里や五千里は現界の一丁を歩する暇もかかりませぬ。

さア早く背をお抱へ下さい」

と手をつき出せばテームスは小兒の様な氣になり、

テームス「ああ老いては子に従へだ。そんなら婿殿、宜しく頼みます」

萬公「親が子に禮なんか云つたり、頼む必要はありません」

と云ひ乍ら甲斐々々しく背に負ひ、猛々たる火焰の中をドンドンと火傷もせず、矢を射る如くに下り行く。

萬公まんこうに負おはれて山やまを下くだれば、際限さいげんもなき青草あをくさ茂しげる原野げんやがあつた。原野げんやの眞只中まただなかを一瀉千里いつしやせんりの勢いきほひでトントントンと驅かけ出だせば、水晶すいしやうの水みづを湛たたへた沼ぬまに行ゆきあたつた。流石さすがの萬公まんこうも之これには辟易へきえきして息いきを休やすめ、思案しあんを凝こらさむとテムスを青芝あをしばの上うへにソツと卸おろし雙手もろてを合あせて、

萬公まんこう 三千世界さんぜんせかいの梅うめの花はな 一度いちどに開ひらく常磐木ときはぎの

松まつの神世かみよとなりなりにけり 顯幽神けんいうしんの三界さんかいを

救すくはせ玉たまふ三五あななひの 救すくひの神かみと現あれませる

國治立くにはるたちの大御神おほみかみ 豊國とよくにひめ姫ひめの大御神おほみかみ

神素盞かむすさのを鳴なの大御神おほみかみ 瑞みづの御魂みたまに仕つかへたる

治國別はるくにわけの宣傳使せんでんし 松彦まつひこ、龍彦たつひこ神司かむつかさ

萬公別まんこうわけが眞心まごころを 憐あはれみ玉たまひ今いまここに

現あらはれまして此沼このぬまを 首尾しゆび克よく渡わたらせ玉たまへかし

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令大地は沈むとも
神の恵みは常久に

變らせ玉ふ事あらじ
守らせ玉へ惟神

玉置の里のテームスが
世繼となりし萬公別

眞心こめて神々の
御前に慎み願ぎ奉る

此世を造りし神直日
心も廣き大直日

只何事も人の世は
直日に見直し聞直し

世の過ちを宣り直す
恵も深き神勅

仰ぎ敬ふ今日の空
救はせ玉へ惟神

尊き神の御前に
親子二人が慎みて

救ひを願ひ奉る
ああ惟神々々

御靈の恩賴を賜へかし

かく歌ひ終るや際限もなき沼は忽ち變じて青疊となつた。テームスは目を開き
よくよく見れば、鬼春別が讀經せし隣室に目を眩して倒れてゐたのである。治國

別わけ、鬼春別おにはるわけ、松彦まつひこ、龍彦たつひこ其他そのたの人々ひとびとは枕頭ちんとうに集あつまつて懇切こんせつに介抱かいほうをし、天あまの數歌かずうた
を頻しきりに奏上そうじやうしてゐた。ああ惟かむながらたま神靈ち幸倍はへ坐世ませ。

（大正一二・三・四 舊一・一七 於龍宮館 北村隆光録）

第一三章 蘇歌〔一四二一〕

青葉あをばもそよぐ夏の風なつ かぜ すき通りよき一室いっしつに

館やかたの主あるじテムスは 鬼春別おにはるわけや久米彦くめひこの

心こころを疑うたがひ且かつ憎にくみ ただ一刻いっこくも速すみやかに

吾家わがやを出いだし呉くれんずと 心こころは千々ちぢに逸はやれども

大恩だいおん受けし三五あななひの 神かみの使つかひの宣傳せんでん使し

治國はるくに別のわけ一行いっかうに 憚はばかりながら胸押むねおさへ

一間の内に駆け入りて

棕櫚箒に頬被

させて竝べた四つ箒

未だ歸らねば神様に

お願ひ申して追ひ出し

家の禍除かむと

瞋恚の心に悩まされ

鬼春別のゼネラルが

一心不亂に讀經する

隣の居間に身を忍び

一生懸命陀羅尼をば

腹に唱へて待ち居たる

忽ち身體震動し

頭は痛み胸つかへ

人事不省に陥りて

其精靈は逸早く

身體内を脱け出し

限りも知れぬ枯野原

寒風荒む地獄道

杖を力によぼよぼと

涙と共に進み行く

道の傍へに立ち竝ぶ

一つ家屋を見つげ出し

一夜の宿をからむとて

立寄り見ればこは如何に

柱は腐り棟ゆがみ

惡獸惡蟲往來し

吾身邊を目標に

群むらがり來きたるいやらしさ
こりや叶かなはぬとテームスは

力ちから限りに逃にげ出だせば
道みちの左さ右うに怖おそろしき

妖えう怪くわい變へん化げの現あらはれて
妖えう姿しき怪くわい體たい現げんじつつ

獸けものの肉にくや人ひとの肉にく
争あそひいがみ喰くらひ合あふ

其その光くわう景けいに仰ぎやう天てんし
逃にげむとすれど足あし重おもく

同おなじ所ところをぢたばたと
汗あせを流ながして藻も搔がき居ゐる

斯かかる所ところへ中ちゆう空くうより
雷らい鳴めい轟とうく怪くわい聲せいが

耳みみを打うつよと見みる中うちに
惡あく鬼き羅ら刹せつが現あらはれて

限かぎり知しられぬ夜や叉しゃ惡あく鬼き
從したがへ攻せめ來くる怖おそろしき

極ごく暑しよの風かぜや極ごく寒かんの
嵐あらしに吹ふかれ何ど處ことなく

身みは中ちゆう空くうに飛とび散ちりて
遙はるか彼かなた方なたの山やまの上へに

佇たたずみ居ゐたる訝いぶかしさ
忽たちまち聞きゆる阿あ鼻び叫けう喚わん

よくよく見みれば山さん麓ろくの
谷たに間ま々たに々まに濛も々もと

燃もえ上ありたる大だい火くわ焰えん
黑こく煙えん四あ邊たりを包つみつつ

怪しき姿の精霊や

黒蛇なぞが火の中に

苦しみ悶ゆる怖ろしさ

身の毛もよだつ計りなり

再び羅刹は現はれて

妻のベリシナ初めとし

スミエル、スガール兩人を

力限りに虐待し

身を引き裂きて血を絞り

碎いて喰ふ有様に

目も當られず टीमスは

悔悟の涙に暮れながら

両手を合せて大神の

救ひを祈り奉らむと

思ひし事も水の泡

言霊車止まりて

唯一言も轉び得ず

途方に暮れたる時もあれ

天を焦して下り来る

一大火光は忽ちに

容色端麗比類なき

大神人となりにける

よくよく見れば三五の

神に仕ふる萬公が

五色の衣を纏ひつつ

チームス爺に打ち向ひ

種々雑多と靈界の

因縁話を説き諭し

親子おやこの契ちぎりを結むすびつつ 背せなに背せ負おひて濛も々もと

燃もえ擴ひろがりし火焰くわえんをば 難なんなく分わけて下くだりつつ

青草あをくさ茂しげる大野原おほのほら 一いつち直よく線せんに東とう方ほうに

向むかつて驅かけ出だす勇いさましさ 萬まん公こう別わけはテームスを

背せなに負おぶつて進すすむ中うち 際さい限げんもなき大沼おほぬまの

前まへにピタリと行ゆき當あたり 息いきを休やすめて手てを合あは

皇大神すめおほかみを祈いのる折をり 碧あをき湖沼こせつは忽たちまちに

いと香かんばしき青疊あをたたみ テームス館やかたの奥おくの間まと

變かはりたるこそ不思議ふしぎなれ テームス、ハツと氣きがついて

四邊あたりを見みれば三五あななひの 治國はるくに別わけを初はじめとし

松彦まつひこ龍彦たつひこ萬公まんこうや 鬼春おに別はるや久米彦くめひこの

軍いくさの司つかさを初はじめとし 妻つまのベリシナ、スミエルや

スガール、アィシス、アヅモスの 家いへの子こ迄までが枕頭ちんとうに

雙手もろてを合あはせ三五あななひの 神かみの助たすけを祈いのり居ある

眞最中と見るよりも

遠のチームス自我を折り

執着心を放棄して

一切萬事三五の

教に任す事としぬ

ああ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ。

チームスは四邊をキヨロキヨロ見廻し乍ら、一同の吾枕頭に端坐し祈願を籠めて居るのを見て、感謝の涙を流し乍ら、

チームス「ああ、ベリシナお前は此處に居たか、スミエルもスガールも無事であつたか、アア結構々々、もうお前は悪鬼羅刹に引き裂かれ、殺されて仕舞うたと思つて居たに、まア結構であつた。夢ではあるまいかな」

ベリシナ「爺殿確りなさいませ。貴方は今目を眩かして殆ど死んで居られたのですよ。治國別様や鬼春別様、萬公さまを始め御一同の丹精によつて罪を赦され、再び此世の明りを見る事が出来たのです。早く神様初め皆様にお禮を申しなさい」

チームス「ああこれはこれは御一同様、よくまア助けて下さいました。私は祖先

代々よりの宿業によつて何とも形容の出来ぬやうな地獄に墮ちて参りました。罪程怖ろしいものはムいませぬ。貴方方がお出下さいませぬでしたら、チームス家の祖先を初め、子孫に至る迄一人も残らず八萬地獄に墮されて無限の責苦に遇はねばならぬ所でムいました。娘のスミエルやスガールが猪倉山に囚はれ深い陥穽に墮し入れられ苦しめられたと聞いてから、鬼春別様、久米彦様外御一同のお方が憎らしくなつて表面では素知らぬ顔をして居るものの、心の中は鬼の様に殺氣立ち、一時も早く吾家を放逐したいと我情を張つて居りました。娘の囚はれたのも全く吾々の祖先や子孫をお助け下さるためのお仕組だつたと云ふ事を深く悟りました。鬼春別様、久米彦様、其他の方々様、私の罪を何卒お赦し下さいませ。私は靈界に往つて貴方の清き尊き御精靈に助けられて参りました。又萬公さまも……瓢軽な落付のない困つた男だ、何程娘スガールが戀慕して居つても、こんな男をチームス家の養子にする事は出来ない、ぢやと云つて娘の戀の醒めない中はどうする事も出来ない。一層のこと毒害でもせうか……と心の中に誰しらず悪い考へを抱いて居りました。此罪も萬公さま何卒赦して下さい。靈界に於て進退谷

り苦悶くもんの最中さいちゆうをお助けたす下さくだつたのは貴方あなたの精霊せいれいでごいました。サアこれから此家このいへを萬公まんこうさまと番頭ばんとうのシーナさまとに任せまかますから好きすな様やうにして村人むらびとを助けたすてやつて下さください。 टीमスていむすは財産ざいさんに對たいしてはもう些ちつとの執着しふちやくもありません。

鬼春おにはる別わけは涙なみだを流ながし乍なら、

鬼春おにはる「 टीमス様さま、よくも其處そこ迄まで悟さとつて下さくださいました。拙者せつしやも治國はるくに別わけ様の御教導ごけうだうによつて生乍いきながら地獄ぢごくを逃のがれ天國てんごくに救すくはれ、因縁いんねんあればこそ、かうして假令たとへ一夜いちやなりとも逗留とうりうさして頂いただしたのでごいます。又また二人ふたりのお娘子むすめごを困こまらしめたのも、やつぱり吾々われわれが責せきを負おはねばなりません。娘むすめの親おやとして吾々われわれをお恨うらみなさるのも決けつして御無理ごむりはごいませぬ。貴方あなたが筭はつきを立てて早く歸かへれがしとお祈いのりして居ゐられたのも幽かすかに私わたくしの耳みみに響ひびいて居をりました。夫故態それゆゑわざと貴方あなたの耳みみに聞きゆるやうに聖經しやうきやうを讀どく誦じゆし、貴方あなたの反省はんせいを促うながさむとして居ゐた所ところ、貴方あなたは經力きやうりきに打うたれて人事じんじふせい不省ふせいにおなりなさつたのです。……ああ濟すまぬ事ことをした……と、直様靈界すぐさまれいかいに祈いのつて居をりました所ところ、よくまア蘇生そせいして下さくださいました。何卒どうぞこれで恨うらみをスツカリと晴はらして下さくだいませ。」

チームス「ハイ勿體ない、そんなお言葉を聞きましては冥罰が當ります。貴方の
お蔭で、吾々一族が無間地獄の苦しみを受けるのを脱れる端緒が開けたので、
ます。實に人間の怨恨程怖ろしいものは、
一族を可愛がつて御指導下さいませ」

と熱涙を浮べて合掌する。鬼春別は嬉し涙に掻き暮れ物をもえ言はずしやくり泣
きをして居る。エミシもスパールも神恩の有難きに感謝し言葉塞がり涙に暮れて
居た。

治國「チームス殿、今回の幽界旅行によつて、因果轉生の道理がお分りになつた
でせうなア」

チームス「ハイお蔭に依りまして後生の怖ろしい事を悟りました。唯人間は惟神
のお道に従つて、世間愛や自然愛を超越し、神の愛に生き、善徳を積まねばなら
ないものと深く悔悟致しました。さうして貴方のお弟子と思つて居た萬公さまは、
深き因縁によつてチームス家の相續者となり、祖先以來の罪惡を拂拭し給ふ御方
と深く悟りました。何卒、結構な宣傳使の隨行者なれ共、曲てチームス家の養子

に與へて下さいませまいか。折入つてお願い致したうムいます』
治國 萬公さまに異存さへなくば、私は些も構ひませぬ。道晴別、松彦、龍彦、
貴方の意見は何うですかな』

道晴別 神の道闇を晴らしてわけ上る
日の出の神の御旨なるらむ』

松彦 松の世の小天國を築かむと
神は萬公を下せしならむ』

龍彦 罪汚れ百の惱みを「たつ」彦の
教の開く基なるらむ』

はるくにわけ 治國別 有難し 吾三柱の珍の弟子

うへな 諾ひますも神心ならむ。

いざさらばチームス夫婦スガール姫

まんこう 萬公を君が家柱とせよ

ありがた 有難し 治國別の御言葉を

つつし 慎み神に仕へ奉らむ

つみおほ 罪多きチームスの家も三五の

かみ 神の伊吹に清められける

スガールむらきも 村肝こころの心そこの底あより愛あいしたる
萬まんこうわけ公別そに添うれふぞ嬉うれしき

シーナおほかみ 大神みことかしこの御言みこと畏かしこみテームスの
家いへに誠まことの花はなは咲さくらむ

スミエルかむながらむす 惟神たま結び給えにしひし縁えにしなれば
吾われも仕つかへむシーナの君きみに

アーシスはるくにわけ 治國かみ別神つかさの司くちの口くちをもて
結むすびたまひし縁えにしぞ尊たふとし

お民たみ「あななひ三五つぎの月つきは御空みそらに輝かがやきて
吾胸わがむねさへも晴はれ渡わたりぬる」

鬼春別おにはるわけ「おほぞら大空おほぞらに輝かがやく月つきの影かげ見みれば
笑ゑませ給たまひぬえチームけス家けの棟むね」

久米彦くめひこ「いづみたまみづ嚴御魂瑞いづみたまみづの御靈みたまは玉置たまおきの
チームやかたス館やかたに輝かがやきたまふ」

スパール「つききよ月清おほぞらあをく大空おほぞらあを青あをき今宵こよひこそ
闇やみの晴はれたる心こころ地ちこそすれ」

エミシいぐさ「バラモンの軍の司カーネルと

仕つかへし吾われも心こころ嬉うれしき」

治はる國くに別わけ「テームスの家の譽ほまれは今日けふよりぞ

月つき日の如ごとく輝かがきまさむ」

テームス「罪つみ多おほき吾わが館やかたをば清きよらけく

治をさめたまひし神かみぞ尊たふとき」

斯かく互たがひに述じゆつ懐くわいを述のべ、和わ氣あ靄あ々あとして神しん前ぜんに額ぬかづき、各おの祝のり詞とを奏そうじ上やうし、テーム

スが再さい生せいの神しん恩おんを感かん謝しゃしたりける。
窓まどの外そとには涼すずしき夏なつの風かぜ「ヒチリキ」を吹ふいて穩おだかに通かよふ、ああ惟かむ神ながら靈たま幸ちは倍へ坐ま

世。

(大正一二・三・四 舊一・一七 於龍宮館 加藤明子録)

第一四章 春陽(一四二二)

萬公は神殿に參拜を終り、一同の打解けて談話せる居間に神懸りとなつて現はれ來り謠ひ始めた。

萬公(謠曲調) 『此世を造り玉ひたる、千早振る尊き神が現れまして、神の善惡正邪をば、立別け玉ひ人々の、心にかかる村雲を、伊吹拂ひて天國を、此地の上に建設し、堅磐常磐の五六七の世、いや永久に榮えゆく、松の神世をたてむとて、天教山に現れませる、木花姫の神柱、コーカス山に現れませる、日出別やウブスナの、珍の館に永久に、教を守らせ玉ひつる、

八島主を始めとし、自轉倒島に至りては、桶伏山の聖場に、錦の宮の太
柱、太しき立てて皇神を、齋かひ奉り朝夕に、赤心籠めて仕へます、玉
照彦の神柱、瑞の魂と現はれ玉ひ、玉照姫の神柱、嚴の魂と現はれ玉ひ、
暗夜を照らす英子姫、紫姫と諸共に、此世の惡魔を龍國別や、其他百の
司たち、神政成就の聖場と、定めて珍の御教を、四方に開かせ玉ひつつ、
神素盞鳴の大神の、御言畏み萬壽山、靈鷲山やエルサレム、黄金山に神
柱、太しく立てて現身の、暗世を永遠に照らさむと、努め玉ふぞ有難き、
ウブスナ山の齋苑館、八島主の部下となり、月の御國に蟠まる、八岐大
蛇や醜鬼を、言向和し三五の、誠一つの御教を、以て世人を救はむと、
松彦、龍彦、萬公を、從へまして河鹿山、激しき野分に吹かれつつ、祠の
森や山口の森、閑荒ぶ荒野を涉り、野中の森や浮木の森、バラモン教のゼ
ネラルと、威勢輝くランチ片彦將軍を、誠の道に言向けて、苦集滅道説き
明し、道法禮節明かに、教へ玉ひて弟子となし、尚も進んでライオンの、
清き水瀨を横切りつ、ビクトリア城の刹帝利、左守の司の危難をば、救

ひ給ひて漸々に、駒の蹄を列べつつ、シメジ峠を乗り越えて、玉置の村の
チームス館、月照る夜半に出でまして、猪倉山に捕はれし、此家の娘スミ
エルや、スガール姫を救はむと、勇み進んで出で玉ふ、谷川渉り岩を越え、
漸う鬼春別將軍の、屯し玉ふ巖窟に、忍び入りつつゼネラルや、カーネ
ル始め其他の、百の司を言向けて、道晴別やシーナの司、二人の娘を救ひ
まし、神の力に守られて、此家に歸り玉ひける、萬公別は此家に、進み
來たるや忽ちに、わが家に歸りし心地して、親の許しもなき儘に、主人氣
取りと早變り、家内の上下隈もなく、巡視を了へし時もあれ、此家の主人
チームスは、四人の負傷者の全快を、悦び玉ひ師の君に、感謝のためと海
川や、山野に出でて求めたる、美味しき物を歡待して、感謝の誠を盡しつ
つ、鬼春別や久米彦將軍が、此場に居るに仰天し、心の底より憎惡して、
一時も早く追つ拂ひ、後日の難を逃れむと、謀り玉ひし時もあれ、鬼春
別が熱烈な、讀經の威力に打たれまし、靈肉忽ち脱離して、見るも怖ろし
地獄道、寥しき旅に出でましぬ、ああ惟神々々、これが見捨て置かれうか、

一度息を吹返し、
靈肉共に改良し、
未來は清き天國の、
いや永久に花も
咲き、
果物實る樂園に、
救はにや置かぬと三五の、
神の柱の治國別が、
赤心こめて大前に祈らせ玉へばアラ不思議、
神德忽ち顯現し、
萬公別や鬼春
別の、
靈を守る精靈は、
チームス司の後を追ひ、
根底の國に飛び行きて、
救ひ歸りし嬉しさよ、
朝日は照るとも曇るとも、
月は盈つとも虧くるとも、
假令大地は沈むとも、
三五教を守ります、
神の恵は永久に、
いや永久に
忘れまじ、
そもチームスの家筋は、
元は尊き刹帝利、
ヒルナの國にときめ
きて、
數多の民を従へつ、
武勇を誇りし家なれど、
民の恨の重なりて、
ヒルナの國は忽ちに、
根本的に轉覆し、
生命辛々フサの國、
玉置の村に現
はれて、
茲に里庄となりすまし、
住み來りしも十五代、
又もや民の怨恨を、
重ね重ねて遠祖、
世々の祖等諸共に、
罪の重荷に地獄道、
根底の國に墮
ち行きて、
惡鬼の群に飛び込みつ、
苦しき月日を送るこそ、
實にも悲惨の
極みなり、
さはさり乍ら今日よりは、
主人のチームス逸早く、
悔改めて世
を救ふ、
三五教の大道に、
仕へ玉ひし上からは、
如何なる祖先の罪科も、

朝日に露の消ゆる如、夏の日向に晒されし、氷の如く溶け行きて、遠津
御祖は云ふも更、子孫の末に至る迄、此世乍らに天國の、清き生涯送りつ
つ、世人を救ふ生神と、成りて譽を萬代に、傳へむ今日の端緒を、喜び
祝ひ大神の、御前に感謝し奉る、ああ惟神々々、靈幸倍ましませよ

治國別は音吐朗々として宣傳歌を謠ふ。

治國別（謠曲調） 千早振る、神の造りし神の國、すみきり守る神の國、
高天原の天國を、此地の上に寫しまし、天に閃く星の如、人をば地上に生
み落し、濱の眞砂の數の如、山川草木鳥獸、うるくづ蟲まで生ませつつ、
天と地との神業に、仕へしめむと神の水火、與へて降らせ玉ひたる、人
は神の子神の宮、斯かる尊き人の身に、如何でか曲の潛む可き、體主靈從
の小欲に、五感を曇らせたればこそ、天國淨土に歸るべき、清き身魂は墮
落して、中有界や地獄道、譬へ方なき醜穢なる、餓鬼畜生の魔道へと、

誤り墮ち行くものなれば、人は生命の有るうちに、悔い改めて天地の、神の心をよく悟り、利己一偏の自愛心、弊履の如く打すてて、至仁至愛の神徳を、身に備へつつ現世の、光ともなり鹽ともなり、穢れを清め世を照らし、天地の花と謳はれて、此世の中を面白く、渡り行くべき者なるぞ、さはさり乍ら人の身は、如何なる智徳ありとて、神の教に離れなば、善も變じて惡となり、幸變じて災禍と、忽ち變る淺間しさ、唯人の世は天地の、神の教を第一に、守りて百の事業に、いそしみ仕へ現世に、ありては國の楯となり、神靈界に至りては、天津御國の良民と、なりて神業に仕ふべく、今より神の大道を、踏み外さずに進むべし、神は吾等と俱に在り、神は汝と俱に在す、神に受けたる此身魂、如何で棄てさせ玉ふべき、テームス司を始めとし、百の人々皇神の、愛と善との徳により、心を清め身を淨め、信と眞との光明に、輝き渡りて村肝の、心の空に日月の、光を照らさせ玉ふべし、ああ惟神々々、神の御前に三五の、治國別の神司、謹み敬ひ宣べ傳ふ』

と謠うたひ終をはり、尚なほも諄じゆん々として現げん界、神しん界、幽いう界に處しよするの道みちを説とき、終をはつて大神おほかみの御み前に感謝かんしゃの祝のり詞とを奏そつじやう上じやうした。是これよりテームス夫婦ふうふうは心の底そこより神かみの恩おん惠けいを悟さとり、廣くわ大たいなる邸てい宅たくを開放かいほうして、立りつ派ぱなる社しゃ殿でんを造つくり、三あな五な教けうの大神おほかみを鎮ちん祭さいし、萬まん公こう別わけをして神しん教けうを宣せん傳でんせしむる事こととなつた。而そして萬まん公こうはスガール姫ひめを妻つまとなし、テームス家の世よ繼つぎとなり、シーナは姉あねのスミエルと共に分ぶん家けして之これに住すみ、アリス、お民たみも亦また治はる國くに別わけの媒ばい介かいに依よつて夫ふう婦ふうとなり、玉たま置きの村むらの花はなと謳うたはれ、三あな五なの教けうを四よ方もに宣せん傳でんし、神しん業げふに參さん加かした。

(大正一二・三・四 舊一・一七 於龍宮館 外山豊二録)

第一五章 公盜こうたう〔一四二三〕

鬼おに春はる別わけ以下い三さん人にんのバラモン組ぐみは治はる國くに別わけに許ゆるされて、宣せん傳でん使しと俗ぞく人じんとの中ちう間かん的てき比ひ丘くとなりスツパリと長ちやう髮はつを剃そりおとされ、テームスの心こころ遣つかひに依よつて、黒くろ衣いを仕し

立てて着せられ、金剛杖をつき乍ら、照國山ビクトル山の谷間に山伏の修業をなすべく、軍用に使った法螺の貝をブウブウと吹立て乍ら、道々宣傳歌を歌ひ進み行く。鬼春別には治道居士、久米彦には道貫居士、スパールには素道居士、エミシには求道居士といふ戒名を與へた。治道居士は今や治國別、チームス其他一同に別れを告げむとして歌を詠んだ。

治道 「皇神の授け給ひし靈魂をば

治めむとして教の道ゆく。

いざさらば百の司よチームスよ

安くましませ千代に八千代に

治國別 「大神の恵の露を踏みしめて

安く行きますせ清めの瀧へ

道貫だうくわん 玉銚たまほこの道みちの誠まことを貫つらぬきて

神かみの御み楯たてと仕つかへ奉まつらむ。

神かむつ司かさ此この家やの主あるじ諸もろ共ともに

守まもらせ給たまへ吾わが身みの上うへを

テームス 三五あななひの誠まことの道みちに目め醒ざめたる

人ひとこそ神かみの幸さちを受けなむ

素道そだう 惟かむながら神もと元こころの心たちに立かへ返り

救すくひの道みちを進すすみゆくかな。

猪倉いのくらの山やまにこもりし曲まが神かみも

神かみの光ひかりに照てらされて行ゆく

松彦 皇神の珍の御子たる君こそは

安く行きませ神のまにまに

求道 朝夕に誠の教を求めつつ

今日は嬉しき神の道行く。

諸人よ安くましませ吾去りし

あとにも神を崇めまつりて

龍彦 皇神の恵を受けてテームスの

館を出づる人ぞ尊き

萬公まんこう 『いざさらば四柱よはしらの君健きんこやかに
身みを守りつつ神かみに仕つかへよ』

道晴別みちはるわけ 『惟神神かむながらかみの正道まさみちわけゆけば
醜しこの曲津まがつもさわらざらまし』

シーナ 『君行きみゆかばあとに残のこりし吾々われわれは
淋さびしさに鳴なく時鳥ほとこぎすかな。
さり乍ながら治國はるくにわけ別わかがましまさば
安やすく出いでませ心残こころのこさで』

スミエル□益ます良す夫らが心こころの駒こまを立たて直なし
鞭むちうち進すすむ今日けふぞ勇いさまし□

スガール□時ときめきし軍いくさの君きみも三あ五なの
神かみの軍いくさに仕つかへ玉たまひぬ□

アヅモス□皇すめ神かみの縁えにしの絲いとに結むすばれし
親したしき友ともを送おくる今日けふ哉かな□

ア―シス□テームスの館やかたに残のこる吾わが身みこそ
君きみの行ゆく衛ゑを惜をしみつつ泣なく□

お民たみ 国民くにたみを天津御國あまつみくにに救すくふべく
出いでます今日けふの姿雄々すがたをしきを」

治道ちだう 『有難ありがたし百ももの司つかさの眞心まごころは

幾千代迄いくちよまでも忘れわすれざらまし』

と互たがひに歌うたもて應答おうたふし乍ながら、圓頂緇衣えんちやうしえの四人連よにんづれ法螺貝ほらがひをブウブウ吹ふきたて、山野さんや
の空くう氣きを清きよめ乍ながら、別わかれを惜をしみ出いでて行く。

三千餘騎さんぜんよきを引率いんそつし

猪倉山いのくらやまに屯たむろして

暴威ばうゐを揮ふるひし將軍しやうぐんも

忽たちまち悔悟くわいごの花開はなひらき

神かみの恵めぐみを嬉うれしみて

治國はるくに別に服まつろひつ

四人よにんの男女なんによを恙つつがなく

テームス館やかたに送おくりつけ

至玄至妙の御教を

心に深く刻みこみ

昨日に變る修驗者

山伏姿となり變り

金剛杖を力とし

細き野道を辿りつつ

世間心や自愛心

秋の木の葉の凧に

散りて跡なき真心の

衣の袖を科戸邊の

風にフワフワいぢらせつ

大法螺貝を吹き乍ら

勇み進んで北の森

祠の前に立寄りて

暫し息をば休めける

日はズツポリと暮れ果てて

咫尺辨ぜぬ眞の暗

四人はここに一夜をば

明さむものと蓑を布き

まどろむ折しも古ぼけた

祠の後に人の聲

耳にとめたる治道居士

ハテ訝かしと窺へば

濁りを帯びた人の聲

三つ四つ五つ聞え來る。

治道居士は、他愛もなく三人の寝てゐるのを、寢息にて悟り乍ら、自分は四五人の怪しき聲に眠られず、耳をすまして聞いてみた。

祠の後からはだんだん大きな聲が聞えて來だした。

甲「オイ、サツパリ約まらぬぢやないか、エエン、よう考へて見よ。折角俺は軍曹にまでなつたと思へば、肝心の大将が腰拔だから、あの通り惨めな態になり、三五教にスツパリと兜を脱ぎ、チツと許りの涙金位貰つたつて、國へ歸つて妻子を養ふ譯にもゆかず、これからどう身の振方を考へたらよからうかな」

乙「俺達は斬り取り強盜の軍國主義に育てられて來たものだから、今更外の職業につかうと云つたつて、何にも出來ぬぢやないか。泥棒になるのも、バラモン軍の兵士になるのも、名こそ違へ大小の區別がある丈だ。追剥ぎをして人を裸にするのも、澤山の軍隊を率れて敵國を蹂躪し、他人の國を併呑するのもヤツパリ泥棒だ。幸に斯うして軍刀を持つてゐるのだから、一つ馬賊團でも組織して大に發展せうぢやないか」

丙「オイ兩人、そんな馬鹿な事を思ふものぢやない。將軍様が下さつた此金を儉

約して歸れば、國許へ歸つて何か一つの生産事業を起すとか、眞面目な商賣をして、兩親や妻子を喜ばした方が何程可いか知れぬぞ。將軍でさへも改心をなさつたのだから、俺達も之を機會に善心に立返らうぢやないか」

乙「ヘン馬鹿云ふない。許偽本位の産業や算盤持てば人を騙さうとする商賣が、それが何尊いのだ。産業立國とか云つて、ゼントルメンとやらが、盛に議論をしてるやうだが、ヤツパリ彼奴等も體のよい泥棒だ。大會社だつて、大商人だつて、皆詐偽と泥坊の體のいい奴だ。寧ろ陰惡主義の實行者だ。泥棒様は堂々たる陽惡を行ふのだから、同じ罪惡といつても氣が利いてるぢやないか。善の假面を被つて世の中を誑かし、私利私欲を企む位、陰險な卑怯な惡魔はないぢやないか」

丙「さう云へばさうかも知れぬなア、そんなら俺も損者三友といふ事があるが、損か得か知らぬが、今迄の交際上、お前達に共鳴して、泥棒會社の重役にでもならうかなア」

乙「馬鹿云ふな、吾々は益友だ。益者三友だ。オイ、丁、戊、汝は何うだ。此方の意見に共鳴するか。今日只今より泥棒の開業だ。汝不服とあれば泥棒の初商ひ

に、持物一切を剥ぎ取つてやるから有難く思へ

丁「そ、そ、そんな無茶な事を言ふものでない、泥棒をしたい者は親や子のある者のすることぢやない。俺達は親もあれば子もあるのだから、何卒此儘に助けてくれ。なア戊、お前もさうだらう」

戊「ウン、私も老母が一人残つてるのだから、親一人子一人だ。『毎日日バラ

モン大神に……吾子が立派な人間になりますやうに、人の物が欲しいといふやうな根性になりませぬやうに……と祈つてるから、悪い心は出してくれな』と家を

出る時に俺の袖にすがつて意見したのだから、これ丈は御免蒙りたいなア」

乙「アハハハハ、腰拔だな。そんなら今日は開業祝に、汝等兩人は大目に見てやる。其代りに懐に持つてゐる金を半分許り此方へよこせ。大難を小難にまつりか

へてやるのだから……」

甲「オイ乙、此奴等五人は今迄兄弟同様にしてみたのだから、スツパリと許してやれ、又此處に居れば澤山人が通るから、幾らでも商賣は出来るからかう」

乙「オイ、丁、戊兩人、今日は見逃してやる。汝に軍刀を持たしておく、氣違

ひに刃物を持たしたやうなものだ。なまじひ、道德に捉はれて、天下の爲に害惡を除くのだなどと、氣が狂ひ、俺等の寢首をかくかも知れないから、軍刀を此方へよこせ」

丁 戊 「これは故郷へ土産に持つて歸り、家の寶とするのだから、決してお前達の首を狙ふ氣遣ひはない。何卒、スツパリと今日は見逃してくれ」

乙 「エ、そんなら、汝と俺とは今日から國交斷絶だ。サ、一時も早く公使館を引上げるのだ。シート シーツ シーツ」

丁 「居留民は何う致しませうかな」

乙 「エー、キヨル（居留）キヨルせずに、早く退却せぬかい、汝は最早敵國の人民だ。シート シーツ シーツ」

丁 戊 は暗の道を無性矢鱈に、星影を力にし乍ら、命カラガラ逃げて行く。
治道 居士は此囁きを聞いて、數珠をつまぐり乍ら聲も涼しく、

治道 「或被惡人逐 墮落金剛山 念彼觀音力 不能損一毛
或值怨賊繞 各執刀加害 念彼觀音力 咸即起慈心」

と一生懸命に念じ出した。

甲「オイ、何だか氣にくわぬ事を言ふぢやないか。観音の力を念じたら、賊が忽ち改心すると云つてゐやがるやうだ。オイ何だか幸先を折られたやうで、餘り氣

持が宜うないぢやないか、チツとコラ、思案をしなほさななるまいぞ」

乙「馬鹿云ふな、念彼観音力もあつたものかい。そんなこた、屁でもないワイ。

尻喰へ観音力だ。そんな弱い事で、生存競争の泥棒社會に紳士として立つて行く

事が出来るか、馬鹿だなア。どこの糞坊主か知らぬが、俺達が怖さに慄ひ上つて、

仕様もない無形無聲の観音を拜んだつて、天教山の木花姫はメツタに降臨遊ばす

氣遣ひはないワ。サア、幸い鳥が來よつたのだから、彼奴だつて、チツと位旅

費は持つてるだらう。商賣初めだ。コリヤ、甲、丙、チツと勉強せぬかい。ああ

大商店の主人になると、氣の揉める事だワイ。人を使へば苦を使ふ。命掛の商賣

をせうと思へば、どうしても乾分に確りした奴がゐなくちや駄目だ」

と小聲に呟き乍ら、治道居士の聲を目當に近より行く。始めての泥棒の事とて、

強い事を口で行つてゐても、何處ともなしに手足がワナワナと慄へてゐた。甲丙

兩人も同じく慄ひ乍ら乙の後に跟いて行く。祠の前には雷の如き躰が聞えて居る。乙「ココロラ、キキキサマは、ドドドドコの奴ぢやい。ササ最前から、観音を、拜んでゐよつたが、そんな事で、ビクつくやうな泥棒さまぢやないぞ。サア、持物一切を、綺麗、サツパリと、此處で脱いで……下さいませぬか……ウン、違ふ違ふ、脱いで、渡さぬかい。厭ぢやなんぞと吐すが最後、汝の素ツ首ひつつかまへ、笠の臺をチヨン切つて炊いて食て了うてやるぞ。俺を何方と心得てる。バラモン教に於て驍名かくれなき鬼春別將軍の部下ベル、シャル、ヘル三人だ。サ、綺麗サツパリと脱いだり脱いだり。コラ、シャル、ヘル、汝もチツと加勢を致さぬかい……千騎一騎の場合だぞ。親方許りに働かすといふ事があるか」

ヘル「さうだから、こんな商賣は止めといふのだよ」

ベル「乗りがけた舟だ。今となつて卑怯未練にやめられるかい。鬼春別様の顔に泥を塗るやうなものだ。鬼春別様は堂々と三千の軍隊を引率して、強盜強姦放火まで遊ばしたでないか。運がよければ人の國まで占領せうと云ふ大泥棒さまだ。その乾兒たる俺達が、そんな弱い事でどうならうかい」

ヘル『それでも、將軍様は神様の爲、國家の危急を救ふ爲に、敵を亡ぼすべくお出でになつたのだ。つまり云へば天下公共の爲の泥棒だ。一身一家の利害の爲になさるのぢやないから、一概には云へまいぞ。そんな事思つてると、却て將軍様の顔に泥を塗るやうなものだぞ』

ベル『エー、弱い奴だな。コリヤ修験者……か何か知らぬが、くたばつたとみえて、念彼觀音力もほざかぬやうになつたでないか。サア、とつとと持物を渡したり渡したり』

治道『拙者は治道と申す修験者でゐる。併し乍ら衣類を渡す譯にはいかぬ。ここに金があるから、之を其方に遣はす。一時も早く國元へ歸り、泥棒を思ひ切つて、正業についたが宜からうぞ』

ベル『ヤア、此奴、中々氣の利いた事を言ひやがるワイ、オイ百兩や二百金の目腐れ金で、遠い道を歩いて國へ歸れば、後にや何にも残らない。一體幾ら渡すといふのだい』

治道『これつきり、泥棒をせないといふのならば、相當に金を渡してやらぬ事は

ない。幾らくれと云ふのだ」

ベル「ウン、一寸待つてくれ。一つ計算をせぬと分らぬワイ。……これからハルナの近在まで歸る迄には、何程儉約致しても一人前百兩の金が入る。それから母者人の土産に百兩、女房の土産に二百兩、子供の土産に百兩、都合五百兩だ。併しそれでは無一文で商賣は出来ない。何程ちつぽけな八百屋店を出しても、八百屋だから八百兩はある。さうすると一人前千三百兩、都合三千九百兩だ。そこへ千圓は着物代として此方へ綺麗サツパリと渡せばよし、四の五の吐すと命も共にバラして了ふぞ。バラすのはバラモンの特色だ」

ヘル「モシモシ旅のお方、餘り厚かましく申しますけれど、此奴は云ひかけたら聞かぬ奴ですから、何卒半分でも宜しいから恵んで下さいませまいかな。もうシャル、皆貰ふのは餘り厚かましいぢやないか」

ベル「エー、傍から茶々を入れやがつて、主人の商賣を番頭が邪魔するといふ事があるか、氣の利かない奴だなア」

治道「四千九百圓は四と九がついて、面白くない。ドツと張込んで五千兩やるか

ら、之これを持つて早く國許へ歸り正業に就いたが可いぞ。そして鬼春別、久米彦其
他のカーネルは、何れも三五教の誠の道に歸順したのだから、お前達も國へ歸つ
たら神様を信仰し、假りにも人の物を盗んだり、今迄のやうな殺伐な事はキツと
するでないぞ。サ、手を出せ、此處に五千兩の包みがある、檢めて受取つたがよ
からうぞ」

ベルは怖れ乍ら、聲を知るべに手をニユツと出した。鬼春別の治道は、其手を
グツと握つた。

ベル「アイタタタ、オイ皆の奴、大變手の利いた奴だ。チツと來て加勢をして
くれぬかい、中々金をくれさうにないぞ」

治道「アハハハ面白面白い、泥棒の失敗も又旅情を慰むるには一興だ。併し
乍ら俺も男だ。五千兩恵んでやると云つた以上は、メツタに後へは引かぬ。道貫、
素道、求道殿、貴方もいいかげんに目を醒ましなさい。面白い事が出來て居りま
すよ」

道貫「ハハハハ、イヤ最前から、吾々三人は軒をかいて様子を考へて居りました。

随分困つた奴ですな。三千人の中では、こんな奴もタマには出来るでせう。併し乍ら貴方は五千兩やりますか、然らば私も一千兩やりませう。ベル「イヤ、何處の何方か知りませぬが、有難うムります。何卒御姓名をお聞かせ下さいませ」

治道「ウン、俺は治道といふ修験者だ。お前に千兩やらうといふは道貫といふ男だ。一時も早く國許へ歸つて正業に就いたがよからうぞ」

「ハイ有難う」と幾度も禮を云ひ乍ら、ベル、シャル、ヘルの三人は、六千兩の金を二千兩づつ分配し、喜び勇んで此祠を暗に紛れて立去りにける。

（大正一二・三・四 舊一・一七 於龍宮館 松村眞澄録）

第一六章

幽貝（一四二四）

鬼春別の治道居士 道貫素道求道居士

此四柱の修験者 北の森をば立出でて

ブーブーブーと法螺の貝 吹き立て山野の木精をば

響かせ乍らスタスタと 杖を力に進み行く。

治道居士は北の森を立出で、三人と共にシメジ峠の南麓に着いた。これから先

は非常な難所が處々にある。人通りさへなき晝猶暗き樹木の茂る坂道を喘ぎ喘ぎ

登り乍ら足拍子をとりに歌ひ行く。

猪倉山の峰續き 此處は名におふシメジ坂

駒も通はぬ坂道を 神の手綱に曳かれつつ

沙門の姿に身を變へて 至善至上の神の道

治めて世人を救はむと 心の駒に鞭撻つて

吾々四人は登り行く 八アハアハアハアきつい坂

御一同氣をつけ成されませ
もしも轉落した時は

折角神に許された
照國山の荒行も

サツパリ駄目になります
ああ惟神々々

昨日に變る今日の空
ハアハアハアハア ウンウンウン

實に騒がしき蝉の聲
その「ひぐらし」の杣人も

容易に渡らぬ此坂を
登るは苦しき様なれど

山と積みてし罪科を
神の御水火に被はれて

榮え久しき天國に
上りて行かむ首途と

思ひまはせばハアハアハア
何程坂は峻しとも

如何でか怯まむ惟神
進めば廣き平地あり

此難關を乗り越えて
花爛漫と開きたる

神の御園に進みなば
今絞り出す汗脂

苦もなくここに拭き取られ
神の御國のエンゼルと

此世ながらに健やかに
仕へて神と道のため

よびと 世人のために面白き 尊き餘生を送り得む

あくぎやくぶだう 悪逆無道の軍人 今いまは心こころも和やはらぎて

だいじだいひ 大慈大悲の彌勒神 惠めぐみの露つゆを蒙かがぶりつ

みくに ビクの神國を指して行く ああ惟かむながら神々々

かみ 神の惠めぐみの深ふかくして 吾わが行く道みちに曲まがもなく

あ 悪あしき獸けものの災わざはひも あらずに進すすませ玉たまへかし

こまひ 駒曳こまひきつれて此坂このさかを下くだりし時ときのハアハアハア

わがきほひ 吾わが勢いきほひに比くらぶれば 今いまは天地てんちの相違さうゐあり

あくきらせつ 悪鬼羅刹あくきらせつは忽たちまちに 仁慈無限じんじむげんのエンゼルと

へんくわ 變化へんくわしたるも三五あななひの 神かみの司つかさの御賜物みたまもの

あふ 仰あふげば高たかし久方ひさかたの 天津御空あまつみそらに照てり渡わたる

つきひ 月日つきひの惠めぐみいと清きよく 四方よもの草木くさきはスクスクと

しげ 茂しげり榮さかえて天國てんごくの 姿すがたを寫うつす樂たのしさよ

ああ惟かむながら神々々 神かみのまにまに進すすむ身みは

いづくの空に至るとも
如何でか恐れむ敷島の

大和心の照る限り
心も身をも筑紫瀉

高砂島の果て迄も
進みて行かむ神の道

守らせ玉へ惟神
ウントコドツコイ ドツコイシヨ

天地の主と現ませる
皇大神の御前に

慎み畏み願ぎ奉る

エミシの求道居士は汗をタラタラ流し乍ら一行の前に立つて元氣よく歌ひ乍ら
上り行く。

求道 春は花咲き鳥歌ひ
草木の末も青々と

茂り榮ゆる夏の日も
いつしか越えて秋の風

木枯荒む冬の空
満天忽ち雪雲に

包まれ月日を隠せども
聴て一陽來復の

再びふたたび春はるが來くる時ときは
又またもや山さん野やは爛らん漫まんと

いと美うらはしき花はなぞ咲さく
世よの有あり様さまを眺ながむれば

これの地ち上じやうに生うま
人ひとの身み魂たまも何い時つしかに

移うつり變かはらぬ事ことやある
バラムン軍ぐんのカーネルと

數多あまたの軍兵ぐんびやう指し揮きなして
威ゐ張ばり散ちらした此このエミシ

今いまは全まくハアハアハア
神かみの教をしへに目めを覺さまし

執し着ふち心やくしんを放は擲うてし
現げん幽い神しん界かい一いつ體たいの

救すくひの道みちに進すすみ入いり
至し善ぜん至し上じやうの御み教をしへを

體たい得とくしたる嬉うれしさよ
朝あ日さひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも
地ち異い天てん變べんは起おこるとも

神かみに任まかせし此この體からだ
如い何かでか初しよ心しんをドツコイシヨ

翻ひるがへさむや惟かむ神ながら
神かみに任まかせし此この體からだ

照てる國くに山やまの谷たに間あひで
百も日も百も夜よの行ぎやう修しゆめ

神かみの御み德とくを身みに享うけて
世よ人びとを救すくふ比ひ丘くとなり

つきてるひこ
月照彦の大神の
おほかみ
守らせ玉ふ月の國
まも
たま
つき
くに
いや永久とこしへに開ひらくべし
ああかむながらかむながら惟神々々
御靈幸みたまさちはひまませよ
」

かく歌うたひ乍ながらシメジ峠たうげの頂上ちやうじやうに達たつした。風かぜに曝さらされて洒落しやれきつた面おも白しろい松まつの木き
が六七本ろくしちほん竝ならんである。四人よにんは松まつの根ねに腰打こしうち掛かけ汗あせを拭ぬぐひ乍ながら少時しばし息いきを休やすめてある。

治道ちだう「見渡みわたせば四方よもの山々やまやま青葉あをばして
心こころも清きよく晴はれ渡わたるなり
」

道貫だつくわん「ライオンの川かはの流れながは彌遠いやとほく
帯おびの如ごとくに見みえにけるかな
」

素道そだう 見渡せば何處も同じ天國の
姿すがたなるらむ青々あをあをとしてす

求道きうだう 大空も大地の上も青々と

綾あやを翳かざして塵ちりもとどめず。

年老としいし松まつの木蔭こかげに休やすらひて

汗あせ拭ふき拂はらふ峰みねの夏風なつかぜ

治道ちだう 吹ふく風かぜは天津神國あまつみくにの神人かみびとの

御水み火いなるらむいと涼すずしき

素道そだう 苦くるしみて漸やうやくここに登のぼり見みれば

涼すずしき風かぜの吾われを待まちぬる

道貫だうくわん 『いざさらば此坂道このさかみちを下くだるべし

つづかせ玉たまへ神司等かむつかさたち』

求道きうだう 『これよりは愈いよいよ下くだり坂ざかとなる

されど身魂みたまは神國みくにに上のぼる

かく歌うたひ乍ながら、四人よにんは危あやふき坂道さかみちを一ひと歩あし々ひとあし々ちうい注意ちういしつつ下くだり行ゆく。
道貫だうくわんは又また歌うたふ。

道貫だうくわん「バラモン教けうの久米彦くめひこと 世よに謳うたはれし將軍しやうぐんも

時世ときよじせつ時節ちからの力ちからにて 心の駒こまを立て直なほし

自らみづか鞭撻むちうつ膝栗毛ひざくりげ ビクビクビクとビクの國くに

比丘びくの姿すがたに身をみをやつ 心の鑑かがみも照國てるくにの

山やまの谷間たにまに立向たちむかひ 谷間たにまを落おちる岩清水いはしみづ

鼓つづみの瀧たきに身みを打うたせ 汚けがれ果はてたる垢離くくりをとり

靈肉れいにくともに清淨しやうじやうに 立直たちなほしたるその上うへで

ビクトル山さんの神しんでん殿でんに 參拜さんばいなして今迄いままでの

犯おかせし罪つみを悉ことごとく 謝あやまり詫わびてビクトリア

王わうの御前みまへに參向さんかうし 過すぎにし春はるの無禮ぶれいをば

拜謝はいしやしまつり三五あななひの 誠まことの道みちの教をしへ子こと

仕つかへまつらむ吾心わがこころ 守まもらせ玉たまへ惟神かむながら

國治くにはる立たちの大神おほかみの 御前みまへに慎つつしみ願ねぎ奉まつる

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ

今まで悪を盡したる

心の暗き久米彦も

忽ち日出の守護となり

吾精靈は天國に

上りて神の榮光に

仕ふる身とはなりにけり

ああ惟神々々

神の恵みを愼みて

喜び感謝し奉る

素道は坂を下り漸く平地に着いて元氣を恢復し、人竝に歌はねばならぬと思つたか、妙な皺枯れ聲を出して一歩々々拍子を取り歌ひ始めたり。

三五教の宣傳使

治國別に助けられ

誠の道を悟りてゆ

今迄つづけし罪業が

いと恐ろしくなり來り

死後の生涯ある事を

思へば短き現世にて

小さき欲に踏み迷ひ

名利めいりの奴隸どれいとなるよりも

一切いっさい萬事ばんじ執着じつちやくの

衣きぬ脱ぬぎ棄すてて比丘びくとなり

生うまれ赤あか兒ごとなり變かはり

此この世よを捨すてし修しう驗げん者じゃ

本ほん來らい此この世よは無む東とう西さい

何か處しよ有う南なん北ぼく是これ宇う宙ちゆう

色しき即そく是ぜ空くうの世よの習ならひ

空くう即そく是ぜ色しきの眞しん諦たいを

漸やっやく悟さとり吾われ々われは

劍つるぎを棄すてて言こと靈たまの

神かみの依よさしの御みつ劍るぎに

持もち直なほしたる嬉うれしさよ

ブーブーと法ほ螺らの貝かひ

吹ふき鳴ならし行ゆく嬉うれしさは

此この世よに生いきて人にん欲よくに

囚とらはれ居ゐたる人ひとの身みの

轉てん迷めい開かい悟ごの聲こゑ聞きいて

目めを覺さましたる関との聲こゑ

そも法ほ螺ら貝がひと云いふ奴やつは

生いきたる時ときは聲こゑもなし

死しんで死しが骸がいとなりし時とき

生いく言こと靈たまの息いきにより

大だいなる聲こゑを張はり上あげて

遠とほき近ちかきの山やま彦びこを

驚おどろかし行ゆく健け氣なげさよ

吾われも現げん世せに住すまひては

いとちも小ちひさきものにして

呼ばはる國は四方の國 轟く術もなけれども

此世を去りて靈界に 復活したる其時は

此法螺貝ぢやなけれども 其言靈は彌高く

高天原に鳴り渡り 中有界や地獄界

彷徨ひ苦しむ身魂をば いとも尊き天國へ

導き悟す瑞祥と 喜び勇み吹き立てる

プープープープー プツプツプツ ああ惟神々々

御靈幸ひまませよ

かく歌ひ乍ら四人は列を正しうしてビクの國へは立寄らず、直ちに荆棘茂る山道を分けて照國山の谷間、清めの瀧に向つて一目散に進み行く。

死んでから大い聲出す法螺の貝
改心の言靈を吹く法螺の貝

(大正一二・三・四 舊一・一七 於龍宮館 北村隆光録)

第四篇 法念舞詩

第一七章 萬巖(一四二五)

玉置の村のテームスは治國別の教を聞いて今迄の貪欲心や執着心を弊履を捨つ
るが如くに脱却し、廣き邸を開放し村人の共有とし、且つ山林田畑を村内に提供
して共有となし、茲に一團となつて新しき村を經營する事となつた。先づ大神の
神殿を造營すべく村人は今迄テームスの持ち山たりし遠近の山に分け入つて木を
切り板を挽き、日夜赤心を盡し、漸くにして一ヶ月を経たる後假宮を造營し、大

神を鎮座する事となつた。治國別は村人に教を傳ふべく、又この神館の完成する迄神勅に依つて待つ事とした。數百人の老若男女は悦び勇みて社前に集まり、この盛大なる盛典に列した。治國別は祭主となり、神殿に向つて祝詞くづしの宣傳歌を奏上した。

治國別 久方の天津御空の高天原に、鎮まり居ます大國常立の大神、神伊邪那岐の大神伊邪那美の大神、嚴の御靈の大神瑞の御靈の大神を初め奉り、天津神國津神八百萬の神達の御前に、三五教の神司治國別の命、清き尊き珍の御前に慎み敬ひ、畏み畏みも申さく、高天原の月の御國を知し召す、瑞の御靈の大神、日の神國を知し召す、嚴の御靈の大神は、現身の世の曇り汚れ罪過を、科戸の風に吹き拂ひ、速川の瀨に流し捨て、清き麗しきミロクの御代に立直さむと、神素盞鳴の大御神に、千座の置戸を負はせたまひ、産砂山の聖場に、齋苑の館を立て給ひ、千代の住所と定めつつ、神の御言を畏みて、遠近の國々に珍の教を完全に、開かせ給ふ有難さ、百の司を初めとし、四方の國人達は、皇大御神の大御恵を、喜び

仰ぎ奉り、早風の如く潮の打寄する事の如く、神の御前に伊寄り集ひて、神の賜
ひし村肝の心を錬り鍛へ、百の罪汚れ過を、拂ひ清めて天地の、神の柱と生れ出
でたる人の身の務めを、完全に委曲に盡し終へむと、勵しみ仕ふる勇ましさを、掛
巻も畏き皇大神の領有ぎ給ふ、豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、生言靈の幸はふ
御國、生言靈の助くる御國、生言靈の生ける御國にましまして、天の下に生きと
し生ける民草は、日に夜に心を研き身を謹み、神の賜ひし珍の言靈を祝り上げ奉
り、假にも人を罵らず、譏らず嫉まず憎みなく、睦び親しみ兄弟の如く、現世に
生永らへて、日々の生業を樂しみ仕へ奉り、神の依さしの大御業に、仕へ奉るべ
き者にしあれば、三五教の御教を、夢にも忘るる事なく、朝な夕なに省みて、神
の御國の幸ひを、完全に委曲に受けさせ給へと、皇大神の大前に、謹み敬ひ願ぎ
奉る、下つ岩根に千木高く、仕へまつりし此宮の、いとも廣くいとも清けきが如
く、いや永久に、いづの玉置の村人は、テームスの村司を親と崇め、各自の生業
を、いそしみ勤めて大神の、御前に勳功を奉り、家内は睦び親しみて、恵良々々
に歡ぎ賑ひ、茂り榮えしめ給へ、ああ惟神々々、御靈幸倍ましましてよ」

斯^かかる所^{ところ}へ村^{むら}の若^{わか}い衆^{しゅう}と見^みえて赤鉢^{あかはちまき}巻^{まき}を締^しめ乍^{なが}ら、鐘^{かね}や太鼓^{たいこ}を叩^{たた}きつつ、千引^{ちびき}
の岩^{いは}を車^{くるま}に載^のせ、神^{かみ}の御前^{みまへ}に奉^{たてまつ}らむと、大綱^{おほづな}を老若男女^{らうにやくなんによ}が握^{にぎ}り乍^{なが}ら汗^{あせ}をタラタラ
流^{なが}しつつ、歌^{うた}を唄^{うた}つて進^{すす}み來^くる其勇^{そのいさ}ましさ。(以下^{いかに}) (内^{ない}はワキ)

㊦ (エンヤラヤー、エンヤラヤア) 三五^{あななひけう}教^{かむつかさ}の神司

治國^{はるくにわけ}別の宣傳^{せんでん}使^し (ヨイヨイ、エンヤラヤア)

天津^{あまつみそら}御空^{くもわ}の雲別^{くもわ}けて 玉置^{たまき}の村^{むら}に下^{くだ}りまし

(ヨイイトセー、ヨイイトセー) (エンヤラヤーのエンヤラヤー)

欲^{よく}に抜目^{ぬけめ}のない爺^{おやぢ} テームスさまを説^ときつけて

(ヨイヨイ、エンヤラヤ) も一^{ひと}つそこらで(エンヤラヤア)

(ヨイヨイ、ヨイイトナ) 皆^{みな}さま揃^{そろ}うても一^{ひと}つぢや

昔^{むかし}の昔^{むかし}の先祖^{せんぞ}から 欲^{よく}をかはいて溜^ためおいた

山^{やま}も田^{でん}地^ちもすつかりと (ヨイヨイ、エンヤラヤ)

玉置^{たまき}の村^{むら}へ放^はり出^だして 上^{うへ}下^{した}なしに安樂^{あんらく}な

生活をせよと云はしやつた 時節は待たねばならぬもの

(ヨイヨイ、エンヤラヤア) 皆さま揃うてモ一つぢや

(ヨイヨイ、ヨイトセ) 廣き邸を開放して

尊き神の宮を建て 老若男女が睦び合ひ

今日は目出度い宮遷し (ヨイヨイ エンヤラヤ)

(ヨイトセ、ヨイトセ) 皆さまそろらで一氣張り

(ヨイヨイ、ヨイヤナ) これから玉置の村人は

今度新にお出ました 萬公さまの若主人に

心の底から服従し 上下揃うて神様の

御用を勵み日々の 野良の仕事や山仕事

喜び勇んで務めませう (ヨイヨイ エンヤラヤ)

(エンヤラヤ) 皆さまこらで一氣張り

千引の岩は重くとも 大勢が心を一つにし

力限りに曳くならば 何程甚い坂だとして

神かみの守まもりに安やす々と 芋をがら殻をを曳ひくよに上あがるだらう

(ヨイヨイヨイ エンヤラヤ) (エンヤラヤーのエンヤラヤー)

抑そも々そも玉たま置まきの村むら人びとは 昔むかしの昔むかしの神かみ世よから

この神かみ村むらを住す所みかとし ウラルの神かみの御み教をしへを

守まもり来きたりし人ひとばかり (ヨイヨイヨイ エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤー) ウラルの神かみさまどうしてか

幾いく何ら信しん心じんしたとて 些ちつともお蔭かげを下くださらぬ

テームスさまが唯ただ一人ひとり お蔭かげを横よこ取どり許りして

吾われ等ら一いち同どうの汗あせ膏あぶら 絞しぼつて樂らくに日ひを暮くらし

榮え耀えう榮えい華くわにやつて居ゐた (ヨイヨイヨイ エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤー) それをば黙だまつて見みてムこる

ウラルの彦ひこの神かみさまは 此この頃ころ盲めくらになつたのか

但ただは聾つんぼになつたのか 村むらの難なん儀ぎを知しらぬ顔かほ

(ヨイヨイヨイ エンヤラヤ) (エンヤラヤーのエンヤラヤー)

皆さま揃うて一氣張り
(ヨーイヨーイ エンヤラヤア)

此度救ひの神様が
天の河原に棹さして

治國別と名を變へて
玉置の村に下りまし

吾等一同を救はむと
仁慈無限の御教を

宣らせ給ひし嬉しさよ
(ヨーイヨーイ エンヤラヤ)

(エンヤラヤのエンヤラヤア)
これから玉置の村人は

飢に苦しむ人も無く
凍えて死ぬる人もなし

上下運否のないやうに
ミロクの御代が築かれて

喜び勇んで暮すだらう
(ヨーイヨーイ エンヤラヤ)

(エンヤラヤのエンヤラヤア)
此神殿に祭りたる

救ひの神は嚴御靈
瑞の御靈の神柱

柱も清く棟高く
御殿も宏く風景は

勝れて絶佳の御場所よ
(ヨーイヨーイ エンヤラヤ)

(エンヤラヤのエンヤラヤア)
捻鉢巻の若い衆よ

早階段に近付いた　もう一氣張り一氣張り

お聲を揃へてヨーイヤナ　（ヨーイヨーイ　エンヤラヤ）

（エンヤラヤーのエンヤラヤー）

と唄ひ乍ら方形の大岩石を社の傍に据ゑたり。これは村人が……此岩石の腐る迄は心を堅く變へませぬ、何處迄も御神の爲に盡します……と云ふ赤心の供へ物である。

萬公は村人と同じく捻鉢巻をし、運んで來た石を適當の場所に据ゑむとして二人の部下と共に槌を振り上げ、大地をドンドンと固め、杭を打つて石の【にえ】込まないやうと勤めて居る。相方が交互に歌を唄ひ乍ら拍子をとつて居る。

萬公「神と神との引き合せ　（ドーン、ドーン、ドンドン）」

玉置の村の里庄なる　チームスさまの若主人

萬公司も現はれて　今日の目出度いお祭りを

ちからかき 力限りに祝ひませう (ドーン ドーン、ドンドンドン)

う 打てよ 打て 打て 確り 打てよ 地獄の釜の割れる迄

いまう 今打つ 槌は 神の 槌 槌が 土うつつ 面白さ

(ドーン ドーン、ドンドンドン) 玉置の村の皆さまが

キールの谷から千引岩 毛綱に括つて引き来り

たふと 尊きお宮の御前に 信と真との光をば

あら 現はし 給うた 目出度さよ (ドーン ドーン、ドンドンドン)

おほかみさま 大神様の御利益で テームス館は云ふも更

このむらびと 此村人は永久に 尊き此世を楽しんで

かきはときは 堅磐常磐に玉の緒の 命を保ち心安く

いへ 家も豊に榮えませう (ドーン ドーン、ドンドンドン)

これから村中心をば 一つに合して田を作り

やま 山には木苗を植付けて (ドーン ドーン、ドンドンドン)

きよつうざいさんどつさり 共有財産澤山と 造つて子孫の末迄も

(ドーン ドーン、ドンドンドン) 寶を残り身を治め

心を清めて神様の尊き教に心従し

此世を安く頼もしく (ドーン ドーン、ドンドンドン)

千引の岩の御霊もて 悪魔を拂ひいつ迄も

ビクとも動かぬ鐵石の 信仰勵もぢやないかいな

(ドーン ドーン、ドンドンドン) どうやら準備が出来たよだ

皆さまモ一つ頼むぞや (ヨイヨイ エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤア) 力の強い若い衆は

挺をば四五本持つて来て 千引の岩を此上に

何卒据ゑて下されよ 萬公別が頼みます

(ヨイヨイ エンヤラヤ) (エンヤラヤーのエンヤラヤア)

朝日は照るとも曇るとも 轟き渡る瀧の水

洗ひ晒した此身體 神の御前に奉り

舍身供養を勵みませう ああ惟神々々

(ヨーイヨーイ エンヤラヤ) (エンヤラヤーのエンヤラヤー)

神の御心^{かみ みこころ}畏^{かしこ}みて 村人心^{むらびとこころ}を一つ^{ひとつ}にし

今日の祭^{けふまつり}を恙^{つつが}なく 済^すませた事^{こと}の嬉^{うれ}しさよ

玉置^{たまき}の村^{むら}は萬世^{よろづよ}に 玉置^{たまき}の宮^{みや}と諸^{もろとも}共に

榮^{さか}え盡^つきせぬ事^{こと}だらう 喜^{よろこ}び祝^{いは}へ諸^{もろびと}人^{ひと}よ

(ヨーイヨーイ エンヤラヤ) (エンヤラヤーのエンヤラヤー)

(大正一二・三・四 舊一・一七 於龍宮館 加藤明子録)

第一八章 音頭(一四二六)

アヅモスは赤手^{あかてぬぐ}拭^{ぬぐ}ひで鉢卷^{はちまき}をし乍^{なが}ら、群衆^{ぐんしゅう}に交^{まじ}はつて手^てを拍^うちつつ圓^{ゑん}を畫^{ゑが}いて
宮^{みや}の前^{まへ}の廣庭^{ひろには}に音頭^{おんど}を取り踊^{をど}り始^{はじ}めたり。

(音頭口調) 『ハーヤー夕陽も傾きて (エンヤットコセー)

無常を告ぐる鐘の音も (コラシヨ)

みろく三會の曉の

目醒めの聲と聞ゆなりー (ア、ヨーイセー、ヤットコセー)

社前を照らす銀燭の

光映ゆき照り渡りー (ア、ヨーイセー、ヤットコセー)

治國別の神司

救ひの神と現れまして (コラシヨ)

三五教の御教を

完全に委曲に説き玉ひー (ア、ヨーイセー、ヤットコセー)

玉木の村の里庄が家に (コラシヨ)

止まり玉ふ尊さよオー (ア、ヨーイセー、ヤットコセー)

猪倉山の巖窟に (コラシヨ)

巢を構へたるバラモンの

鬼おに春はる別わけや久く米め彦ひこもオー
(ア、ヨイイセー、ヤットコセー)

神かみの力ちからに敵てきし得えず

兜かぶとを脱ぬいで降か参さんし
(コラシヨ)

髪かみ切きり落おとし比ひ丘くとなりイー
(ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

金こん剛がう杖づゑに墨すみ衣ころも
(コラシヨ)

身みに纏まとひつつ四よ人にん連づれ

此この家やを後あとに出いでて行ゆくウー
(ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

後あとに残のこりし治はる國くに別わけは
(コラシヨ)

御み供ともの神かみの松まつ彦ひこさま
(ドッコイ)

道みち晴はる別わけや龍たつ彦ひこのオー
(ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

珍つづの司つかさと諸もろ共ともに

玉たま置まきの村むらの守まもり神がみ
(コラシヨ)

テームス館やかたに宮みや柱ばしら

太ふとしき立たてて大おほ神かみをオー
(ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

鎮め玉ひし尊さよ

殊に目出度き萬公別

此家の主人となり玉ひ

(コラシヨ)

スガール姫を娶らせてエー

(ア、ヨイセイ、ヤットコセー)

鴛鴦の契の幾千代も

萬公末代變りなく

(コラシヨ)

暮らさせ玉へ惟神

(コラシヨ)

神の御前に願ぎ奉るウー

(ア、ヨイセイ、ヤットコセー)

それにまだまだ目出度きは

(コラシヨ)

スミエル姫にシーナさま

(ドツコイ)

三國一の婿となりイー

(ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

萬公さまと相列び

(コラシヨ)

里庄の家を継ぎ玉ひイー

(ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

此村人を何時迄も

(コラシヨ)

恵助めぐみたすけて三五あななひの

教をしへの道みちを立てた玉ふたまオー

(ア、ヨーイセー、ヤットコセ)

目出度めでたい事ことが重かさなれば

(コラシヨ)

これほど重かさなるものかいなアー

(ア、ヨーイセー、ヤットコセ)

番頭ばんとうさまのアーシスさまは

(コラシヨ)

雲井くもゐに近ちかき御方おんかたの

珍うづの御胤みたねと聞きこえたる

お民たみの方かたを妻つまに持もちイー

(ア、ヨーイセー、ヤットコセ)

玉木たまきの村むらにましまして

(コラシヨ)

治國はるくに別のわけ神様かみさまの

教をしへを守りまも此宮このみやの (コラシヨ)

神かみの司つかさとなり玉ふたまオー

(ア、ヨーイセー、ヤットコセ)

其その瑞祥すいしやうを悦よろこびて

老若らうじやく男女なんにょの別わかち無なく

これの館に相集ひ

歡喜の涙にむせ返るウー

(ア、ヨーイセー、ヤットコセ)

ああ惟神々々

神の御前に謹みて

(コラシヨ)

深き恵を感謝しつ

手拍子揃え足竝揃え

拍手うちて踊りつつ

悦び祝ひ奉るウーウ

(ア、ヨーイセー、ヤットコセ)

まだまだ先はあるけれど

あまり長いのは御退屈

私はこれで休みます

次の御先生に御頼み申すヤーア

(ア、ヨーイセー、ヤットコセー) ㊦

道晴別は祭服を脱ぎ捨て、踊り子の中に飛び込み、音頭をとつて踊り始めける。

㌸
（アアチヨイ チヨイ チヨイ）

わたし みちはるわけつかさ
私は道晴別司
（ア、チヨイトコセー チヨイトコセー）

あななひけつ かみさま
三五教の神様に

おつか まを
御仕へ申して十四年
（ア、チヨイトコセー チヨイトコセー）

いそ やかた
齋苑の館やエルサレム

わつこんざん りやうじざん
黄金山や靈鷲山

さん さんばい
コーカス山へも参拜し
（ア、チヨイトコセー チヨイトコセー）

まこと たふと
誠に尊い御神徳

み う
身に稟けまして治國別の

うづ つかさ
珍の司の宣傳使

みとも つか
御供に仕へ奉りつつ
（ア、チヨイトコセー チヨイトコセー）

いそ やかた
齋苑の館を立出でて

かじかたうげ うちわた
河鹿峠を打渉り
（ア、チヨイトコセー チヨイトコセー）

まが すみか
曲の棲處と聞えたる

山口森やまぐちもりに立寄たちよつて

一夜いちやを明あかす折をりもあれ

忽たちまち光ひかる鬼火おにびを眺ながめ

胸轟むねとどろかし居ゐたる折をり

頭あたまに三徳さんとく頂いたいて

蠟燭ろうそく三本さんぼん立列たてならべ

鏡かがみや鉄はさみを胸むねに吊つり

チヤン チヤン チヤン チヤン

怪あやしの姿すがたがやつて來くる (ア、チヨイトコセー チヨイトコセー、ア、ヨイ

トサー ヨイトサー)

不ふ思議しぎな奴やつだと怪あやしんで

胸轟むねとどろかす真ま最さい中ちゆう

アこれから先さきが面おも白しろい (ア、チヨイトコセー チヨイトコセー、ヨイトサー

ヨイトサー)

(ア、チヨイトコセー チヨイトコセー)

(ア、チヨイトコセー チヨイトコセー)

まだまだ先さきはあるけれど

後あとの御方おかたに御氣おきの毒どく

これにて御免ごめんを蒙かつむりませう

(ア、チヨイトコセー チヨイトコセー、ヨイ

トサー ヨイトサー、ハーレヤーレ コレワノサ ヨーイヨーイ ヨーイトサ)

次つぎの御先生ごせんせいに御渡おわたし申まをす

(ア、チヨイトコセ チヨイトコセ、ヨーイトサー

ヨーイトサー)

音頭おんど 『イヤ、ヤツトコシヨ

踊をどり 『コリヤ ドシタイヤイ

音頭おんど 『イヤ まま一つひとつヂヤ

踊をどり 『イヤ まだかいヤイ

龍彦たつひこ 後見送りて宣傳使あとみおくりて せんてんし

(エンヤットコセー)

暫し言葉も無かりしがアアアア (ア、ヨイトセー、ヤットコセー)

女房松姫尻目にょぼうまつひめしりめ につけ (コラシヨ)

コリヤ女房こりやぶろう (ドツコイ)

其方は神の使と云ひ乍そのほうは 神のつかひ (なが)

其天職を忘れたかアアア (ア、ヨイイセー、ヤットコセー)

此松彦は神様の (コラシヨ)

尊き使命たふと しめい を蒙りて (コラシヨ)

治國別の弟子はるくにわけ でし となりイ (ア、ヨイイセー、ヤットコセー)

悪魔の征討あくま せいと に上り行く (コラシヨ)

其首途そのかどい を見ながらに (コラシヨ)

待てと申すは何の事まを 何を こと オ (ア、ヨイイセー、ヤットコセー)

聞きわけないと突放ききわけなし す

松姫顔まつひめかほ を赤らめてエ (ア、ヨイイセー、ヤットコセー)

イヤのう、モーシ松彦さま (ドッコイ)

女乍らも宣傳使

夫の後を追っかけて

どうして御用が出来ませうかアーアー (ア、ヨイセイ、ヤットコセイ)

女房の心も察してたべ (ドッコイ)

悲しいわいなと泣き、伏してエー (ア、ヨイセイ、ヤットコセイ)

輪廻に迷ふ淺間しさ

松彦涙を打拂ひイー (ア、ヨイセイ、ヤットコセイ)

今の別れは辛けれど (コラシヨ)

暫く忍べ道芝の

露さへ乾く例ありイーイー (ア、ヨイセイ、ヤットコセイ)

治國別の師の君が (コラシヨ)

後を慕うて進み行き (コラシヨ)

浮木の森で追っついてエーエー (ア、ヨイセイ、ヤットコセイ)

功名手柄こうみやうてがらを世よに照てらし (ドッコイ)

尚なほも進すすんで月つきの國くに

ハルナの都みやこに立向たちむかひイーイ (ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

齋苑いその館やかたへ復かへり言こと

申まをさにや置おかぬと出いでて行ゆく (コラシヨ)

後見あとみおく送りて松姫まつひめはアア (ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

常磐ときはの松まつの下したかけに (コラシヨ)

いよしかかつて聲こゑを上げエーエ (ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

モーシモーシ吾夫わがつまさま (ドッコイ)

一日ひとひも早はやく神界しんかいの

御用ごようをすませ玉たまはりて (コラシヨ)

無事ぶじなお顔かほを見みせてたべエーエ (ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

頼たのむワイなと聲こゑ限り

便りたよを松姫まつひめ小夜姫さよひめがア (ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

領巾振山のオーオー悲しみもー

わが身の上を歎きつつ

別れを惜む可憐さアーアー
(ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

流石勇氣の松彦も
(コラシヨ)

妻の愛惜子故の暗
(ドツコイ)

恠へかねてかハラハラハラ
(ドツコイ)

涙は落ちてエーエーエー河鹿川ー
(ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

堤も崩るるばかりなりー
(ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

其松彦は長驅して

治國別の師の君に
(コラシヨ)

浮木の森に巡り會ひー
(ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

茲に師弟は手を曳いて

ライオン河を打渡りー
(ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

ビクトル山の麓なる
(コラシヨ)

珍うづの都みやこの刹せつ帝利ていり

左守さもりの司かみの危難きなんをば (コラシヨ)

救すくひ助たすけし健氣けなげさよオーオー (ア、ヨイイセー、ヤツトコセ)

治國はるくにわけ別の師しの君きみの

大神だいしん力は云いふも更さら

國治くにはる立たちの大神おほかみ様 (コラシヨ)

神素かむす蓋さ鳴のの神様かみさまの (コラシヨ)

深ふかき守まもりによるものぞオーオー (ア、ヨイイセー、ヤツトコセ)

此龍このたつ彦ひこも相あひ共ともに (コラシヨ)

神かみの御道おみちを歩あゆみつつ

ビクくの國くにをば立出たちいでてエーエー (ア、ヨイイセー、ヤツトコセ)

漸やうやく此處ここに來きて見みれば

玉置たまきの村むらのテームスガア娘むすめ

二人ふたりは魔神まがみに捕とらへられ

行方、知れぬと聞きしよりイーイー
(ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

三五教の宣傳使

松彦、龍彦、萬公さま
(コラシヨ)

三人の伴を引連れて
(コラシヨ)

神のまにまに夜の道

上らせ玉ひし勇ましさアアア
(ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

神徳忽ち現はれて

バラモン教のゼネラルや

カーネル始め百軍
(コラシヨ)

一人も残らず言向けてエーエー
(ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

玉置の村に歸りました
(コラシヨ)

清き教の數々を

里庄の夫婦に教へつつ

天國淨土を地のの上に
(コラシヨ)

築かせ玉ひし尊さよオーオー (ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

神の恵みも赫灼に

現はれ玉ひ今此處に (コラシヨ)

瑞の御舎建て玉ひ

皇大神を永久に

コラシヨ (ドツコイシヨ)

齋き奉りし嬉しさよオーオー (ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

ああ村人よ村人よ (コラシヨ)

尊き神の御前に

心を清め身を浄め (コラシヨ)

朝な夕なに参詣で

靈の恩頼を頂けよオーオー (ア、ヨイセイ、ヤットコセ)

此龍彦は師の君に (コラシヨ)

従ひ奉り明日よりは (コラシヨ)

ハルナの都へ立向ひ
（ア、ヨイセー、ヤットコセ）

神の依さしの神業を
（コラシヨ）

仕へ奉りてウブスナの

山にまします大神の

御前に復命致すべし
（ア、ヨイセー、ヤットコセ）

いざこれよりは皆様に
（コラシヨ）

御苦勞になりし御禮を
（コラシヨ）

かねて御暇仕まつる
（ア、ヨイセー、ヤットコセ）

次の先生にお渡し申す
（ア、ヨイセー、ヤットコセ）

と音頭取りと踊り子が遷座式の神酒に酔ひ、
くる迄踊り狂ひ賑々しく祭典の式を納めた。
是より治國別、道晴別、松彦、龍彦
の四人は、チームス一家に暇を告げ、
一先づエルサレムを指して足を速めて出で
て行く。ああ惟神靈幸倍坐世。

第十九章

清瀧（一四二七）

火熱烈しき太陽は

天津御空に晃々と

照國嶽の谷間に

高くかかれる大瀑布

清めの瀧の片邊

小さき庵を結びつつ

二人の男が朝夕に

裸となりて何事か

聲を限りに祈り居る。

此兩人はベルツ、シエールの主従である。左守の司竝にタルマンの爲に右守の職を剥奪され、百日の閉門を申付けられ、恨み骨髓に徹し、妖幻坊の魔法を習つ

て、ビクトリア城を轉覆し、再び勢力を盛り返し、自分は刹帝利となり、シエールを左守司に任じ、一國の主權を握らむと、一心不亂に水垢離をとつてみたのである。七日目の夜、二人が一生懸命に水垢離をとつてみると、山嶽も崩れる許りの大音響と共に、白馬に跨り、宙空より蹄の音夏々と降つて来たのは緋衣を着た坊主姿なりける。これは妖幻坊の兄弟分と聞えたる妖澤坊といふ魔神なり。妖澤坊は二人に向ひ、

妖澤「汝はビクの國の右守司を勤めたるベルツ竝に家令のシエールであらう。汝の願は速に聞届け得させむ。付いては百日百夜の水行をなし、食物は此谷川に棲息する蟹、蠓、蛙を餌食となし、其他の物は一切食ふ可からず。若し誤つて他の食を取る時は、汝の行は全く水泡に歸すべし。又百日の修業中、人に發見されたる時は折角の修業も無効となるべし、必ず用心怠る勿れ。此荒行が濟めば、汝に空中飛行の術を授け、且千變萬化の化身の法を教ゆべし、ゆめゆめ疑ふ勿れ」と嚴かに傳へ、山嶽を揺がし乍ら、再び駒の首を立直し、空中高く姿を消した。二人は有難涙にくれて妖澤坊の後姿を合掌し、呪文を唱へてみた。三十日許り修

業をした時、ベルツは蛙、蠓の毒が中つたのか、俄に腹痛を起し、手足を藻掻き、泡を吹き出しける。シエールは一生懸命に、
シエール「ウラル彦命妖澤坊様、何卒主人の病氣をお癒し下さいませ」
と瀧壺に打たれて、又もや一心不亂に荒行にかかつてゐる。ベルツは虚空を掴んで苦み悶える。此體を見てシエールは命限りに瀧壺に飛び込み、祈念を凝らしてゐた。そこへ十一二才の美はしき女、木の茂みを分けてスタスタと登り來り、忽ち赤裸となつて瀧壺に飛込んだ。シエールはエンゼルが自分の祈りを聞いて、助けに來て呉れたものと思ひ、一生懸命に乙女の姿を伏拜み、感謝の涙にくれてゐる。乙女は二人の男に目もかけず、瀧壺に飛び込み一心不亂に、
乙女「大國常立の大神、何卒々々、父の病氣を救はせ玉へ、假令吾身の命は取られませう共、少しも苦しうは存じませぬ。今父が亡くなつては、又もや右守司ベ
ルツ主従が、如何なる事を致すか知れませぬ。ビクの國の一大事でムいます」
と神言を奏上し、祈り始めた。されど瀑布の轟々たる水音に遮られて、乙女の何事を願ひ居るやは、兩人の耳に入らなかつた。シエールはベルツの側に進み寄り、

頭かしらを撫なで乍ながら、

シエール「モシ旦那様、御安心なされませ。今私いまたくしが妖澤坊えうたくばうをお願ねがひ致いたしましたら、

アレあの通り、天女てんによが天降あまくだられて、貴方あなたの病氣びやうき平癒へいゆの爲ために瀧壺たきつぼにかかつて祈念きねんを

して下くださいます。キツと御病氣ごびやうきの直なほる瑞祥ずめしやうでムいませう。必ずかなら必ずかなら御心配ごしんぱい下ください

ますな。南無妖澤坊なむえうたくばう大明神守だいみやうじんまもり玉たまへ幸さきはへ玉たまへ」

と涙交なみだまじりに願ねがひある。ベルツは不思議ふしぎにも此言葉このことばを聞きくより、神經作用しんけいさようか知らね

共ども、俄にはかに氣分きぶんがよくなり、頭かしらをあげて瀧壺たきつぼを見みれば、花はなを欺あざむく美うるはしき乙女をとめが瀧

壺つぼに打うたれて、白しろい體からだを曝さらし乍ながら、一心不亂いっしんふらんに念ねんじて居ゐる。ベルツは吾身わがみの苦痛くつう

も忘れ立上わすり、

ベルツ「掛卷かけまくも畏かしこき天津御國あまつみくにより下くだらせ玉たまうた天津乙女あまつをとめ様、何卒なにとぞ々々拙者せつしやの願望ぐわんまう

を御聞届おききとどけ下くださいますやうに、之これに付ついては體からだが資本しほんでムいますから、此病氣このびやうきの

一時いちじも早はやく全快致ぜんくわいたし、百日ひやくにち百夜ひやくやの修業しうぎやうが無事ぶじに了をはります様、御願おねがひ申まをします」

と兩手りやうてを合あはせて頼たのみ入いる。乙女をとめは一生懸命いっしやうけんめいに、

乙女「父ちちの病やまひを癒なほさせ玉たまへ」

と祈願きぐわんするのみであつた。稍ややあつて乙女をとめは瀧壺たきつぼを上あがり、身體からだの水みづを拭ふき取り、キ
チンと衣服いふくを着替きかへた。四邊あたりを見れば二人ふたりの男をとこが禪まはしひと一つになつて、一生いっしやうけんめい懸命けんめいに瀧
壺つぼを拜をがんでゐる。乙女をとめはスタスタと歸かへり行ゆかうとするを、二人ふたりは慌あわてて行手ゆくてに跪ひざま
づき、

ベルツベルツ「天津乙女あまつをとめさま様、如何いかがでごいませうか、妖澤坊えうたくぼうさま様の命令めいれいに仍よつて、百日百夜ひやくにちひやくや
の荒行あらぎやうを致いたし、大望たいまうを達たつせむと願ねがつて居をりますが、神様かみさまのお蔭かげで成就じやうじゆするものと
は存ぞんじますか、かやうに病氣びやうきになつては、如何いかにともする事ことが出来できませぬ。何卒御なにとぞおさ

指圖しづをお願ねがひ致いたします」

乙女をとめ「其方そのほうの願望ぐわんまうとは如何いかになる事ことか、詳くはしく陳述ちんじゆつせよ」

ベルツ「ハイ、私はビクの國くにの右守司うもりのかみベルツと申まをす者もの、之これなる男をとこは家令かれいのシエー
ルと申まをす者ものでごいます。ビクトリア城じやうない内うちには惡人あくにんはびこり、左守司さもりのかみ一味いちみの者もの、三
五教なひけうの惡宣傳使あくせんでんしを城內じやうないに引ひきずり込み、拙者せつしやの軍職ぐんしよくを解とき、專横せんわうの限かぎりを盡つくし居を
ますれば、國家こくかの害賊がいぞくを除のぞく爲ために、兩人りやうにんが此處ここにて荒行あらげうを致いたして居をる所ところでごいま
す」

乙女「汝の敵と見なすは左守一人であるか」

ベルツ「左守は申すに及ばず、刹帝利の老耄、其外アール、ハルナ等の悪人を征伐致さねば到底天下は無事に治まりませぬ」

乙女「ホホホホ、其方が噂に聞いた悪虐無道のベルツ主従であつたか。左様な悪企みを致す共、到底成功の望みはあるまい。どうぞや今の内に悔い改めて眞人閒になる氣はないか」

ベルツ「へー、それは何でムいます、決して私欲の爲に致すのではムいませぬ。天下公共の爲に、民の苦しみを助くる慈愛心より、身を犠牲にして、かかる荒行を致して居るのでムいます」

シエール「天津乙女様、何卒々々、吾々の靈をよくよくお査べ下さいまして、正邪の御裁判を願ひます」

と悪人は自分のやつた事を少しも悪と思つて居ない。天下國家の爲に最善の努力を盡してゐると考へてゐるらしい。

乙女「妾は汝の言ふ如き天津乙女ではない。ビクの國の刹帝利ビクトリア王の娘

ダイヤ姫であるぞよ。左様な悪虐無道な企みを致すよりも惟神の本心に立返り、忠良なる臣民として、國家に盡したら何うだ」

ベルツ「ナニ、其方が敵と付狙ふビクトリア王の娘であつたか。エー、天津乙女と見誤り、尊い頭をメツタ矢鱈に下げたのが残念だ。妖澤坊のお示しには、此行中に人間に見付けられては、折角の荒行が水泡に歸するとの事であつた。エー、モウ破れかぶれだ。吾願望の届かぬとあれば、仇の片割れ、鶯殺に致して怨みを晴らしてくれむ。オイ、シエール、荒繩を以て此女を縛り上げよ」

と厳しく命ずれば、シエールは、

「ハイ畏まりました」

と棕櫚繩を取つて、後手に括り、櫂の枝に引かけて、宙空に吊り上げる。乙女は腕もむしれむ許りの痛さを、齒をくひしばり目を塞いで一言も發せず、堪えて居る。

ベルツは之を眺めて心地よげに打笑ひ、

ベルツ「アハハハハ、小ちつペ奴が、こんな所へ俺等の行方を嗅付けてやつて來

やがつたのだな、此奴ア大變だ。此奴を歸なせば、キツと後から左守のハルナ奴、軍隊を率ゐて俺達を召捕に来る算段であらう。王女の身として、かやうな所へ出て來るとは大膽至極、之には何か仔細があるであらう。一度吊り下し、拷問にかけて云はしてみよう、サア下せ」

と嚴命すれば、シエールは又もや綱を緩めて地上に下した。ダイヤは既に目を眩かし齒をくひしばつてゐる。

シエール「ヤア、チヨ口臭い、モウ「うたひ」あがつたとみえる。モシ旦那様、此奴ア駄目ですよ、物を言ひませぬがな」

ベルツ「ナアニ、今日を眩かした所だから、瀧壺へ一遍つつ込め。蛇の叩き殺した奴でさへも、水へ漬ければすぐに蘇生するものだ。サ、早く放り込んでみよ」

「ハイ」と答へてシエールはダイヤ姫の身體を引抱へ、綱を解いて、瀧壺へザンブと許り投込んだ。ダイヤはハツと氣がつき、瀧壺を這ひ上り、其處邊をキヨロキヨロ見廻し、赤裸のまま逃げむとするを、シエールはグツと細腕を握り、以前の槓の根本に引摺り來り、

シエール「コリヤ、ダイヤ姫、幼き女の分際として、斯様な所へ只一人修業に来るとは大膽至極、之には何か仔細があるであらう。吾々兩人が照國山に、王家轉覆の祈願を凝らし居る事を嗅ぎつけ、やつてうせたのであらう。サ、逐一白状致せ。包み隠すに於ては、其方を水責、火責、劍責に致すが、それでも可いか」

ダイヤ「無禮千萬な、主人の娘を捉へて左様な脅迫を致すといふ事があるか。チツと天地の道理を考へて見よ」

ベルツ「エー、喧しい、天地の道理を考へるやうな者が、ビクトリア城轉覆の修業を致すものかい。サ、早く事實を白状致せ。何を願ひに来たのだ。其願の筋から第一に聞いてやらう」

ダイヤ「此照國山は妾兄妹六人が永らく住居してみた馴染のある所だ。父の御病氣を平癒させむが爲に、清めの瀧へ水垢離をとりに来たのだよ。臣下の身分として主人のする事をゴテゴテいふ権利があるか、控えて居れ。年は若く共、ビクの國刹帝利の娘だ。エエ汚らはしい、一時も早くどつかへ姿を隠せ。執拗歸らぬに於ては線香を立てて熏べてやらうか」

シエール「丸切り青大將が座敷へ這上つた時のやうに言つてゐやがる。こんな女
つちよに脅迫されて、此荒男の顔が立つものか、地震天變もここ迄行けば極端だ。
地震ゴロゴロ雷ビリビリとやつて來たやうだ。併し乍らどう考へても、こんな美
しい女をムザムザ殺すのは勿體ない様だ。オイ、ダイヤさま、物も一つ相談だが、
何程お前が王女だといつても、位の高いのは實地の時の間に合ふものでない。荒
男二人と格闘すれば、到底お前は殺されねばなるまい。蛇と蛙のやうなものだか
ら、茲は一つ思案をし直して、旦那様の奥方となり、ビクの國の女王となつて暮
す考へはないか」

ダイヤ「悪逆無道の謀叛人奴、エエ汚らはしい、下りおらう」
ベルツ「何と云つても美しい者だ。そしてこれ丈の膽力があれば、此女を女房に
すればどんな事でも出来るだらう。イヤ、ダイヤ姫様、茲は一つお考へ直しを願
ひます。左守といふ奴は表面忠義らしく見せて居りますが、彼こそ心中深く野心
を包藏する曲者でムいますぞ。刹帝利様は左守に誤られ、ビクの國家を棒に振ら
うとしてゐる。危険至極な今日の場合。眞の忠臣が現はれて支へなくては、萬代

不易の王家は續きますまい……大忠は不忠に似たり、大孝は不孝に似たり、大信は偽りに似たり、大善は大悪に似たり……といふ事がありませう。表面大悪人と見做されたる此ベルツ位、王家や國家を憂ひて居る者はムいませぬぞ。チツと冷静に胸に手を當てて、王家と國家の爲にお考へを願ひ度いものです。よく考へて御覽なさい。貴女の父上は左右の奸臣に誤られ、大切な五人の王子迄悉皆殺さうとなさつたぢやありませんか。何處の國に親が子を愛せない者がありませんか。何が寶だと云つても、吾子位寶はない。其寶を殺さうとなさるのだから、決して之はお父上の心から出たのではムいませぬ、皆左守やタルマンの入れ知恵でムりまするぞ。かやうな悪人を重用するは實に危険千萬でムります。貴方はお若いので、城内の様子を御存じムいますまいが、それはそれはタルマン、キュービットの兩人は天地容れざる大悪人でムいますよ。何卒此急場を救ふ爲に、幸貴方は王家のお血筋、此右守と夫婦になり、國家の大難を未然に防ぐお考へはありませぬか

ダイヤ「エエつべこべと、汝の邪智佞辨聞く耳は持たぬ、汚らはしい。王家がど

うならうが、國家が何うならうが、構つてくれな。何事も天の時節だ。汝等如き有苗輩の關知する所でない。大きにお世話だ、さがり居らう」

と嚴然として言ひ放つた。ベルツ、シエールは、

「最早駄目だ、兩人左右より寄つてかかつて、可哀相乍ら、殺害しくれむ」

と大劍を引抜き、左右より切つてかかるを、ダイヤは身をかはし、飛鳥の如く刃を潜り、樫の大木を木楯に取つて防ぎ戦ひゐる。

斯かる所へブウブウと法螺貝を吹き乍ら、四人の山伏、

「衆生被困厄、無量苦逼身、觀音妙智力、能救世間苦、具足神通力、廣修智方便、十方諸國土、無刹不現身、種々諸惡趣、地獄鬼畜生、生老病死苦、以漸悉令滅」

と觀音經を唱へ乍ら登つて來る。ベルツ、シエールの兩人は四人の姿に驚いて、ダイヤを捨て、着物をかかへ、山上目がけて、荊棘茂る中を雲を霞と逃げて行く。此山伏は治道、道貫、素道、求道、四人の修驗者なりけり。

(大正一二・三・五 舊一・一八 於龍宮館 松村眞澄録)

第二〇章 萬面（一四二八）

ビクトリア城の評議室にはタルマンを初め左守司のキュービット、ハルナ、右守司のエクスが首を鳩めて秘々相談會を始めてゐる。

左守「タルマン殿、寸善尺魔の世の中と申してバラモン軍が退却致し、やれ一心と思ふ間もなく再び右守司のベルツ、シエールが叛逆軍に取圍まれ、國家已に危き所、尊き三五教の宣傳使一行に助けられ、これにてビクの國家も刹帝利家も大磐石と思ふ折、六人の王子女が歸られて益々萬代不易と喜んで居つた所、此度の刹帝利様の俄の御病氣、その上ダイヤ姫様が又もやお行衛が分らなくなり再び城内は黒雲に包まれたも同然、貴方は日夜玉の宮に専仕される以上は、此御病氣の原因や姫様の御行衛がお分りでムいませう。一つ御意見を聞かして頂き度いものですな」

タルマン「何分にも神徳の足らぬ拙者の事なれば、ハツキリした事は申上げ兼ねますが、刹帝利様の御病氣は生靈の祟りと存じます」

左守「何、生靈とは何者の怨靈でムるかな」

タルマン「察する所、前右守司のベルツ、シエールが怨靈と察します。拙者が神殿に於て祈願の最中、煙の如く兩人が現はれ鬼の様な顔をして刹帝利様を睨めつけて居りました。屹度彼奴の生靈に間違ムいますまい」

左守「して、その兩人の所在は分つて居りますか」

タルマン「ハイ、何處だかハッキリは分りませぬが、拙者の靈眼に映じた所によれば、澤山な魔神に誑惑され、深山の谿谷に分け入り大瀑布にうたれて刹帝利様を呪詛の荒行を致して居る様でムいます」

左守「その地名は分りませぬか。地名が分らねば、せめて此城内から何方に當ると云ふ方角位は分るでせうな。さうして姫様の行衛はまだ見當がつきませぬか」

タルマン「ハイ、何でも姫様もその瀧へソツと刹帝利様の御病氣を癒さむため荒行においでになつた所、ベルツ、シエールの兩人が左右より姫様を打殺さむと大刀を揮つて攻めかけてゐる。姫様は大木の幹を楯にとり飛鳥の如く防ぎ戦うてゐなざる場面が靈眼に映じました。併し乍ら地名と方角はまだ分りませぬ。ああ斯

ふ云ふ時に治國別様か、お弟子の一人でも居て下さつたらハツキリ分るであらうに、……ああ惟神靈幸倍坐世。心の曇りたるタルマンに、何卒々々靈眼を開かせ下さいまして、ハツキリした事をお知らせ下さいませ様、三五の大神様、慎み畏みお願い申します」

と兩手を合せて祈願して居る。然し如何しても地名や方角はタルマンの靈力では感知する事が出来なかつた。

左守「はて、困つた事だ。如何したら王様の御病氣が全快致し、姫様が無事にお歸り下さるであらう」

ハルナ「皆様、これから吾々一同が玉の宮へ參拜致し、兔も角無事で姫様がお歸りになる様、刹帝利様の御全快遊ばす様、一生懸命願はうぢやありませんか」

左守「ヤ、それは誠に結構でムる。第一左守、右守が命を神様に捧げて、刹帝利様の御病氣の平癒を祈らねばなるまい。之が臣たるものの道だ。さア右守殿、貴方も用意なされ」

右守「ハイ、承知致しました。私の考へでは、王様の御病氣も日ならず御全快遊

ばし、姫様も近日無事にお歸り遊ばす様な氣分が致します。併し乍ら左守様は御老體、ハルナ様が御名代としてお詣りになれば宜しからう。貴方はビクトリア家の柱石、王様のお側をお離れになつてはいけませぬ。吾々三人が參拜致し御祈願を凝らす事に致しますせう」

左守「然らば拙者は王様のお側を守つて居りませう。御苦勞乍ら早く玉の宮へ御參詣を願ひます」

タルマンは「畏まりました」とハルナ、右守と共に急ぎ玉の宮へ參拜と出掛け

後に左守は只一人雙手を組んで思案にくれてゐる。

そこへ慌ただしく受付のトマスは、襖をソツと開き兩手をつき乍ら、

トマス「左守様に申し上げます。只今三五教の宣傳使のお伴をして來られた萬公さ

まが、六人連れで玉の宮へ御參拜になり、左守様に一度お目にかかり度いと云つ

てお越しになりました。如何致したら宜しうムりませうかな」

左守「ウン、三五教の萬公さまが見えたか。ヤ、それは有難い。併し乍ら治國別

様は御出ではなつてゐないか。治國別様や松彦、龍彦様ならば斯ふ場合に助けて下さるであらうが萬公さまでは心許ない。そして其お連れと申すのは何んなお方かな」

トマス「ハイ、男が三人、女が三人、どうも三夫婦らしうゝいます。

島田漬して丸鬚結うて

主と二人で宮詣り

と云ふ様な陽氣な様子でゝいますよ」

左守「その三人の男と云ふのは治國別さまか、龍彦さまのうちであらう。モシ、さうであつたならば萬公さまはどうも八釜しくて困るから……治國別さまか龍彦さまに、一寸お目にかかりたいと申して呉れ。そして外のお方は應接間にお茶でも出して大切に待たして置くのだ」

トマス「ハイ、承知致しました。直様治國別様を呼んで参りませう」

と急ぎ此場を立つて玄關口に現はれ、

トマス「さア、皆さま、お待ち遠うムいました。何卒應接間の方へお通り下さい。暫らくして左守がお目にかかります。時に治國別様か、龍彦の宣傳使は此處に交つて居られますかな。根ツから萬公さままでは八釜しくて……一寸取込んであるから都合が悪い……と左守様が云つて居られました。何卒萬公さまは此處に御婦人の方と一緒に待つてゐて下さい。さアお二人の中何方でも宜しい、お一人さま、左守の居間へ行つて下さいませ」

シーナ「拙者は玉置村の者でシーナと申すもの、實は治國別様の媒酌によつて里庄の娘スミエル姫と結婚式を擧げ、今日は玉の宮様へ禮詣りを致したのでムいませ」

トマス「へー、それは、マアマアお目出度うムいます。一寸新婚旅行とお洒落遊ばした所ですな。アハ……も一人のお方、貴方は宣傳使ぢやムいませぬか」

アーシス「ハイ、拙者は矢張り玉置の村の者でアーシスと申します。一度左守様にお目にかかり度いと存じ、今度女房を持つたお禮に玉の宮様へ參拜を致し、一

寸御面倒を致しました」

トマス「ハハア、それはお目出度う、新夫新婦が二組もお揃ひになつたのですな。ヤ、萬公さま、お前さまは到頭治國別様に暇を出され、どつかの家で奉公でもしてゐると見えますな」

萬公「エエ八釜しく云ふな。之でも三五教の宣傳使萬公別だ。治國別様から此度新に萬公別の宣傳使と名を頂いたのだ。神徳無限の神司だ。取り込んでゐる事があるとは一體何事か知らぬが、此宣傳使に御相談あれば直様解決をつけて上げる」と、左守様にさう仰有るがよからう」

トマス「へー相變らず大變な馬力ですな。左守様が何と仰有るか知りませぬが、一寸奥へ傳へて來ます。暫時待つて下さいませ」

と早くも此場を立つて左守の居間へ引返した。

トマス「左守様、一寸調べて参りましたが、玉置村の若夫婦が新婚旅行を兼ね、玉の宮様へ参拜を致し歸り道、萬公さまに連れられて、お訪ねをしたのだと云つて居ます。そして萬公さまは治國別様から新に宣傳使號を頂き萬公別となり、無

限んの神力しんりきを與あたへられたと云いつて居をられますが、此方こちらへお通とほし申まをしませうか」

左守さもり「今日こんにちの場合ばあひ、誰たれ彼の容赦ようしやはない。萬公まんこう別わけなんて法螺ほらを吹ふいて居あるのだらう。

併しかし乍ながら萬公まんこうのチヨカさまも三五教あななひけうの宣傳使せんてんしの伴ともに歩あるいて居をつたのだから、何處どこ

かに見込みこみがあるだらう。兔とも角かく「膝ひざとも談合だんがふ」と云いふ事ことがある。早はやく此方こちらへお越こ

し下くださいと云いつて御案内ごあんないして來こい。さうして他ほかのお客きやくさまは珈琲コーヒーでも出だして鄭重ていぢやう

に用ようの濟すむまで待まつて頂いたくのだ。失策ておちのない様やうにして置おくのだぞ」

トマス「ハイ、そんな事ことに抜目ぬけめがムいませうか。直様すぐさま呼よんで參まります。エーエ」

と云いひ乍ながら襖ふすまをピシヤリと締しめ、

トマス「エーエ、忙いそがしい事ことだ。彼あツ方ちやへ行いつたり、此こツ方ちやへ行いつたり、キリキリ

舞まひだ。之これだから、すまじきものは宮仕みやづかへと云いふのだ。ぢやと云いうて外ほかに何なにもこ

れと云いふ藝能げいのうはなし、先まづ玄關番げんくわんばんで辛抱しんぱうするより仕方しかたがないな」

と一人ひとり呟つぶやき乍ながら應接室おうせつしつに慌あわただしく入いり來きたり、

トマス「イヤ、皆みなさま、お待またせ申まをしました。何卒どうぞ珈琲コーヒーなつとドサリ召あがつて、

…五人ごにんの方かたは此處ここに待まつて居あて下ください。…萬公まんこう別わけなんて、宜いい加減かげん法螺ほらを吹ふい

てゐるのだらう。あの萬公は鈴の様に八釜しくて、おまけにデレ助で仕方の無い奴だけど、治國別様の丁稚役をしてゐたのだから少しは靈術も利いて居るだらう。膝とも談合だ。空腹い時には不味ものなし、萬公でも宜いから呼んで来い……と仰有いました。さア萬公別さま、このトマスに跟いて左守の居間迄お越しを願ひます」

萬公「何だ、川獺の様な顔しやがつて失敬ぢやないか。今日の萬公さまは玉置の村の里庄チームス家の若旦那だぞ。これ見い、此様なナイスを女房に持つて新婚旅行を兼ね、玉の宮へ參拜をしたのだ。チツと羨るい事はないか。エー、ダイヤ姫と何方が美しいと見えるか、ヒヒヒヒヒ」

トマス「エへへへへ犬も歩けば棒に當るとか云つて、到頭治國別さまに暇を出され玉置の村の里庄の宅の門掃男となり、お嬢さまのお伴をして詣つて來たのだな。お前のスタイルでそんなナイスが女房に持てるものかい。遠い所で分らぬと云つて、此トマスが一目チャンと見たら決して、はづれツこは無いわい。ウツフフフ」

萬公「エー、馬鹿にすない。左守の奴、ダイヤ姫と俺との縁談をチャチャ入れやがったものだから此爺、仕方無の無い奴だ……と實の所怨んでゐたのだ。そして此通り古今無雙のナイスが……へへへ此萬公さまに首ツたけラバーしたものだから、嫌でもない縁談を……俺もチツとはスエートハートして居たものだから兩方からピツタリと意思投合の結果お粗末乍ら……へん……合衾の式を擧げ新婚旅行と洒落てゐるのだよ。萬公別の腕前には如何だ、獺のトマス、感服しただらう」

スガール「もし、萬公別さま、そんな事云つて下さいますな。妾恥しうムいますわ」

萬公「何が恥しい。天下晴れての夫婦ぢやないか。エへへへ、これから左守司にアフンとさしてやるのだ。ああ愉快々々」

トマス「此様子では、も一度左守様に伺つて來なくちや直様お會せ申す譯には行きませぬワイ。ま一遍伺つて來るまで一寸此處に待つてみて下さいや。そして御主人のお嬢さまを大切に守つてみて下さいや。うかうかすると「此下男は氣が利かぬ」と云つて又放り出されますよ」

と云ひ乍ら、又もや左守司の居間に踵を返し急ぎ行く。

萬公「ハハハハハ、スガールの美貌に肝を潰し魂を有頂天にして居やがるワイ。

さア此れからが三段目だ。オイ、スガール、今日は俺の男を左守の前で賣つて見せるのだから、お前も辛からうがチツと意茶ついて見せて呉れぬと困るよ。夫が妻に對する一生の願だからな」

スガール「ホホホホ、

キツと引締め三筋の絲で

主のお好きに紫檀竿。

焚いて喰はうと焼いて喰はうと萬公さまのお勝手ですわ」

萬公「へへへへそれでこそ三國一の花嫁だ。萬公別、萬歳」

(大正一二・三・五 舊一・一八 於龍宮館 北村隆光録)

第二章 嬉涙（一四二九）

トマスは再び應接の間に現はれ来り、

トマス「ヤア、萬公別さまを初め御一同様お揃ひの上どうか左守の室迄お越しを願ひます。左守様も大變な御心配が起つて居る所ですからどうか貴方方の御經歷話でも聞かして頂ければ幾分かお氣が紛れるでせう。さア案内致しませう。どうかお越し下さいませ」

萬公「よし、左守の爺、萬公別を安く買ひやがつたな。皆一緒に来いなんて、よし、行つてやらう。さア案内せい、皆さま拙者に續いてお出なさいませ。三夫婦揃うてビクトリア城の奥の間迄、玉置の村の里庄の息子が通ると云ふ事は異數でムいますよ。是と云ふのも矢張萬公別の餘光ですからな」

と云ひ乍ら、トマスの後に跟いて長い廊下を潛り、左守司の居間に進み入つた。萬公は左守に向ひ、

「これはこれは左守のキュービット殿、暫くお目にかかりませぬ。吾々は三夫婦

揃うて新婚旅行と出掛け、玉の宮への参拜の歸り途、一度御挨拶に上らないでは濟まないと思ひ、門番がゴテつくのをやつと潜つて此處迄参りました。随分貴方も年が寄りましたねえ。白髪がどつさり生えたぢやありませんか」

左守「八八八八、皆さま好くお出なさいませ。時に萬公さま、拙者の白髪は二十年前から生えて居るのぢや、お前さま今氣がついたか。そして何處に奉公して居るか知らないが、綺麗な娘さまのお伴して居るが、身分相應と云ふ事を考へて今迄のやうな野心を出さないやうにしなさい」

萬公はスガールの肩に手をかけ、

「へへへへへ。もし左守様。ダイヤ姫様とはどうでムいますな。私の女房は、マアザツト此通りでムいます」

左守「これこれ萬公さま、又してもお前さまは心得の悪い。主人のお嬢様を捉まへて女房扱ひをすると云ふ事がありますか。些と心得なさい。」

萬公「へん、濟みまへんなア、おいスガール、左守様に疑の晴れるやうにお前から言つて呉れ。本當に誰も彼も俺を安く買つて馬鹿にして居るからな」

スガール「左守様、初めてお目に懸ります。私は玉置の村のチームスが妹娘スガールと申すものでムいます。バラモン軍に捉へられ猪倉山の岩窟で苦しんで居ました所を、治國別様一行がお出なさつてお助け下さつたのです。中にもこの萬公さまは實は萬公別様と申しまして治國別様のお師匠さまですが、ワザとに部下と化けて剽輕の事許り云つてお出なさるのでムいます。私は治國別様の御媒酌によつて萬公別の宣傳使と夫婦になり、玉の宮へお禮に参りましたその歸りがけ、夫と共に伺ひしました。何卒お見捨てなく今後はお心易く願ひます。そして此方はシーナさまと申し、スミエルと云ふ此姉の夫でムいます。も一組はアーシスさま、お民さまと申しましてこれも新夫婦でムいます」

左守「イヤ、どうも見違ひを致して居りました。萬公別の宣傳使さま、よくマアお尋ね下さいました。併し折入つてお願ひ申度い事でムいますが、聞いては下さいますまいか」

萬公「刹帝利様の御病氣とダイヤ様の行衛が分らないので御心配なさつて居るのでせうがな」

左守は驚いて、

左守「ハイ、お察しの通りでムいます。どうしてマアそんな事がお分りになりましたか」

萬公「何と云つても三五教切つての大宣傳使萬公別でムいます。千里先方の事でも斯うして居つてチヤンと分つて居るのですからなア。併し乍ら此事は城下で一寸聞いて來たのですよ。アハハハハ、本當の事云へば薄紙を顔に當てて物を見る位より分りませぬわい」

左守「冗談はさておいて、萬公別さま刹帝利様の御病氣はどうお考へですか」
萬公「ヤア實の所は玉の宮様に參拜致し祈願の最中隆靖彦、隆光彦と云ふ二人のエンゼルが拙者の前に下らせ給ひ、「刹帝利様はベルツ、シエールの怨靈が惱めて居るから早く汝はホーフスに入り、お助け申せ。さうしてダイヤ姫様は兩人の爲に苦しめられお命も危い所、四人の修驗者に助けられ、やがてお歸りになるから御心配なさらぬやう、お知らせ申せ……」との事でムいます。夫故失禮をも顧みず六人連れでお邪魔を致したのでムいます」

左守さもり「成程なるほどタルマンの伺うかがひにも左様さやうの事ことを申まをして居をりました。夫それに間違まちがひはごいまい
すまい。ああ有難ありがたうごいまいました。何卒どうぞ直様すぐさま、御苦勞ごくろう様ながら、刹帝利せつていり様の御病氣ごびやうき
平癒へいゆのため御鎮魂ごちんこんをお願いねがひ申まをす譯わけには参まゐりますまいか」
萬公まんこう「拙者せつしやが別に刹帝利せつていり様のお居間ゐまに参まゐらずとも萬公まんこう別此城わけこのしろに入るや否いなや神徳しんとくに
恐れおそれ二人ふたりの怨靈をんりやうは雲くもを霞かすみと逃にげ失うせました。やがてニコニコとして此處ここにお出いで
なるでせう。又またダイヤ姫様ひめさまも修驗者しうげんじやに送おくられて此處ここへお歸かへりなさりませうから、
先づまづ悠ゆつくり落付おちつきなさいませ」
左守さもり「ハイ有難ありがたうごいます。それで一寸安心ちよつとあんしんを致いたしました。時ときにアーシスさまと
やら貴方あなたはどこともなしに倅せがれのハルナに似にて居ゐるやうだが、貴方あなたの生おひ立たちを聞き
して貰もらう事ことは出で来きますまいかな」

アーシス「ハイ」

と云いつたきり、早はやくも涙なみだをハラハラと流ながして居ゐる。

萬公まんこう「エエ アーシスさま氣きの弱よわい、何なにを泣ないて居ゐるのだ。何故なぜ堂々だうだうとお名乗なり

なさらぬか」

アーシス「ハイ、それでも何だか云ひかねます」

萬公「もし左守さま、貴方のお子さまと云ふのはハルナさま只お一人ですか」

左守「ハイ、まアまア一人でムいます」

萬公「まアまア一人とは、チツと曖昧ぢやありませんか。奥様の目を盗んで、下

女の部屋へして腹を膨らせた事はありませんか」

左守「ハイ何分若き時にはいろいろの不仕鱈の事もムいました。餘り恥かしくて

お話が出来ませぬ」

萬公「もし貴方の落胤が今無事で生きて居られたら貴方は喜んで面會しますか。

イヤ親子の名乗りをしますか。先決問題として聞いて置きたいものです」

左守「女房には死別れ、此通り年は寄り、一人の倅のハルナに女房をもたせ、今

では一寸一安心したものの、ハルナの兄に當る、モンテスと云ふ倅があつた筈で

ムいます。世間の手前、或田舎へ金をつけて子にやつた所、不幸な倅で兩親は無

くなり、何處へ行つたか分らぬと云ふ噂を聞いて居りますが、今となつて思へば

實に残念な事をしました。斯う年が寄つて何時天國參りをするか分らぬ身の上、

せめて生前に一度其倅に遇ひ度いと神様を念じて居ります。どうか貴方の御神力で倅の所在を見て頂く譯には参りますまいかなア」
と鼻汁を啜りながらグタリと萎れる。

萬公「もし左守さま、貴方の御賢息モンテス様は立派な奥さまを持つて、立派に暮して居られますよ。その又奥さまが一通りの人ではありませぬ。「提燈に釣鐘」と云ふやうな、身分から云へば懸隔のある御夫婦で△います」

左守「何、倅が立派に暮して居りますか、それは有難い事で△います。さうして何處に居りますか」

萬公「ハイ只今の所在はビクの國、ビクトリア城内、左守の室内に、お民の方と云ふ奥様と萬公別に従ひお出になつて居ります。それ、このお方ですよ」

とア－シスを指さす。左守はア－シスの顔を熟視し乍ら、

「ア－お前は倅であつたか。どこともなしにハルナに似て居ると思つて最前から不審を抱いて居たのだ。まア無事で居てくれたか。さうしてお前の嫁と云ふのはどのお方か」

アーシス「アアお父さまで△いましたか。何卒一度お目に懸り度いと、寝ても醒めても忘れる暇は△いませなんだ。されど賤しき首陀に落ちて居る身の上、到底尊い左守様に御面會は叶ふまいと諦めて居りました」

と男泣に泣く。左守も兩眼に袖を當て、夕立の如き涙を拭ひながら嬉しさ餘つて一言も發し得ず、アーシスの身體に抱きつき嘔啼泣きして居る。

お民は兩人の背を兩手で撫でながら、

お民「お父さま、旦那様、何卒潔ようして下さいませ。私迄が悲しくなりますからな」

左守「アお前が倅の嫁であつたか、好う來て呉れた。まあ綺麗な女だな。

倅も嘸喜んで居るだらう。私も嬉しい……」

と又もや兩眼に涙を湛へて泣きじやくる。

萬公「エー見つともない、チツと確りなさいませ。萬公迄が悲しくなつて來まし

た。もしもし左守さま、此お民さまは誰人の娘だと考へて居なさるか。勿體なくも刹帝利様の落胤玉手姫様で△いますぞ。チ又の村の卓助の家へお下しになつた

王女様で、今はお民と名乗つて居られます」

左守はこれを聞くより驚いて五足六足退き、両手をつかへ疊に頭を下げ、

「ハハア貴女様が王女様で△いましたか。存ぜぬ事とて御無禮を致しました。あ
あ勿體ない。賤しき吾々が倅の女房とおなり下され、冥加に盡きはせぬかと心配
で△います。何卒お許し下さいませ」

お民「お父さま、何を仰有います。そんな事を云うて下さると私は苦しう△いま
す。何卒、「お民お民」と呼び付けにして下さいませ」

萬公「サアサア親子の名乗が濟んだ上は涙は禁物だ、些つと歌でと歌ひませう」

斯く云ふ所へ、カルナ姫は襖をそつと押し開き叮嚀に辭儀をしながら、

「お客様、よくお出下さいました。何卒御悠りと御休息を願ひます。時にお父上
様、刹帝利様が俄に御氣分がよくなり、御元氣におなりなさいました。「左守が
心配して居るだらうから、早く知らせて来い」との君の仰せ、何卒お喜び下さい
ませ」

左守「何、刹帝利様の御病氣が御快癒なされたとな。ああ有難い有難い、これと

云ふのも全く三五教の神様の御守護、ああ惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世』
と嬉し涙に又掻き曇る、カルナは早々に此場を立ち去り刹帝利の居間に急ぎ行く。
（大正一二・三・五 舊一・一八 於龍宮館 加藤明子録）

第二章 比丘（一四三〇）

左守司のキュービツトは六人の客をトマスに命じ叮嚀に應接させ置き乍ら、欣々として刹帝利の居間に伺候した。刹帝利はソオフアの上に横たはりヒルナ姫に介抱され乍ら、稍快方に向つたので顔色も俄によりくなり、ニコニコとして居る。左守は両手を仕へ、

「刹帝利様、お氣分がよくなりましたさうでムいますなア、左守も尊顔を拜し何となく氣分が浮々と致して來ました。何卒此後の御養生が肝腎でムいますから御注意下さいませ」

刹帝利「窓外は庭園の樹木が風に揺られて自然のダンスをやつてゐる。涼しい夏の風は自然の音楽を奏で、豫が心を慰めてくれる。實に病の身は苦しいもので、此天然の恩恵も左まで愉快に思はなかつたが、此通り氣分がよくなると又格別にすべての物が面白くなつて來たやうだ」

左守「左様でムいます。庭木に風が當つて自然の音楽を奏する様は、丸でクラブイコードの音色の様でムいます。オルレグレットな氣分が漂ひますなア」

刹帝利「左守、何か珍らしき話を聞かして呉れないか」

左守「ハイ、別に珍らしい御話もムいませぬが、姫様の事は御心配なさいますな。

屹度神様の御蔭で日ならず御歸り遊ばすさうでムいます。貴方の御病氣がオルレ

グレットに赴いたのも全く三五教の宣傳使萬公別さまの御骨折でムいます。萬公

別様がわざわざ吾君の御悩みを御案じ遊ばしてエンゼルさまの命令だと云つて來

て下さいました。其時刻から御病氣が輕快に向つたのでムいます」

刹帝利「何、三五教の萬公別様が來て下さつたと云ふのか。而して姫は日ならず無

事に歸ると申されたか」

左守「ハイ、あの宣傳使の御言葉には少しも間違ひはムいませぬから、御安心下さいませ。今私の居間で御休息を願つて居ります。而して刹帝利様に珍らしい御話を申し上げたいのは、外ではムいませぬ。恥かし乍ら今より二十五年以前下女を孕ませ、男の子を産み落としモンテスと名をつけて首陀の家へやつて置きました。其倅が立派な奥方を伴つて只今萬公別の宣傳使と共に城内に参り、親子の對面を致し、力一杯嬉し泣きに泣いて來た所でムいます。イヤもう埒もない事を致しまして御恥かしうムります」

刹帝利「それは結構だつた。定めてモンテスも喜んだであらうなア。御前も嘸嬉しかつただらう。アアそれに就いても思ひ出すのは、チ又の里へ里子にやつた姫は何うなつたであらう。未だ無事で此世に生きて居るであらうか。年が寄るにつけて氣が弱つたと見え、民間に與へて縁を切つた子供の事までが思ひ出され、せめて息ある内に一度何とかして會ひたいものだが、仄に聞けば養家の兩親は早くも世を去り、娘の行方は知れぬといふ事だ。定めて難儀をして居るであらう」と

と懔然として首垂れる。左守も涙を流し乍ら、

左守「吾君様、姫様がモシヤ此世に御無事で居られましたならば、貴方は快く御會ひなさいますか」

刹帝「久離切つても親子だ。どうかして一度娘に會ひたいものだ。會うて娘に詫をせねばなるまい。アア可哀相な事をしたものだ」

ヒルナ「左守殿、萬公別の宣傳使様に御尋ね致したら姫様の所在が分りはせよまいかな。一つ願つて貰ひたいものだ。吾君様も大變に姫様に憬がれてゐられま
すから、どうか一つ願つて見て下さいなア」

左守「實の所は恐れ多い事であります、私の倅モンテスの妻となり、立派な服装をして夫婦仲よく玉の宮へ御參拜になり、宣傳使と共に今私の居間に休んで
ゐられます」

刹帝「ナニ、姫が城内へ来て居るといふのか。そして御前の倅と夫婦になつて居
るのか。夫れは結構々々、これも何かの因縁だ。一時も早く姫に會ひたいものだ」

左守「御差支さへなくば直様御供をして参りませう」
ヒルナ「吾君様、妾が御迎へして來ますから、寸時御待ち下さいませ。サー左守

殿参りませう」

とヒルナ姫は欣々として刹帝利の許しを受け、六人の客室に進み行く。萬公別は一生懸命に刹帝利の病氣平癒とダイヤ姫の無事歸城せむ事を五人の男女と共に祈つてゐる眞最中であつた。ヒルナ姫は襖の外に立つて左守と共に祈願の濟む迄待つて居た。ヒルナは折を見計らひ、サツと襖を引き開け、叮嚀に兩手をついて、ヒルナ「三五教の宣傳使様、よくまあ吾君の御病氣を御助け下さいました。有難うムいます。就てはお民の方に刹帝利様が一度面會がしたいと仰せられますから、何卒皆さま御一緒に御居間まで来て下さいませぬか」

萬公「ア、貴方はヒルナ姫様、先づ先づ御無事で御目出度う存じます。イヤもう大い御世話に預つて居ります。サ、皆さま、姫様の御後から参りませう」

と一同を促しぞろぞろと六人は左守、ヒルナの後に従つて、王の居間に進み行つた。

萬公「刹帝利様、今春は師の君と共に永らく御世話に預りました。私は玉置村の里庄の養子となり、女房を引き連れて玉の宮へ参拜をいたしました處、隆靖彦、

隆光彦のエンゼルが忽ち御降臨遊ばし、刹帝利の御病氣の原因や姫様のお行衛を御知らせ下さいましたので、一寸御訪問致しました」

刹帝利「エライ御厄介に預りまして有難うムります」

萬公「此方は王様の御落胤子又の村のお民さまでムいます。新婚旅行を兼ね玉の

宮へ御参拜になつたのでムいます」

刹帝「アー其方が姫であつたか。ようまあ無事でめてくれた。折角城内に生れ乍ら首陀の家へ落したのは、私が悪かつた。何卒許してくれ。お前は玉手姫と云う

たであらうがな」

お民「ハイ、玉手姫でムいます。お父さま、御無事で御目出度うムいます。會ひ度うムいました」

と两眼よりハラハラと落涙してゐる。刹帝利も身を起し、玉手姫の手を握つて嬉し涙に暮れ、暫し無言の儘、互に抱ついて啜り泣いてゐた。斯かる處へ慌ただしく玉の宮の拜禮を了へて歸つて來たタルマン、エクス、ハルナの三人は出で來り、両手をつき乍ら、

タルマン「刹帝利様に申上げます。ダイヤ姫様が修験者に送られて、只今無事に御歸りになりました。御目出度うムいます」

刹帝「アー嬉しい事が重なれば重なるものだ。サ早くダイヤと修験者を此處へ御案内申しや」

タルマンは只一人「ハイ」と答へて此場を立去り、暫くあつてダイヤ姫、修験者四人を伴ひ、欣々として入り来り、

タルマン「吾君様、ダイヤ姫様が御歸りでムいます」

刹帝「ヤ、其方はダイヤ姫、ようまあ無事に歸つてくれた。お前は一體何處に行つて居たのだ」

ダイヤ「ハイ、父上の御病氣御全快を祈願せむと、住み馴し照國山の清瀧に水垢離をとり居りまする處へ、前の右守司のベルツ及びシエールの兩人現はれ来り無體な事を申し、終には雙方より妾を殺さうといたしましたので、櫛の根を楯にとつて防ぎ戦ふ折しも、山彦を驚かして聞え来る法螺の聲追々近づくと見ると共に四人の修験者が現はれて、妾の危難を御救ひ下され、此處迄送つて来て下さいま

した。何卒御禮を申して下さいませ」

刹帝「何れの修驗者が存じませぬが、よくまあ娘を救けて下さいました。サア、何卒御緩りと御休息下さいませ」

治道「拙者は御見忘れになつたか知りませぬが、元はバラモン教のゼネラル鬼春別でムいます。此三人は久米彦、スパール、エミシでムいますが、治國別様の御

教を承り、菩提心を起し修驗者となり、私は治道居士、久米彦は道貫居士、スパールは素道居士、エミシは求道居士と名を改め、照國山の清めの瀧に修業に参らむ

と法螺貝を吹き鳴らし、上りて見れば姫様の御遭難、直様悪者を追散らし、此處迄送つて参りました」

と一伍一什の物語に、刹帝利を始め一同はアツと許りに驚き、互に顔を見合せて少時言葉も出なかつた。刹帝利は殆ど會見絶望と諦め居たりし二人の姫に廻り會

ひ、嬉し涙を浮かべ乍ら、両手を合せて、三五教の大神に感謝の祈願を奏上し始めた。左守の司も吾子に會ひし嬉しさに、同じく合掌し感謝の辭を奉つてゐる。八

ルナは思ひも寄らぬ兄のモンテスに會つて兄弟の名乗りを上げ悦び勇む。玉手姫

は父に逢ひ、又妹のダイヤ姫に思はず面會して歡喜の涙に咽んでゐる。

儲治道、道貫、素道、求道の四人の修驗者は刹帝利の依頼に依つて玉の宮の守護役となり、頭を丸めて三五の教を四方に宣傳し、代る代る各地に巡錫して衆生濟度に一生を捧たり。頭髪を剃り落し教を宣傳に廻つたのは、此四人が嚆矢である。而してビクの國の玉の宮から始まつたのだから、後世頭を丸め衣を着て宣傳する聖者を比丘と名づくる事となつたのである。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・三・五 舊一・一八 於龍宮館 外山豊二録)

(昭和一〇・六・一三 王仁校正)

~~~~~

靈界物語 第五五卷 眞善美愛 午の巻

終り